

富地原神屋崎

福岡県宗像市富地原所在遺跡の発掘調査報告

宗像市文化財調査報告書

第41集

1996

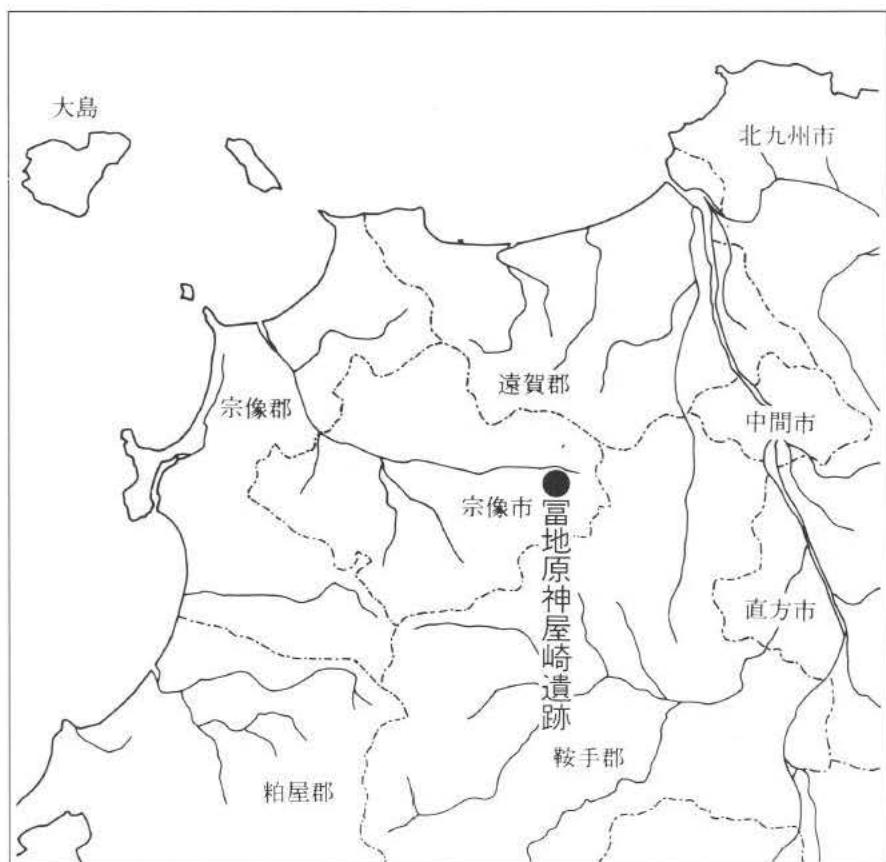
宗像市教育委員会

F U J I W A R A K O Y A Z A K I

富地原神屋崎

福岡県宗像市富地原所在遺跡の発掘調査報告

宗像市文化財調査報告書 第41集



1996

宗像市教育委員会

序 文

宗像市は、福岡市と北九州市の中間に位置し、両大都市の通勤圏として宅地化が進みました。昭和38年に始まった自由ヶ丘団地の造成、昭和41年に始まった日の里団地の造成、さらには2つの大学の進出が加わり、「学術・文化・国際交流都市」を目指して発展を続け今日に至っております。

このような急速な都市化と併行して、昭和47年には農業振興地域の指定を受けて農用地の計画的利用を進め、県営圃場整備等による農業基盤整備事業が行われております。

大型の農業基盤整備は、事業規模が大きいだけに自然環境や歴史的景観の大幅な変化を伴うものであり、残念ながらほとんどの埋蔵文化財は消滅の危機にさらされ、緊急な対策を常に迫られています。

このような状況の中で失われ行く埋蔵文化財に対して、不十分ながらも記録保存に努め、多くの成果をあげてまいりました。

今回の報告書は平成3年度に発掘調査を実施した富地原神屋崎遺跡の記録を納めており、なかでも百数十点ほど出土した古墳時代の滑石臼玉をはじめとする未製品は、当時の玉つくり工程を伺える好資料であります。

最後に、本書が広く文化財保護および学術研究に貢献することを念願いたしますとともに、発掘調査全般にわたってご協力をいただいた多くの方々に心からの感謝の意を表する次第であります。

平成8年3月29日

宗像市教育委員会
教育長 森 下 照 清

例　言

1. 本書は、平成3年度富地原地区県営圃場整備に伴って実施した富地原神屋崎遺跡の埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、宗像市教育委員会が事業主体となって実施した。
3. 福岡県文化財番号は330530とする。
4. 遺構は、呼称を全て記号化し、住居跡および掘立柱建物はS B、溝状遺構はS D、柱穴はS P、土坑はS K、不明遺構はS Xとする。
5. 本報告書の遺物番号は、すべて通し番号である。
6. 測量は、国土調査法第Ⅱ座標系を用い、方位は磁北である。
7. 遺構の実測は主に白木英敏が行い、安部裕久の協力を得た。
8. 遺物の実測は白木が行つた。
9. 遺構、遺物の製図は吉田佳世、中原美知子、多比良佳奈子が、遺物の整理は西村広子、田代貞子、武田博子、田崎絃子、東和子、濱田広美が行つた。
10. 遺構、遺物の写真撮影は白木が行つた。
11. 本書の執筆、編集は白木が行つた。

本文目次

第1章 序説	1
1. 調査の経過	1
2. 位置と環境	2
第2章 調査の内容	7
1. 土坑	7
2. 壺穴住居跡	34
3. 掘立柱建物跡	67
4. その他の遺構・遺物	70
I) SK8・SB14接合遺物	70
II) 柱穴出土遺物	70
III) 表面採集・包含層・各遺構混入遺物	73
第3章 まとめ	75
1. 弥生時代	75
2. 古墳時代	75
I) 住居のあり方について	75
II) 滑石製品の生産について	78

挿図目次

第1図 周辺遺跡分布図 (1/25,000)	3
第2図 事業計画図 (1/2,000)	4
第3図 富地原神屋崎遺跡遺構配置図 (1/200)	5・6
第4図 SK1～6遺構実測図 (1/40)	8
第5図 SK1～3・6・7出土遺物実測図 (1/3・1/2)	9

第6図	S K 7～10遺構実測図 (1/40)	10
第7図	S K 8 出土遺物実測図① (1/3)	11
第8図	S K 8 出土遺物実測図② (1/3)	12
第9図	S K 8 出土遺物実測図③ (1/3)	13
第10図	S K 8 出土遺物実測図④ (1/3)	14
第11図	S K 8 出土遺物実測図⑤ (1/2)	15
第12図	S K 8 出土遺物実測図⑥ (1/1)	16
第13図	S K 8 出土遺物実測図⑦ (1/1)	17
第14図	S K 11～21遺構実測図 (1/40)	22
第15図	S K 11・12・14・17出土遺物実測 (1/3)	23
第16図	S K 18・19出土遺物実測図 (1/3)	25
第17図	S K 21出土遺物実測図 (1/3)	26
第18図	S K 22～29・31遺構実測図 (1/40)	27
第19図	S K 27出土遺物実測図① (1/3)	29
第20図	S K 27出土遺物実測図② (1/2・1/1)	30
第21図	S K 32～36遺構実測図 (1/40)	31
第22図	S K 28・31・33・34出土遺物実測図 (1/3)	32
第23図	S B 1 遺構実測図 (1/60)	34
第24図	S B 2 遺構実測図 (1/60)	35
第25図	S B 1 b・S B 2 出土遺物実測図 (1/3・1/1・1/2)	36
第26図	S B 3 遺構実測図 (1/60)	37
第27図	S B 3 出土遺物実測図① (1/3)	39
第28図	S B 3 出土遺物実測図② (1/3・1/2)	40
第29図	S B 4 遺構実測図 (1/60)	41
第30図	S B 5 遺構実測図 (1/60)	42
第31図	S B 4・5 出土遺物実測図 (1/3・1/1)	43
第32図	S B 6・7 遺構実測図 (1/60)	44
第33図	S B 6 出土遺物実測図① (1/3)	46
第34図	S B 6 出土遺物実測図② (1/3・1/1)	47

第35図	S B 7 a 出土遺物実測図 (1/3・1/2)	49
第36図	S B 7 b 出土遺物実測図 (1/3・1/2)	51
第37図	S B 8 遺構実測図 (1/60)	52
第38図	S B 9 遺構実測図 (1/60)	53
第39図	S B 10・11遺構実測図 (1/60)	54
第40図	S B 12遺構実測図 (1/60)	55
第41図	S B 8・10~12出土遺物実測図 (1/3)	56
第42図	S B 13遺構実測図 (1/60)	57
第43図	S B 14遺構実測図 (1/60)	58
第44図	S B 13・14出土遺物実測図 (1/3・1/2)	60
第45図	S B 15遺構実測図 (1/60)	61
第46図	S B 15出土遺物実測図 (1/3・1/2)	62
第47図	S B 16遺構実測図 (1/60)	63
第48図	S B 17~19遺構実測図 (1/60)	64
第49図	S B 16~18出土遺物実測図 (1/3・1/2)	65
第50図	S B 20遺構実測図 (1/60)	67
第51図	S B 21遺構実測図 (1/60)	68
第52図	S B 22遺構実測図 (1/60)	69
第53図	S K 8・S B 14接合遺物実測図 (1/3)	70
第54図	S P 出土遺物実測図 (1/1・1/2・1/3)	72
第55図	表面採集・包含層・各遺構混入遺物実測図 (1/1・1/2・1/3)	74
第56図	群構成および滑石出土遺構配置図	76

表 目 次

表1	豎穴住居跡一覧表	81
表2	S K 8 出土滑石一覧表	82
表3	その他の遺構出土滑石一覧表	85

図版目次

- | | | |
|--------|----------------------------|------------------------|
| カラー図版1 | (1) 富地原神屋崎遺跡遠景(北から) | (2) 調査区全景(東から) |
| カラー図版2 | (1) SK8出土滑石(臼玉製作の各工程) | (2) SK8出土滑石剥片 |
| 図版1 | 富地原神屋崎遺跡周辺の航空写真(1/12,500) | 昭和53年6月撮影 |
| 図版2 | (1) 調査区全景(北から) | (2) SK1(東から) |
| 図版3 | (1) SK2(東から) | (2) SK3・4・5(西から) |
| 図版4 | (1) SK6(西から) | (2) SK7(西から) |
| 図版5 | (1) SK8遺物出土状況(西から) | (2) SK8(西から) |
| 図版6 | (1) SK21(西から) | (2) SK32・33・34・36(北から) |
| 図版7 | (1) SB1(東から) | (2) SB2・3・4(西から) |
| 図版8 | (1) SB5(東から) | (2) SB6・7(東から) |
| 図版9 | (1) SB8(東から) | (2) SB9(西から) |
| 図版10 | (1) SB10(北東から) | (2) SB11(北西から) |
| 図版11 | (1) SB12(北から) | (2) SB13(北東から) |
| 図版12 | (1) SB13・14(東から) | (2) SB15(南から) |
| 図版13 | (1) SB16(東から) | (2) SB17(東から) |
| 図版14 | (1) SB18(東から) | (2) SB20(南西から) |
| 図版15 | (1) SB21(南東から) | (2) SB22(北西から) |
| 図版16 | SK1・3・7・8出土遺物 | |
| 図版17 | SK8出土遺物 | |
| 図版18 | SK8出土滑石① | |
| 図版19 | SK8出土滑石② | |
| 図版20 | SK14・18・19・21・27・28・33出土遺物 | |
| 図版21 | SK33・SB2・3出土遺物 | |
| 図版22 | SB3出土遺物 | |
| 図版23 | SB4・5・6出土遺物 | |
| 図版24 | SB7出土遺物 | |
| 図版25 | SB8・12・13・14出土遺物 | |
| 図版26 | SB15・16出土遺物及びSB14・SK8接合遺物 | |
| 図版27 | SP出土遺物及び各遺構混入遺物 | |
| 図版28 | 表面採集及び各遺構混入遺物 | |

第1章 序 説

1. 調査の経過

宗像市は、福岡市・北九州市の中間に位置しており、両大都市の通勤圏内にあって急速なベットタウン化が進み、宅地造成や道路整備など開発の波が押し寄せている。かつて純農村であった本市においても農業経営に都市近郊型の複合経営を目指す生産基盤の整備が進められている。今回の調査は、農業基盤整備事業の一つである富地原地区県営圃場整備事業にともなう事前の緊急発掘調査である。事業規模が大型であるために、確認された遺跡の現状保存は困難を極めており、盛土等による可能な限りの保存対策を講じてきたが、消滅が必至の区域については記録保存という形で対処した。

本書は平成3年度に実施された富地原地区県営圃場整備事業にともなう3件の緊急発掘調査のうち富地原神屋崎遺跡について報告するものである。

富地原神屋崎遺跡は、新立山（標高325.7m）から北に派生する舌状丘陵の西側縁辺に所在する。圃場整備事業で切り盛り調整がとれず、削平される範囲について試掘調査を実施し、その結果、竪穴住居跡や土坑、柱穴など遺構の確認された2,300m²について調査区を設定し、緊急発掘調査を行う運びとなった。

検出した遺構には掘立柱建物跡3棟、竪穴住居跡19棟、土坑35基、柱穴群などがあり、弥生時代、中世の遺物が若干出土するものの、その主体は5世紀後半頃～6世紀前半にかけての集落跡である。遺構の残存状況は決して良好ではなかったが、注目すべきは滑石製品の生産に従事する集落と考えられることである。SK8をはじめ住居跡や土坑から多数の滑石原石、剝片に混じって滑石製臼玉・有孔円板の未製品などが百数十点ほど出土しており、製作工程を推定できる好資料となつた。発掘調査は平成3年6月1日から着手し、同年9月4日で終了した。

なお事業は次の組織で行った。

組 織

（1）平成3年度 発掘調査組織構成

総括	宗像市教育委員会	教育長	森下照清
		教育部長	中山宏基
		社会教育課長	吉田繁利
		文化係長	尾山清

庶務・会計	主事	原俊一
発掘調査担当	技師	安部裕久
	嘱託	白木英敏

(2) 平成7年度 報告書作成組織構成

総括	宗像市教育委員会	教育長	森下照清
		教育部長	中野和人
		社会教育課長	藤野英美
		文化係長	原俊一
庶務・会計		文化係長	原俊一
報告書担当		技師	白木英敏

今回の発掘調査に当たっては福岡農林事務所、宗像市農業振興課、富地原土地改良区の方々にご協力いただいた。また、調査を進める上で多くの方々のご指導、助言、応援をいただいた。この場を借りて心からお礼申し上げます。

2. 位置と環境

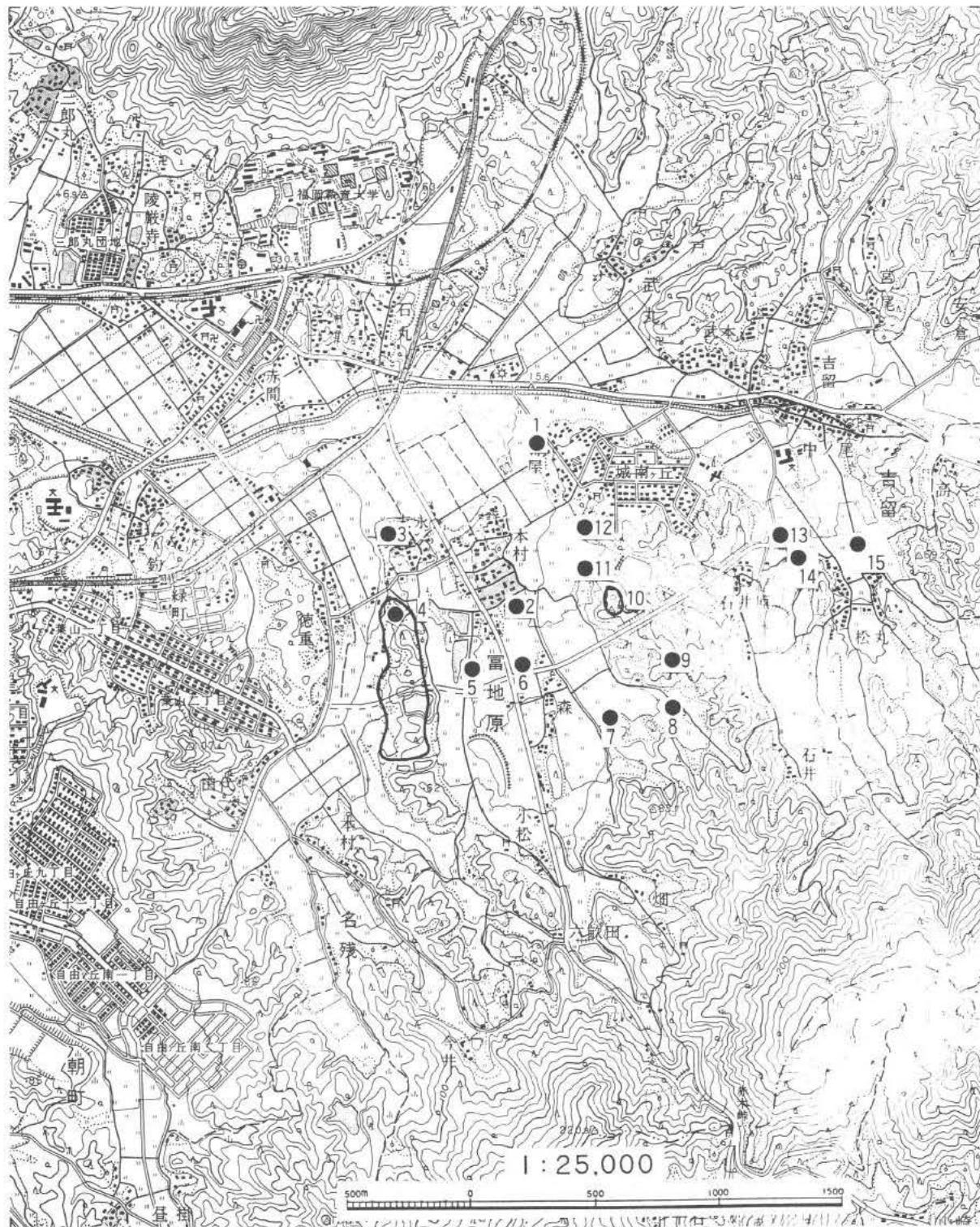
富地原神屋崎遺跡は、福岡県宗像市大字富地原（字神屋崎）2005番地ほかに所在し、新立山（標高325.7m）から北に派生する舌状丘陵の西側縁辺、標高15～16mの範囲に営まれている。

周辺遺跡については既刊の富地原地区圃場整備関係の報告書で再三触れられているためここでは割愛し、以下に文献名を掲げておく。

宗像市教育委員会「富地原上瀬ヶ浦」宗像市文化財調査報告書第38集 1994

宗像市教育委員会「富地原川原田Ⅰ」宗像市文化財調査報告書第39集 1994

宗像市教育委員会「富地原森」宗像市文化財調査報告書第40集 1995



- | | | |
|------------------|-------------|--------------|
| 1 富地原神屋崎遺跡 | 2 富地原岩野A遺跡 | 3 富地原森崎遺跡 |
| 4 富地原梅木遺跡(名残遺跡群) | 5 富地原岩野B遺跡 | 6 富地原森遺跡 |
| 7 富地原川原田遺跡 | 8 富地原上瀬ヶ浦遺跡 | 9 富地原上瀬ヶ浦B遺跡 |
| 10 富地原明天寺遺跡 | 11 富地原古賀遺跡 | 12 富地原深田遺跡 |
| 13 武丸高田遺跡 | 14 武丸小伏遺跡 | 15 吉留京田遺跡 |

第1図 周辺遺跡分布地図 (1/25,000)



第2図 事業計画図 (1/2,000)



第3図 富地原神屋崎遺跡遺構配置図 (1/200)

第2章 調査の内容

1. 土坑

S K 1 (図版2、第4図)

調査区の北東端に位置し、平面形は隅丸長方形で長径2.8m、短径1.7mを測る。

出土遺物 (第5図)

土師器 (001～005) 001～003は甕である。001は口縁部を「く」字形に外反し、内頸部直下は接合部で剥離している。復元口径15.0cmを測る。002・003は風化の進んだ小片である。口縁部は丸みをもって外反し、端部を僅かに肥厚させる。

004は壺である。体部下半を欠くが、復元口径は13.6cmを測る。005は鉢である。口縁は強く短く外反し、端部を断面方形に收める。

須恵器 (006) 壺蓋の口縁部小片である。天井部は平らで、天井部と口縁部の境をなす稜は鈍く、口縁端部は断面方形に收める。調整は天井部が稜線の付近まで回転ヘラ削りで、他はヨコナデである。焼成は軟調で白灰色を呈しており、風化が進んでいる。

S K 2 (図版3、第4図)

調査区の北側に位置し、S B21の柱ハを切っている。平面形は不整長方形で長径2.2m、短径1.65mを測る。

出土遺物 (第5図)

土師器 (007・008) 007は甕か鉢の口縁部片であろう。胴部はほとんど張らず、口縁部は緩やかに外反する。

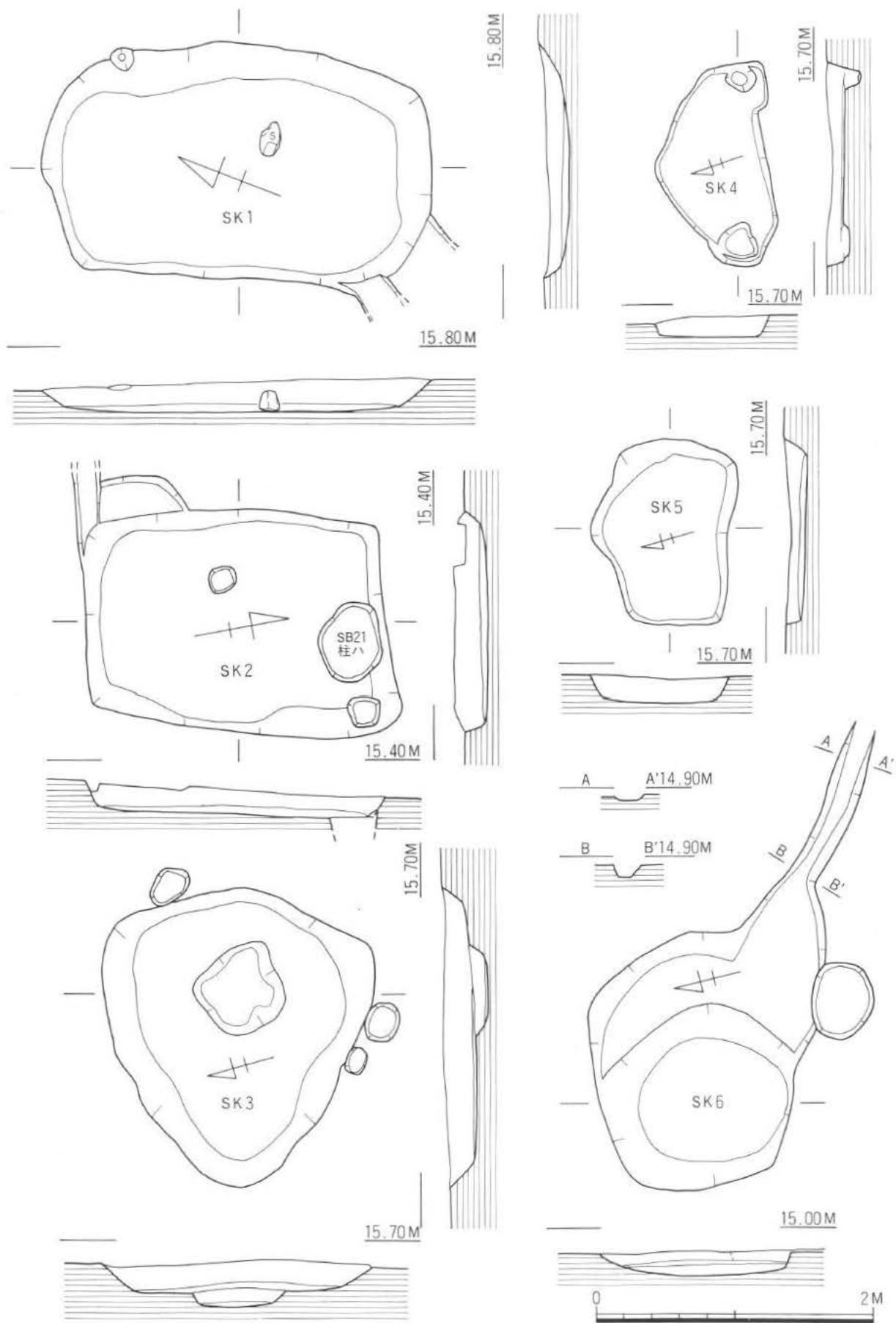
008は甕の底部小片である。円形の穿孔が一ヶ所残るのみで、全体の構成は不明。

S K 3 (図版3、第4図)

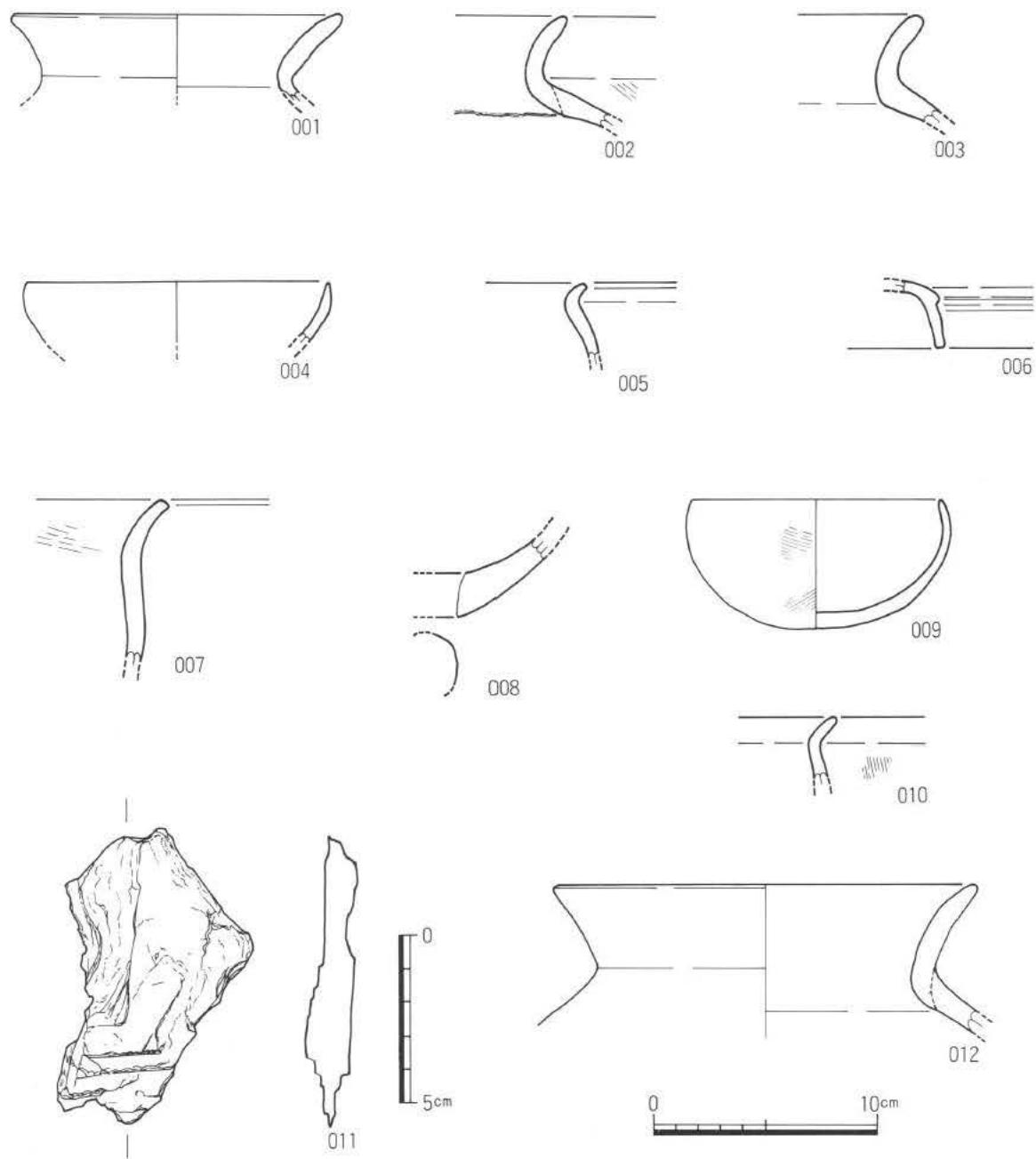
調査区の北東端、S K4・5の北に位置し、平面形は不整楕円形で長径2.15m、短径2.0mを測る。

出土遺物 (第5図)

土師器 (009・010) 009はほぼ完形の壺である。丸底で深みがあり、体部は内弯しながら立ち上がる。口縁部をヨコナデによって僅かに内傾させる。外面はハケ目の後ナデで仕上げており、内面は丁寧なナデを施す。



第4図 SK1～6 遺構実測図 (1/40)

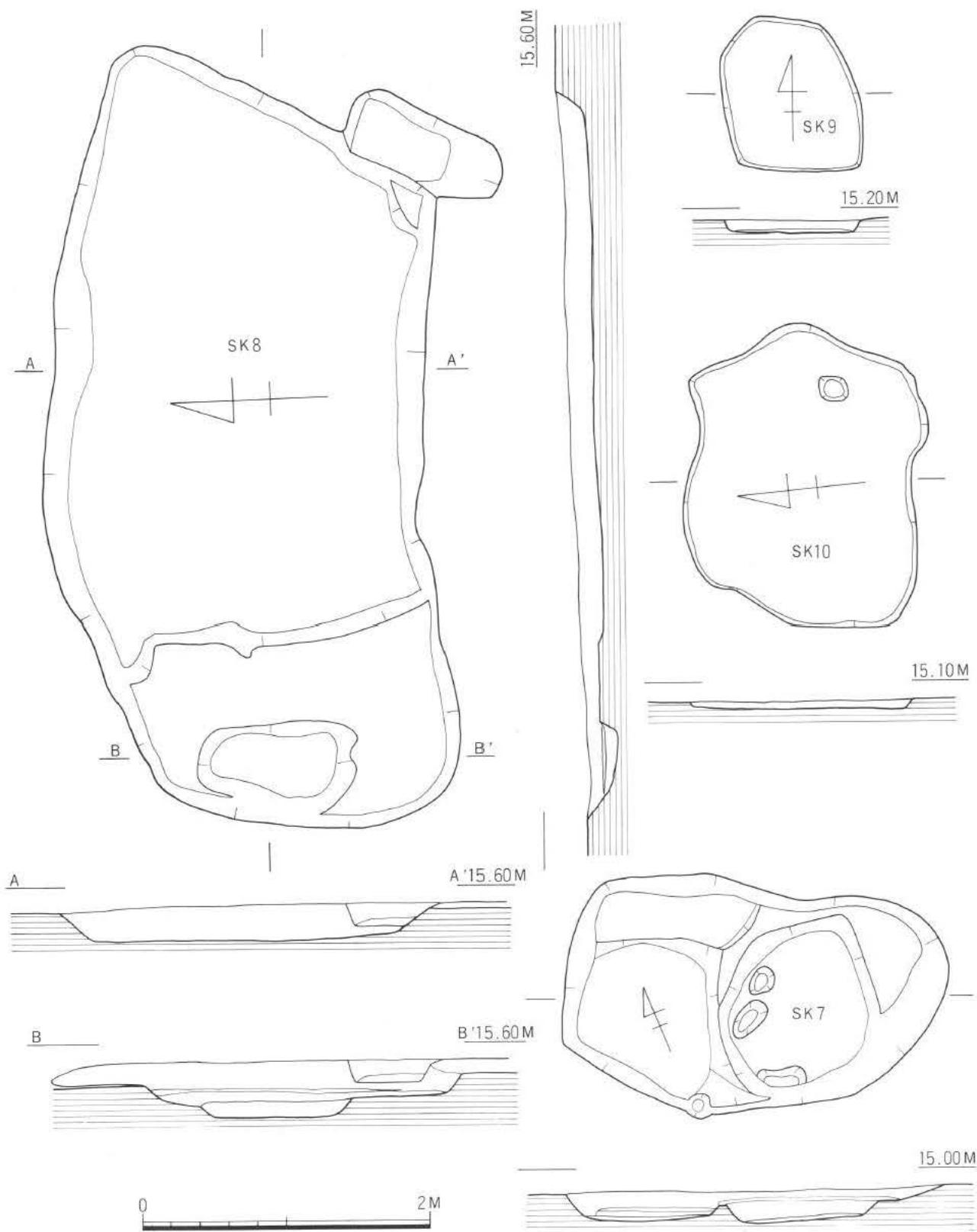


第5図 SK 1～3・6・7出土遺物実測図 (1/3・1/2)

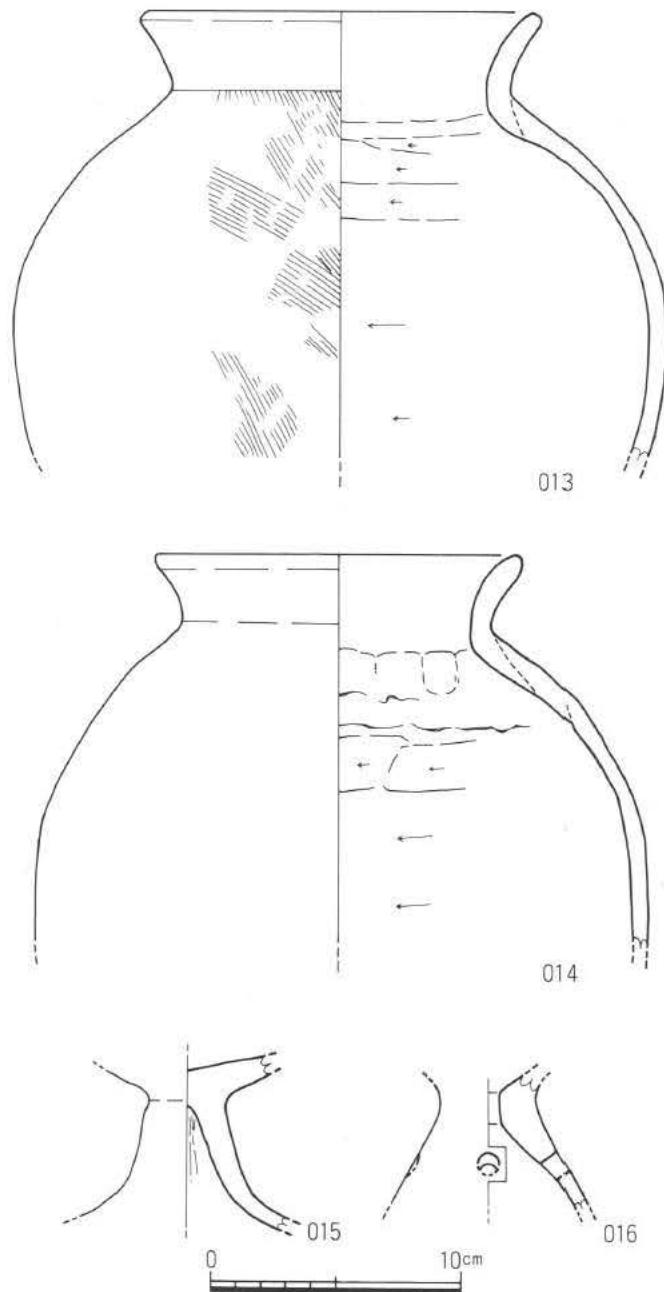
010は鉢の口縁部小片である。外面はハケ目、内面はヘラ削りを施す。

SK 4 (図版3、第4図)

調査区の北東端、SK 5の東に位置し、平面形は不整橿円形で長径2.15m、短径2.0mを測る。出土遺物は土師器の細片などが少量出土しているが図化し得ない。



第6図 SK7~10遺構実測図 (1/40)



第7図 SK 8 出土遺物実測図① (1/3)

SK 5 (図版3、第4図)

SK 5 (図版3、第4図)

調査区の北東端、SK 4 の西に位置し、平面形は不整橢円形で長径1.4m、短径1.0mを測る。

出土遺物は土師器、弥生土器の細片が少量出土しているが図化し得ない。

SK 6 (図版4、第4図)

調査区の北西、SB 22の西に位置し、平面形は不整橢円形で長径1.85m、短径1.7mを測る。南東隅から溝が延びており、高低差から水溜め遺構のようだが、覆土は茶褐色土の単層である。

出土遺物 (第5図)

滑石 (011) 長さ8.5cm、幅5.0cm、厚さ1.3cm、重量60gを測る。下端に2ヶ所、階段状に切断痕が残るが、このほかに加工痕は確認できない。原石に切り込みを入れ、節理を利用して薄い板状の剥片を採取したのであろうか。また切断面は直線ではなく細かな連弧状になっている点は今後検討が必要であろう。

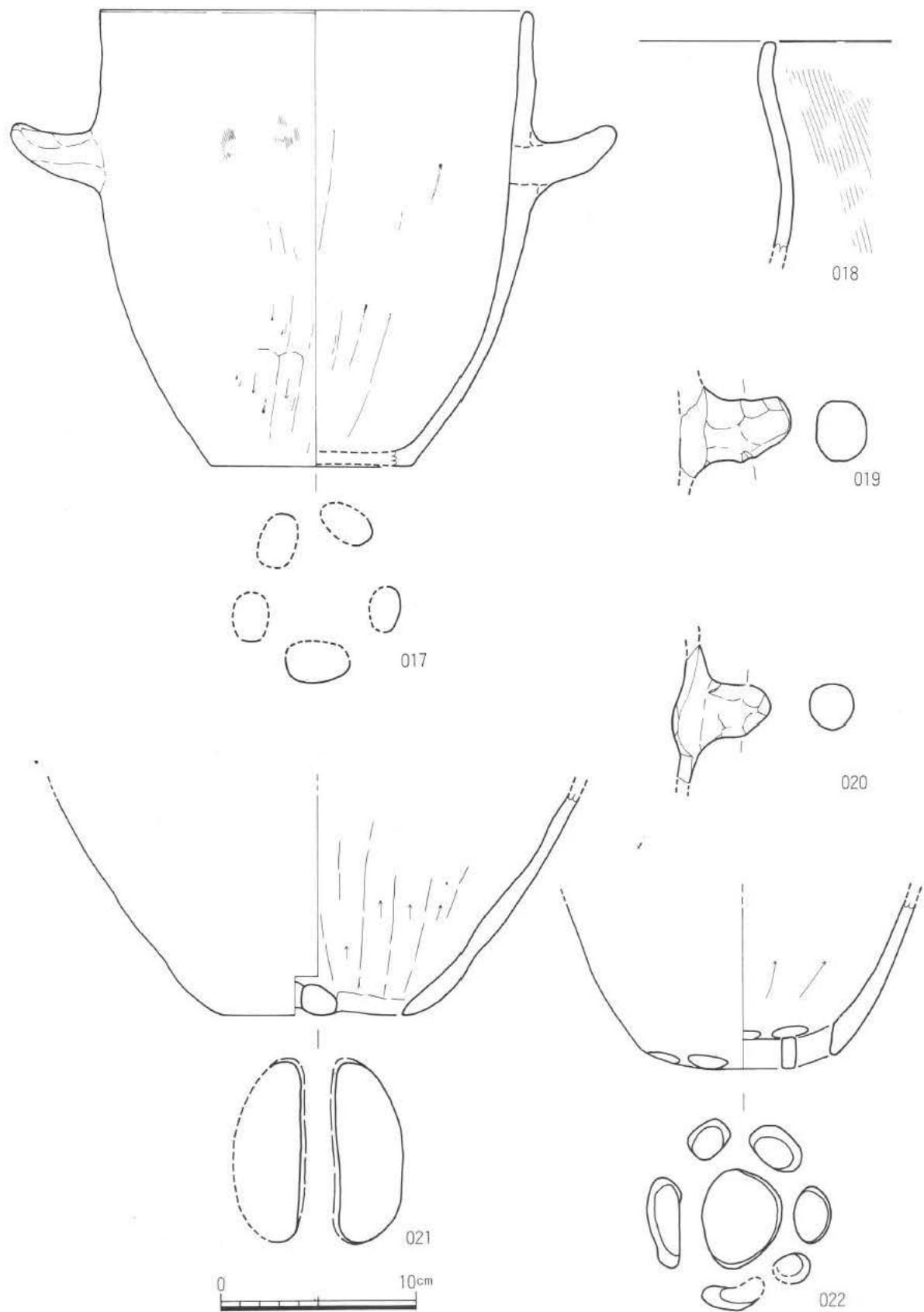
このほかの遺物に土師器、須恵器の細片があるが図化し得ない。

SK 7 (図版4、第6図)

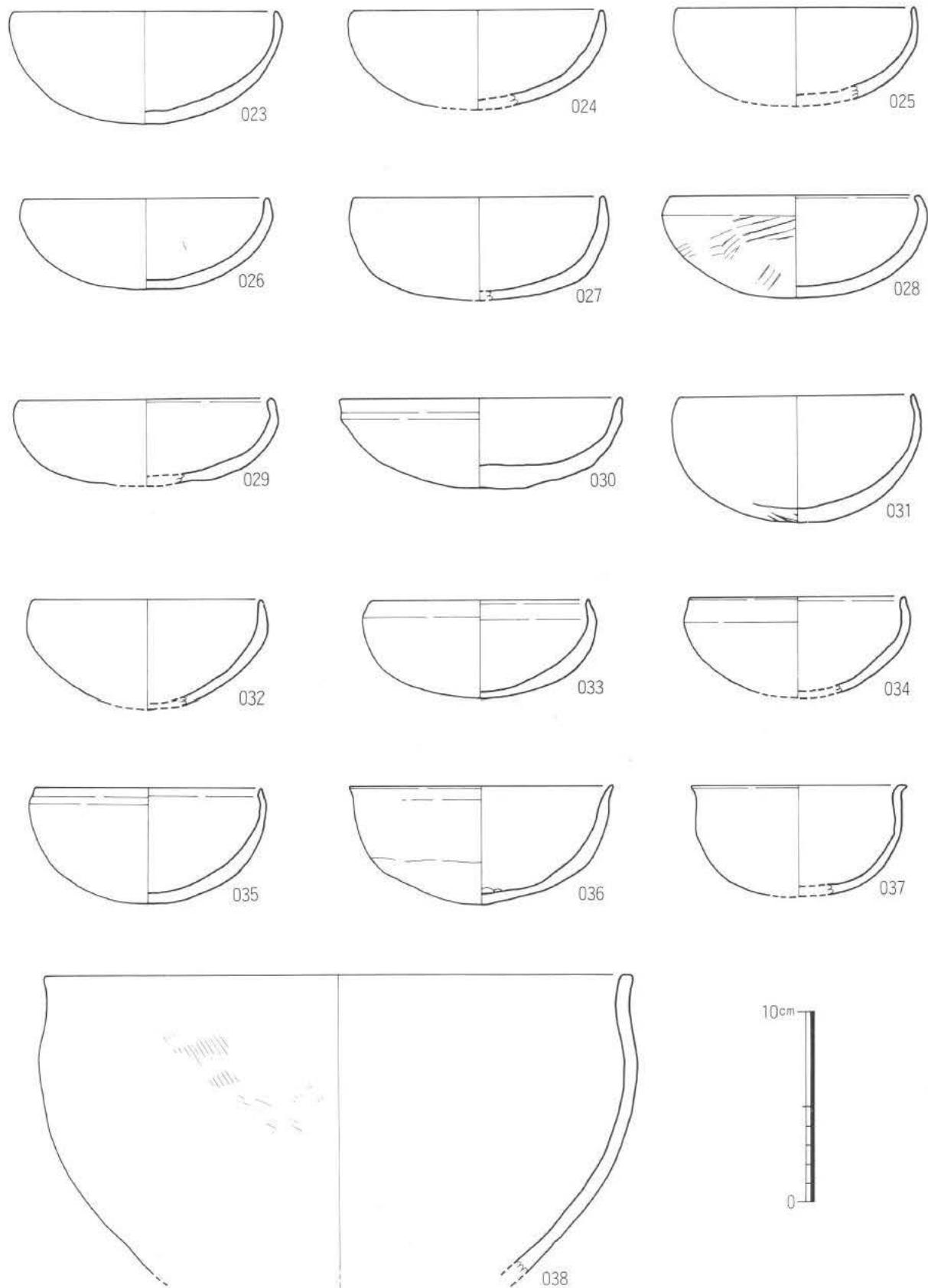
調査区の北西端、SK 6 の西に位置し、平面形は不整形で長径2.6m、短径1.55mを測る。検出時は複数の土坑が切り合っていると考えたが、切り合い関係は確認できなかつた。

出土遺物 (第5図) 出土遺物は僅かである。

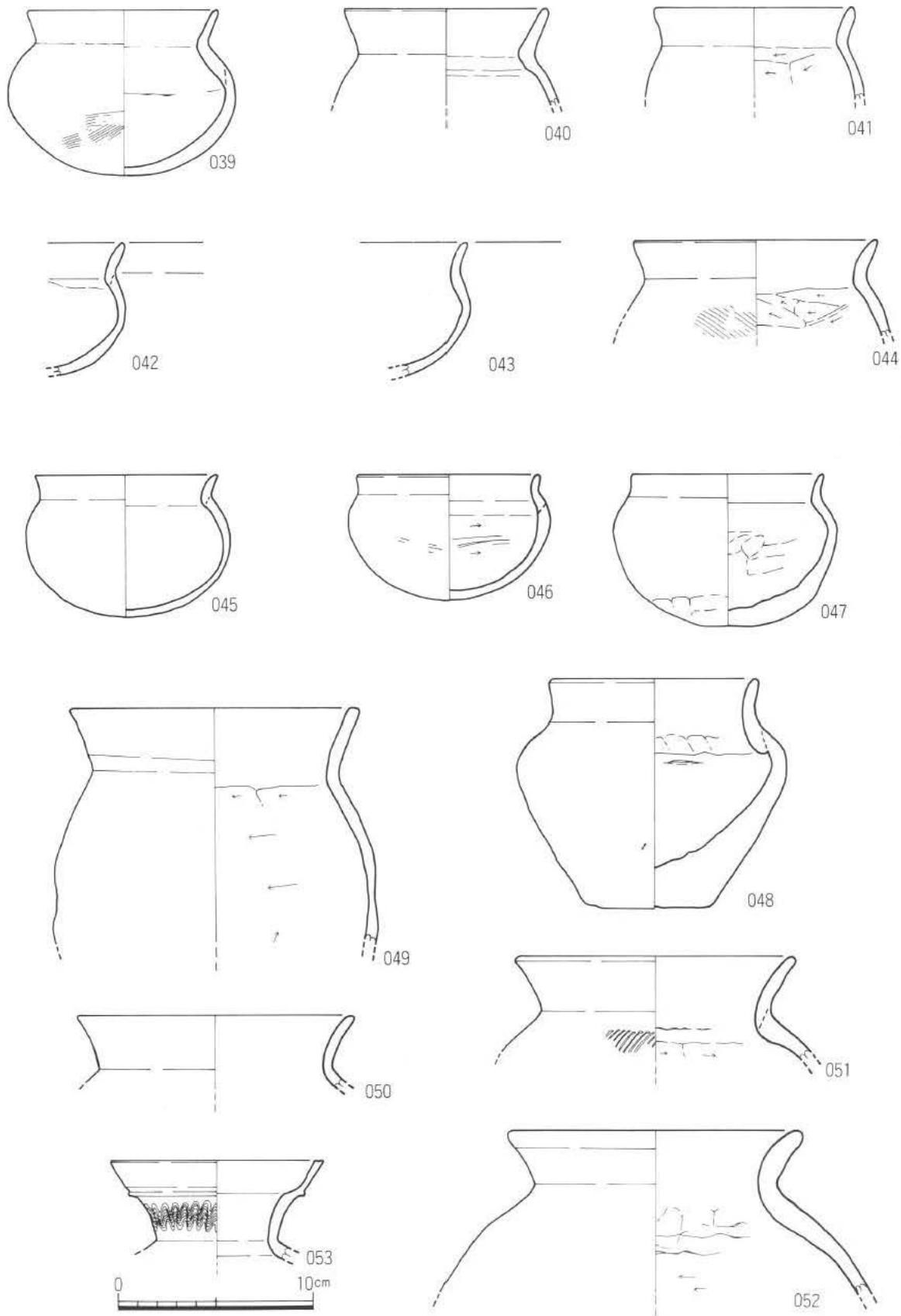
土師器 (012) 瓢の口縁部である。焼成はやや甘く風化が著しい。口径19.2cmを測る。



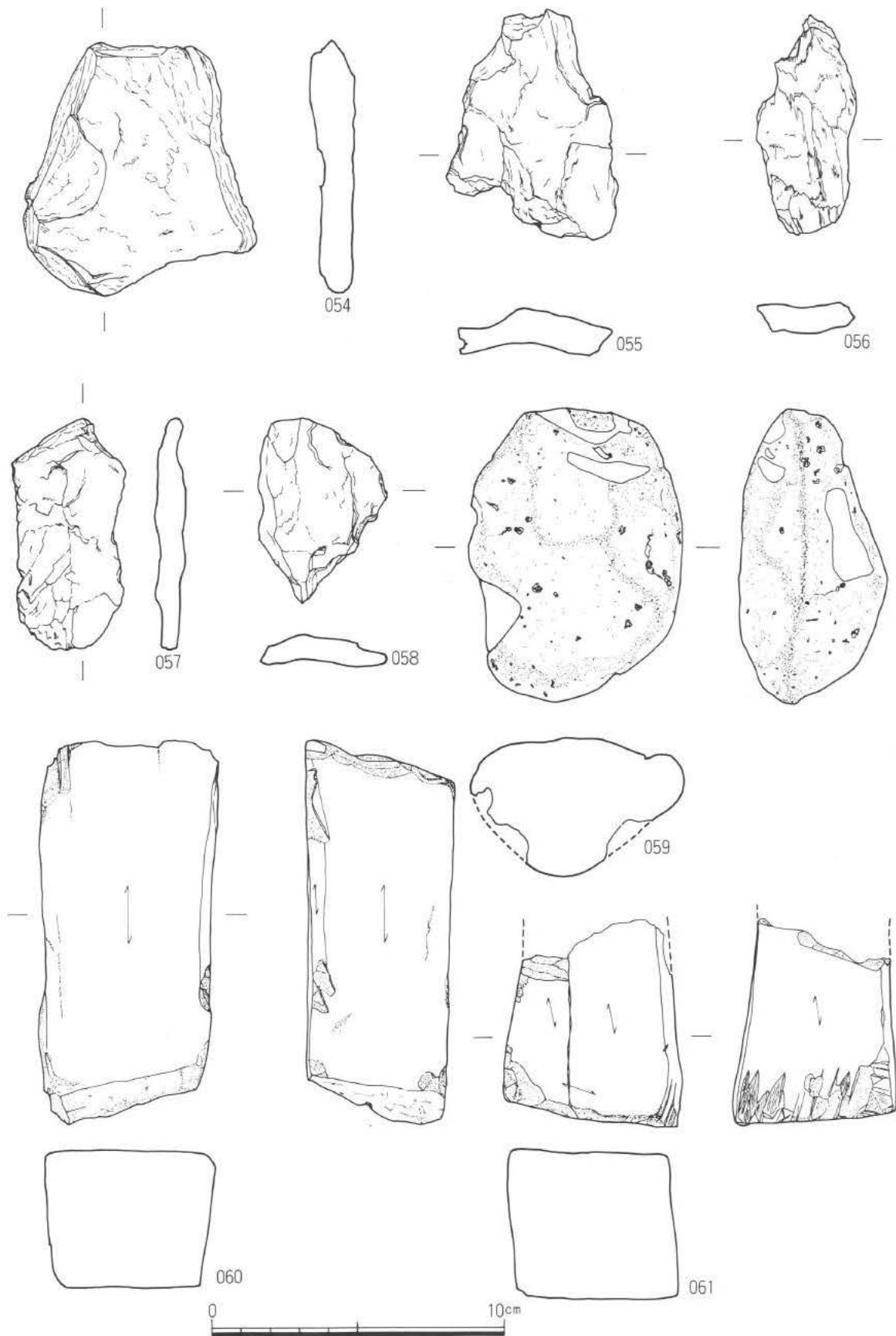
第8図 SK 8出土遺物実測図② (1/3)



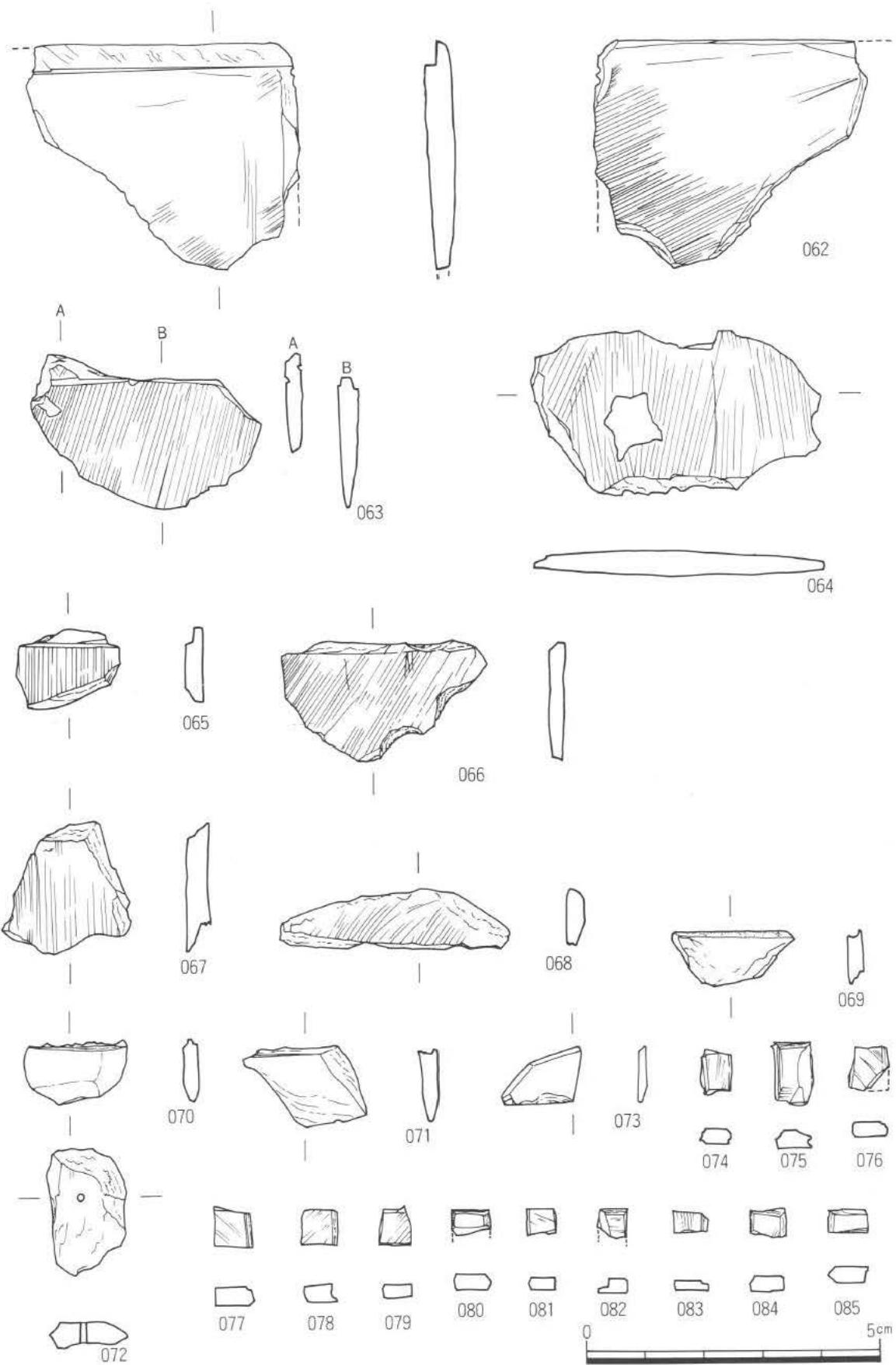
第9図 SK8出土遺物実測図③ (1/3)



第10図 SK 8 出土遺物実測図④ (1/3)



第11図 SK 8 出土遺物実測図⑤ (1/2)



第12図 SK 8 出土遺物実測図⑥ (1/1)



第13図 SK8出土遺物実測図⑦ (1/1)

S K8 (図版5、第6図)

調査区の中央部北寄り、S B 1 の西に位置する。平面形は不整隅丸長方形で、長径5.15m、短径2.6mを測る。大量の滑石製臼玉未製品やその原石、剝片、また土師器などを出土した。

出土遺物 (第7~13図)

土師器 (013~052) 013・014・049~052は甕である。口縁部が外反するもの (013・014・050~052)、直状に外傾するもの (049) がある。013は胴部内面ヘラ削り、外面にハケ目を施す。胎土は良好で1mm以下の砂粒を含み、色調は外面が淡橙色、内面は黄茶色を呈する。口径15.4cmを測る。014は内頸部直下を指で押さえ、その下位からヘラ削りを施す。胎土は1mm以下の砂粒を多く含み、色調は灰茶褐色を呈する。口径14.6cmを測る。049は口縁部は完形で内頸部直下からヘラ削り、外面は板状工具によるナデを施す。また器壁には煤が付着しており2次焼成を受けている。口径15.0cmを測る。050は2次焼成を受け風化が進んでいる。色調は外面が灰桃色、内面灰茶褐色を呈する。口径は14.0cmに復元しているが小片のため若干疑問が残る。051は口縁部4分の1程の破片である。内面はヘラ削り、外面は粗いハケ目を施す。復元口径14.0cmを測る。052は口縁部4分の1程の破片である。内頸部直下を指で押さえ、その下位から雑なナデ、ヘラ削りを施し、胴部外面はナデで仕上げている。復元口径14.8cmを測る。

015は高壺の脚部である。壺部および脚裾部を欠くが、器壁は厚手で柱状部と裾部の境は緩やかである。色調は灰茶色を呈し、基部径は3.1cmを測る。

016は器台である。脚部は内弯気味に「ハ」字形に開き、3ヶ所に穿孔が残る。復元すると4ヶ所となろう。混入品と考えている。

017・021・022は甕である。017は底部を破損しているが、ほぼ完形品である。底部は平底で5個の穿孔が残るが、中心部にも孔を配していたと思われる。胴部はあまり張らずに内弯し、口縁部は直状に立ち上がり端部を丸く收めている。把手は胴部中位より上に埋め込まれ丁寧にナデ調整を行っている。口縁部はヨコナデ、内面は底部から口縁部へ向かつてヘラ削り、外面は胴部中位から底部へ向かつてヘラ削り、上半はハケ目を施す。焼成および胎土は良好で細かな砂粒を含み、色調は白灰橙色を呈する。口径22.4cm、器高23.8cm、底径10.4cmを測る。021・022は底部である。021は底部に1本の棧を残し両側を半月状に削りとっている。内面の調整はヘラ削りで、胎土および焼成は良好、色調は淡橙色を呈する。022は底部中心に大きめの穿孔を施し、その外側に6ヶ所、不整橢円形の穿孔を配す。内面の調整はヘラ削りで、胎土および焼成は良好、色調は灰橙色を呈する。

018は甕あるいは鉢の口縁部片である。風化が進んでいるが外面はハケ目調整である。色

調は外面が灰橙色、内面は灰茶色を呈する。019・020は把手である。

023～037は坏である。口縁部が内弯するもの（023～027・031～032）、端部が内側にやや屈曲するもの（028・029・033～035）、外反するもの（036・037）、僅かに外傾するもの（030）がある。法量では曖昧な点があるが、比較的浅めのもの（023～030）、深めのもの（031～037）がある。023は風化が進んでいるが、胎土、焼成は良好で色調は淡橙色を呈する。口径13.8cm、器高5.9cmを測る。024はナデ調整を施し、色調は淡橙色を呈する。復元口径13.0cm、復元器高5.2cmを測る。025はナデ調整を施し、色調は淡橙色を呈する。復元口径12.4cm、復元器高5.2cmを測る。026は風化が進んでいるが口縁部をヨコナデし、色調は淡橙色を呈する。復元口径12.8cm、器高4.8cmを測る。027は3分の1程の破片である。風化が進んでいるがナデ調整を施し、色調は淡橙色を呈する。復元口径13.0cm、復元器高5.5cmを測る。028は完形品である。口縁部がヨコナデ、内面はナデ調整を施し、外面は粗いハケ目の後ナデを行う。色調は外面灰橙色、内面は明橙色を呈する。口径13.0cm、器高5.4cmを測る。029はナデ調整を施し、色調は赤橙色を呈する。口径13.2cm、復元器高4.6cmを測る。030は3分の2程の破片でナデ調整を施し、色調は淡茶橙色を呈する。口径14.8cm、器高4.8cmを測る。031は口縁部の一部を欠くがほぼ完形品である。外面の風化が進んでいるがナデ調整を施し、色調は淡赤橙色を呈する。口径13.2cm、器高6.7cmを測る。032・033・034は内外面とも風化が進んでいるが口縁部にヨコナデが見られる。焼成はいずれもやや甘く、032の色調は淡橙色を呈し、復元口径12.0cm、復元器高5.8cmを測る。033は橙色を呈し、復元口径11.4cm、器高5.2cmを測る。034の色調は外面灰橙色、内面橙褐色を呈する。復元口径11.4cm、復元器高5.2cmを測る。035は2分の1程の破片で、色調は淡灰橙色を呈する。復元口径11.8cm、器高6.1cmを測る。036は口縁部をヨコナデ、内外面はヘラ削りの後ナデで調整し、色調は赤橙色を呈する。口径13.8cm、器高6.3cmを測る。037は風化が著しく、調整は不明瞭である。色調は外面灰橙色、内面灰黒色を呈する。復元口径11.2cm、復元器高5.8cmを測る。

038は大型の鉢である。体部は深みがあり、口縁部は緩い如意形に立ち上がり端部を水平に収める。風化が進んでいるが、外面にハケ目調整を施し、色調は白橙色を呈する。復元口径30.8cmを測る。

039～048は咲・壺である。口縁部は直状に外傾するもの（039・040・042）、外反するもの（041・043～048）がある。039は口縁部の一部を欠くがほぼ完形品である。口縁部はヨコナデ、外面はハケ目の後ナデ仕上げ、内面はナデで仕上げている。胎土は緻密で精良、焼成は良好である。色調は外面淡赤橙色、内面赤橙色を呈する。口径9.8cm、器高8.6cmを測る。040は口縁部の4分の1程の破片である。2次焼成を受けており風化、剥離が進んでいる。色調は灰桃色を呈し、復元口径10.4cmを測る。041は口縁部の4分の1程の破片である。2

次焼成を受けており風化が進んでいる。色調は外面灰桃色、内面黒褐色を呈する。復元口径10.2cmを測る。042は口縁部の6分の1程の破片である。風化が進んでいるため調整は判然としない。胎土は良好で微細な砂粒および赤褐色粒を含む。色調は明橙色を呈する。043は口縁部の5分の1程の破片である。2次焼成を受けており風化が進んでいる。色調は外面灰桃色、内面淡灰橙色を呈する。044は口縁部の完形である。2次焼成を受けており風化が進んでいるが、口縁部はヨコナデ、内面ヘラ削り、外面はハケ目を施す。色調は灰桃色を呈する。口径12.4cmを測る。045は胴部の一部を欠くがほぼ完形品である。2次焼成を受けており風化が進んでいるが、口縁部はヨコナデ、胴部内面ナデ、外面は胴部下半は削りの後ナデ仕上げを施す。色調は赤橙色～灰褐色を呈する。口径9.4cm、器高7.4cmを測る。046は風化が進んでいるが、口縁部はヨコナデ、内面ヘラ削り、外面はハケ目が残存する。色調は灰橙色を呈する。口径9.4cm、復元器高6.5cmを測る。047は底部の一部に2次焼成を受けており、外面の風化が進んでいる。口縁部はヨコナデ、内面ヘラ削りの後ナデ、外底部はヘラ削りを施す。色調は灰橙色で2次焼成を受けた部分は赤褐色を呈する。口径9.8cm、器高7.9cmを測る。048はほぼ完形品である。粗雑な作りで底部は平底であるが、本来はヘラ削りによって丸底に形成するのだろう。2次焼成を受けており風化が進んでいる。口縁部はヨコナデ、内面ヘラ削りの後ナデを施し内頸部には指痕が残る。色調は外面灰桃色、内面灰黒色を呈する。口径10.6cm、器高11.9cmを測る。

須恵器 (053) 鳥の口縁部片である。頸基部は比較的太く、口頸部にはシャープな凸線が一条巡り、その下に緻密な波状文を施す。また口縁端部上面には段を有する。胎土および焼成は良好・堅緻で、色調は暗青灰色を呈し、復元口径11.0cm、復元頸部径6.2cmを測る。

石器 (054～175) 滑石の原石や剝片、未製品、砥石など滑石製白玉製作にかかわる石製品が多数出土している。

滑石原石 (054～058) 色調は鈍い光沢を持つ黄茶色あるいは緑茶色を呈する。054は長さ8.7cm、幅4.0cm、厚さ1.53cm程で重量は147.0gを測る。055は長さ8.0cm、幅5.5cm、厚さ1.2cm程で重量は62.9gを測る。056は長さ7.5cm、幅3.0cm、厚さ1.34cm程で重量は36.1gを測る。057は長さ8.0cm、幅4.0cm、厚さ1.4cm程で重量は41.4gを測る。058は長さ6.3cm、幅4.5cm、厚さ1.12cm程で重量は29.1gを測る。

軽石原石 (059) 他地域からの搬入品であることには疑いないが、分析等を行っていないため産地等は不明である。色調は灰茶色を呈する。表面は軟質のため風化しており、使用痕等は確認できないが、出土遺構の性格から滑石の研磨に用いた可能性もある。長さ10.2cm、幅7.3cm、厚さ4.8cm程で重量は58.3gを測る。

砥石 (060・061) 060は硬質砂岩製で長さ13.2cm、幅6.0cm、厚さ4.7cm程で重量は736gを測る。主に「L」字形に2面を使用し、裏面はまったくの未使用である。061は緻密な硬質砂岩製で現存長8.1cm、幅5.7cm、厚さ5.1cm程で重量は312gを測る。4面を使用しており側面の角には鉄製利器によると思われる工具痕が残る。

滑石製品 (062~175) 062~068は両面を研磨し、板状加工を施してある。062は破損しているが両面および側面を研磨しており、本来、整った隅丸(長)方形の板状品であったろう。上端から4.0mmの位置で片側から筋切りを行い、厚さ2.0mm程の剥片を取り出している。計測値は現状で、タテ39.1mm、ヨコ46.7mm、厚さ4.4mm、重量は12.1gである。063は両面に粗い研磨を施し、上端に両側からの筋切りを行い折り割っているが、筋が合わずに折り損ね、バリの残る部分がある。計測値は現状で、タテ22.4mm、ヨコ38.8mm、厚さ3.7mm、重量は4.15gである。064は両面に粗い研磨を施し、タテ28.1mm、ヨコ49.2mm、厚さ4.1mm、重量は8.0gを測る。065は両面に粗い研磨を施し、上端に片側からの筋切りが残っている。タテ14.0mm、ヨコ18.0mm、厚さ3.1mm、重量は1.0gを測る。066~068は両面に粗い研磨を施している。筋切り痕は確認できない。

069~071は表面の研磨は施されていないようだが、上端には両側からの筋切り痕が残る。

072は表面未調整で穿孔のみが施されている滑石未製品である。

073~085は未穿孔の方形チップ(白玉未製品)である。ほとんどは両面からの筋切りを行ったのち折り割っている。

086~103は穿孔途中で放棄した方形チップである。薄く剥離しているものが多く、確実に本来の厚みを残すチップは086・092・095・098・102・103である。2ヶ所に穿孔を持つもの(102・103)もある。

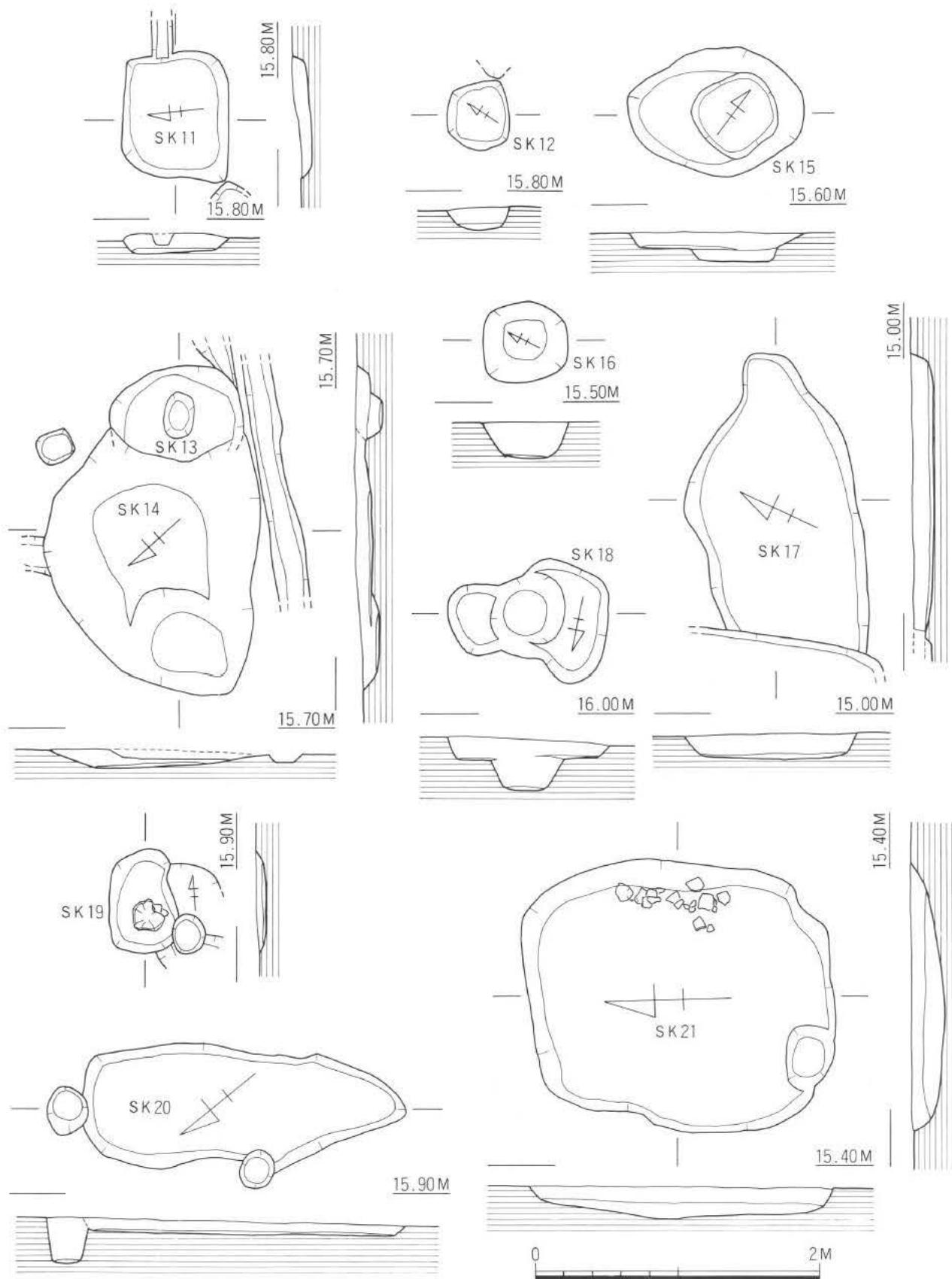
104~151は穿孔が貫通している方形チップである。薄く剥離しているものが多く、確実に本来の厚みを残すチップは104・112・122・147である。

152~156は方形チップの角を研磨によって落とした段階のものである。

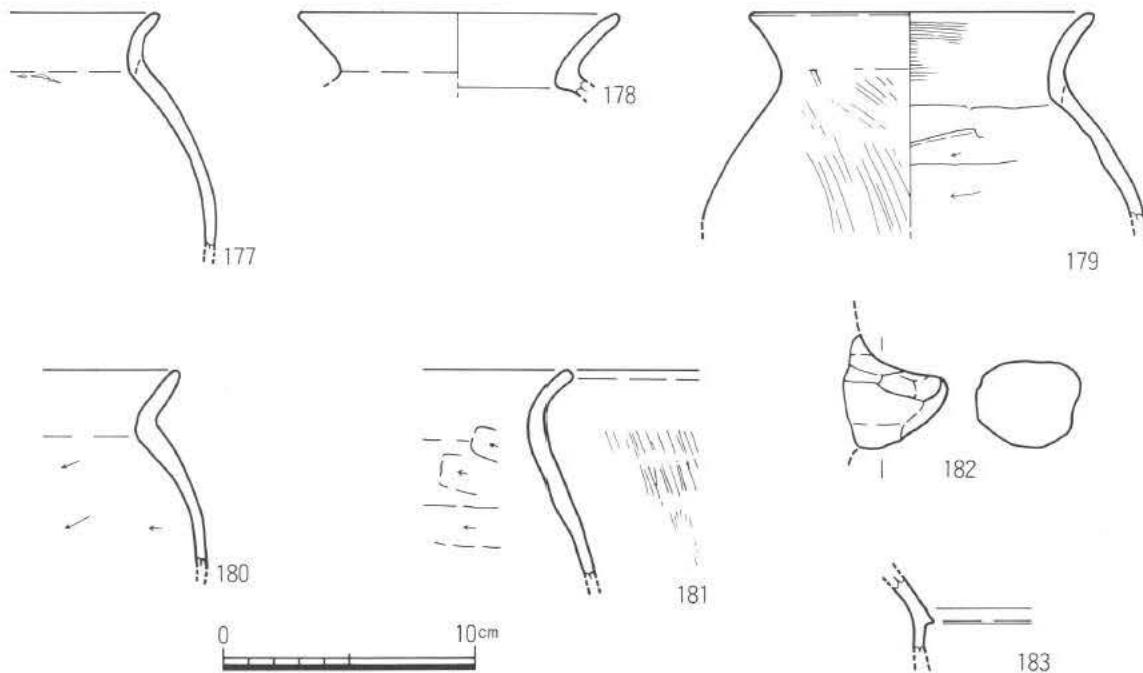
157~175は白玉である。これらは研磨の段階で破損するなどの理由で廃棄された、いわゆる「失敗品」がほとんどと思われるが、判別は不可能である。なお本遺構から出土した滑石製白玉の完形品は、175の1点のみである。

土製丸玉未製品 (176) 穿孔は未貫通である。胎土および焼成は良好で、色調は淡橙色を呈する。長径12.8mm、短径10.6mm、重量は1.65gを測る。

以上の出土遺物以外にも、S B14出土の須恵器龜と接合する資料があるが「4. その他の遺構、遺物」の中で紹介する。



第14図 SK11~21遺構実測図 (1/40)



第15図 SK 11・12・14・17出土遺物実測図 (1/3)

SK 9 (第6図)

調査区の中央部北寄り、SK 8の西に位置する。平面形は不整方形で長径1.08m、短径0.93mを測る。出土遺物は土師器の細片などが少量出土しているが、図化し得るものはない。

SK 10 (第6図)

調査区の中央部西端、SK 7の南に位置する。平面形は不整形で長径1.96m、短径1.53mを測る。出土遺物は土師器、弥生土器の細片が少量出土しているが図化し得ない。

SK 11 (第14図)

調査区の中央部東に位置し、SB 2の北西角から延びる排水溝を切っている。平面形は隅丸方形で長径0.9m、短径0.75mを測る。出土遺物は土師器片が少量出土している。

出土遺物 (第15図)

土師器 (177) 瓢の口縁部片である。胴部はあまり張らず、口縁部は丸みを持って外反する。風化が進んでいるが内面はヘラ削り、外面はハケ目を施す。色調は灰橙色を呈する。

S K12 (第14図)

調査区の中央部東に位置し、平面形は不整方形で長径0.5m、短径0.45mを測る。出土遺物は土師器の細片が少量出土している。

出土遺物 (第15図)

土師器 (178) 甕の口縁部、4分の1程の破片である。「く」字形に強く外反し、内頸部直下よりヘラ削りを施す。色調は明橙色で、復元口径12.6cmを測る。

S K13 (第14図)

調査区の中央部東に位置し、S K14に切られる。平面形は不明で長径0.95m、短径0.7a mを測る。出土遺物は土師器甕の小片が出土しているが図化し得ない。底部に円形と思われる穿孔の一部が残存する。

S K14 (第14図)

調査区の中央部東に位置し、S K13を切っている。平面形は不整橢円形で長径2.0m、短径1.5mを測る。

出土遺物 (第15図)

土師器 (179・180) いずれも甕である。179は外反する口縁部を持ち、内面ヘラ削り、外面は荒いハケで調整している。色調は灰橙色で、復元口径14.8gを測る。180は口縁部小片である。口縁部は短く外傾して直状に立ち上がり、内面ヘラ削り、外面は風化が著しく不明。色調は赤橙色を呈する。

S K15 (第14図)

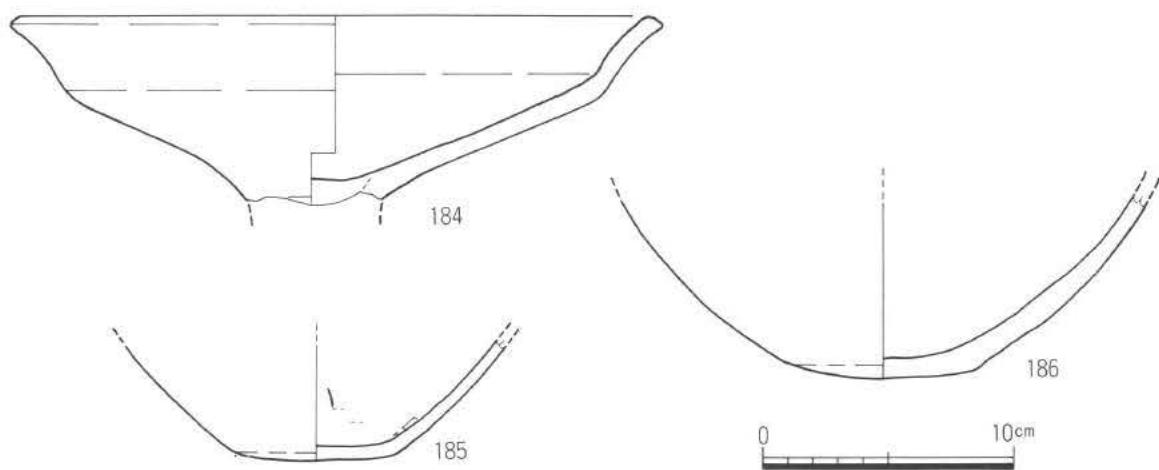
調査区の中央部、S K 8の南に位置する。平面形は不整橢円形で長径1.22m、短径0.9mを測る。出土遺物は土師器片が少量出土しているが図化し得るものはない。

S K16 (第14図)

調査区の中央部、S K 15の南西に位置する。平面形は不整橢円形で長径0.32m、短径0.27mを測る。出土遺物は土師器片が少量出土しているが図化し得るものはない。

S K17 (第14図)

調査区の西端に位置し、S B 9に切られる。平面形は不整橢円形で長径2.1a m、短径1.2mを測る。



第16図 S K18 · 19出土遺物実測図 (1/3)

出土遺物 (第15図)

土師器 (181 · 182) 181は甕の口縁部である。肩部はまったく張らず口縁部は緩やかに外反する。内面ヘラ削り、外面は荒いハケを施す。色調は茶橙色を呈する。

182は甕や甕などの把手である。短い牛角状を呈する。

須恵器 (183) 坏蓋の小片である。稜はやや鋭さを失っているが、ヘラ削りは稜の付近まで施されている。胎土および焼成は良好で、色調は青灰色を呈する。

S K18 (第14図)

調査区の中央部東、S B 4の西に位置する。平面形は不整形で長径1.12m、短径0.82mを測る。中央を柱穴状に掘込み、その両側にテラスを持つ。

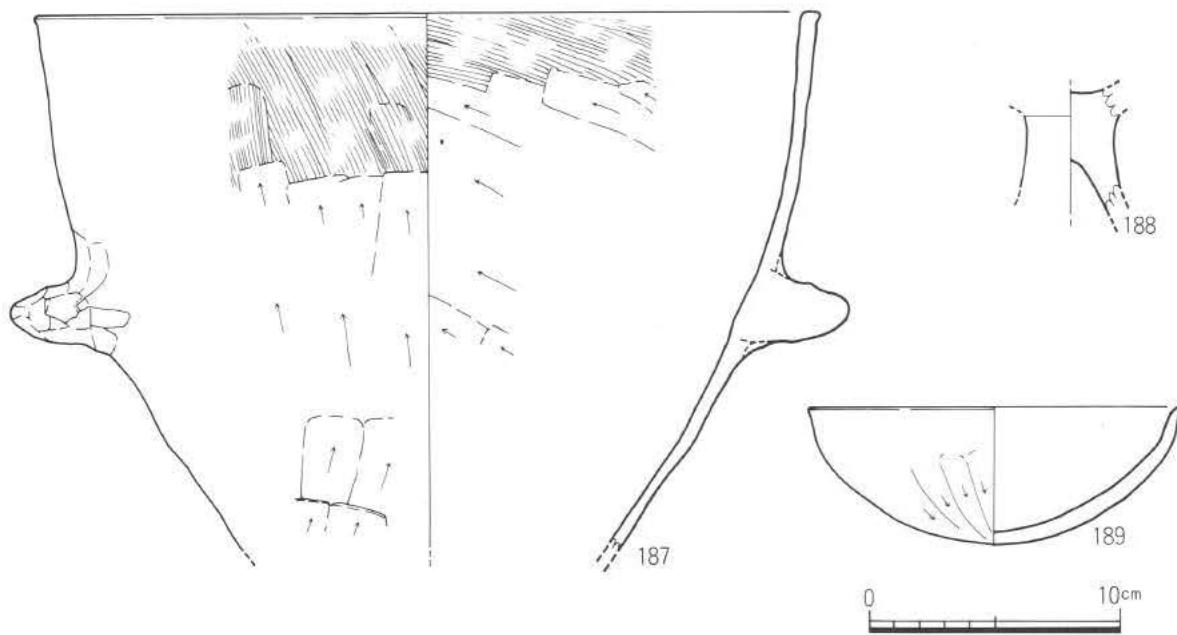
出土遺物 (第16図)

弥生土器 (184 · 185) 184は高坏の坏部である。口縁部は外反し、端部を僅かに肥厚させる。胎土は2mm前後の砂粒を多く含み、色調は橙色を呈する。復元口径26.2cmを測る。

185は甕の底部か。凸レンズ状の平底を呈し内、外面ともナデで仕上げているが、内面には削り状の調整痕が残る。色調は暗橙色を呈し、底径6.6cmを測る。

S K19 (第14図)

調査区の中央部東、S B 4の西に位置する。平面形は不整橢円形で長径0.72m、短径0.45mを測る。出土遺物は弥生土器片が少量出土している。



第17図 S K21出土遺物実測図 (1/3)

出土遺物 (第16図)

弥生土器 (186) 壺の底部であろう。凸レンズ状の平底を呈し内、外面ともナデで仕上げている。色調は赤橙色を呈し、底径5.6cmを測る。

S K20 (第14図)

調査区の中央部東、S B 5 の南に位置する。平面形は不整長楕円形で長径2.4m、短径0.85mを測る。出土遺物は弥生土器片が少量出土しているが図化し得るものはない。

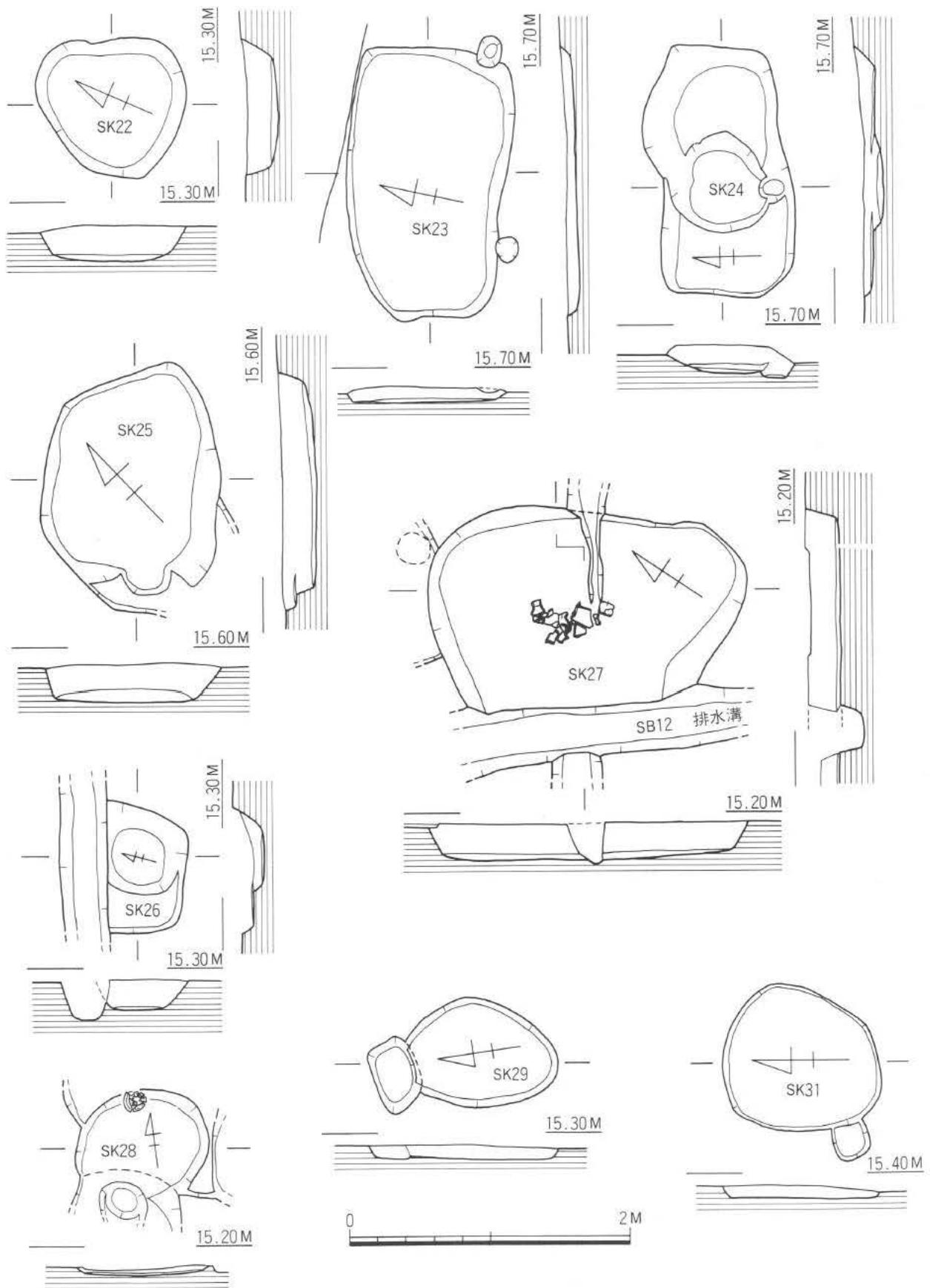
S K21 (図版6、第14図)

調査区の中央部西、S B 7・8・14・15などに囲まれるように位置する。平面形は不整方形で長径2.15m、短径1.9mを測る。

出土遺物 (第17図)

土師器 (187~189) 187は甌である。底部を欠くが胴部は外傾して緩やかに内弯しながら立ち上がる。口縁部は直状でやや肥厚し、端部は水平に收めているが、ヨコナデによつて外側に僅かにつまみ出す。調整は内、外面ともハケ目の後、口縁部付近までヘラ削りを行つてゐる。色調は赤橙色を呈し、復元口径31.6cmを測る。

188は高坏の脚部片である。風化が著しいが、内面にはしづり痕が残る。胎土は微細な砂



第18図 SK22~29・31遺構実測図 (1/40)

粒、赤褐色粒を含むが良好で、色調は淡黄茶色を呈する。基部径は3.5cmを測る。

189は壊である。外面体部下半をヘラ削り、他はナデで仕上げている。胎土は良好で、色調は茶橙色を呈し、復元口径15.0cm、器高5.5cmを測る。

このほかに滑石小片が3点出土している。

S K22 (第18図)

調査区の中央部西、S B 8の南に位置し、平面形は不整橢円形で長径1.1m、短径1.0mを測る。出土遺物は土師器片が少量出土しているが図化し得るものはない。土器以外では滑石原石の小片が1点出土している。

S K23 (第18図)

調査区のほぼ中央部、S K24の北に位置し、平面形は不整長方形で長径1.9m、短径1.15mを測る。出土遺物は土師器片が少量出土しているが図化し得るものはない。

S K24 (第18図)

調査区のほぼ中央部、S K23の南に位置し、平面形は不整橢円形で長径1.8m、短径0.95mを測る。出土遺物は土師器片が少量出土しているが図化し得るものはない。

S K25 (第18図)

調査区のほぼ中央部、S K23の北西に位置し、平面形は不整橢円形で長径1.70m、短径1.25mを測る。出土遺物は土師器片が少量出土しているが図化し得るものはない。

S K26 (第18図)

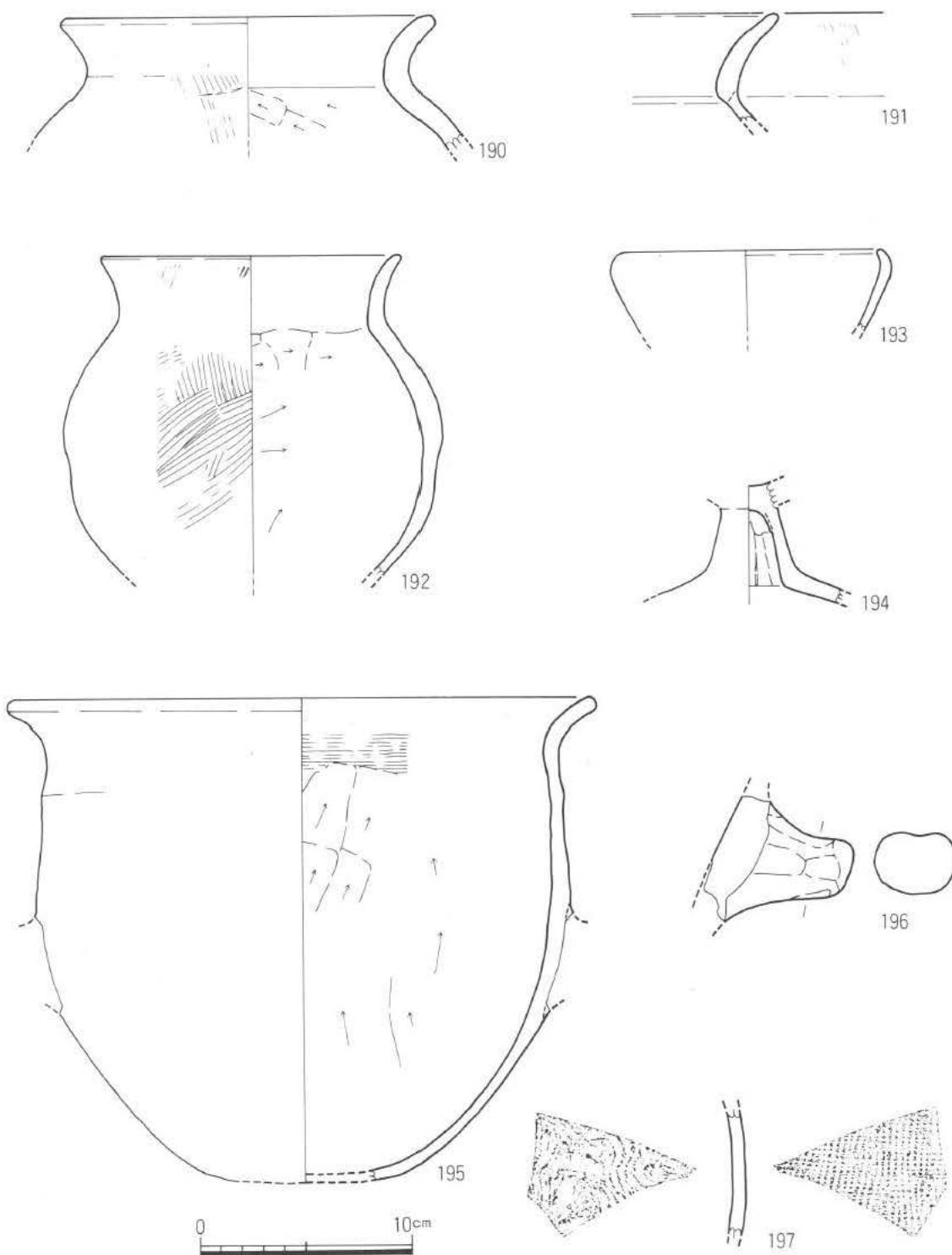
調査区の中央部西、S K27の東に位置する。S B 13の排水溝に切られているため、平面形は不明で長径0.9m、短径0.55mを測る。出土遺物は土師器片が少量出土しているが図化し得るものはない。土器以外では滑石原石の剥片が1点出土している。

S K27 (第18図)

調査区の中央部西、S K26の西に位置する。S B 12・13の排水溝を切る。平面形は不整形で長径2.3m、短径1.4mを測る。

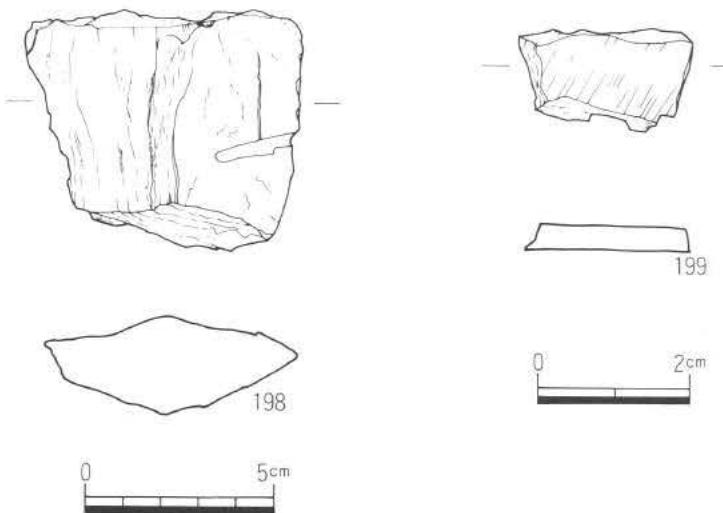
出土遺物 (第19・20図)

土師器 (190~196) 190~192・195は甕である。190は丸味の強い外反する口縁を持ち、色



第19図 S K27出土遺物実測図① (1/3)

調は茶橙色、復元口径17.0cmを測る。191は口縁部小片である。内、外面ともハケ目の後ヨコナデ、内頸部直下からヘラ削りを行う。色調は茶橙色を呈する。192は胴部は球形に近く、



第20図 S K27出土遺物実測図② (1/2・1/1)

緩やかに外反する口縁部を持つ。外面は荒いハケ目、内面はヘラ削りを施す。色調は茶橙色、復元口径14.0cmを測る。195は把手付の甕である。胴部はあまり張らずに立ち上がり、口縁部を強く外反する。口縁部内面にハケ目が残り、胴部内面はヘラ削り、外面はナデで仕上げている。色調は灰橙色を呈し、復元口径27.4cmを測る。

193は鉢である。体部は深

みがあり、短く内弯する口縁部を持つ。調整は丁寧なナデ仕上げで、色調は淡灰橙色を呈し、復元口径12.8cmを測る。

194は高坏の脚部である。裾部は「ハ」字形に開き、内面に稜を持って端部で立脚する。色調は赤橙色を呈し、基部径2.7cmを測る。

196は甕、甕などの把手である。断面は上面が僅かにくぼんだ偏楕円形で、色調は赤橙色を呈する。

須恵器 (197) 甕などの胴部片である。内面には同心円文のあて具痕が残り、外面は平行タタキの後、カキ目を行う。胎土はやや粗で1mm以下の砂粒、黒色粒を含み、焼成は良好、色調は暗青灰色を呈する。

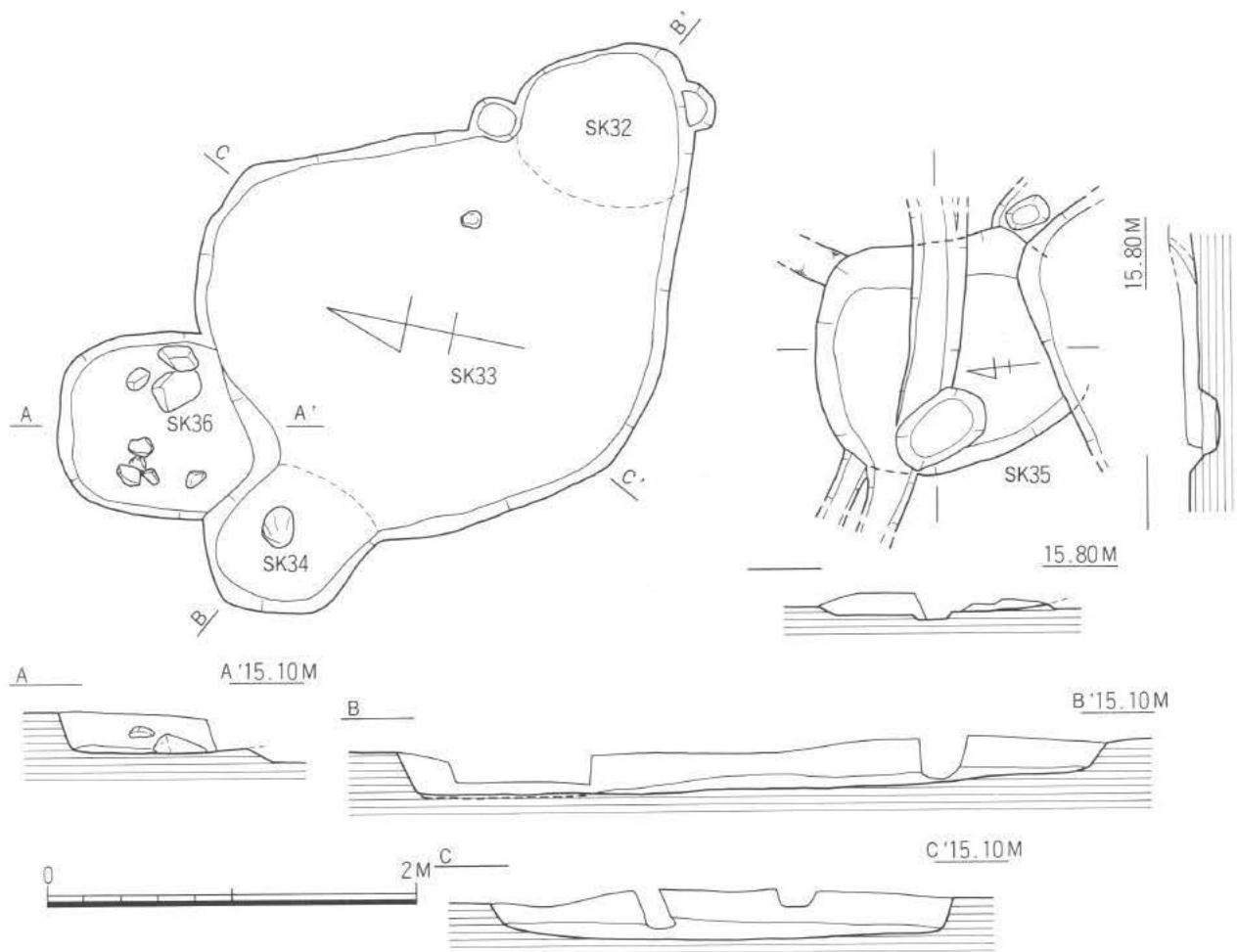
滑石製品 (198・199) 198は原石である。タテ6.5cm、ヨコ7.4cm、最大厚2.6cm、重量155.7gを測る。199は両面に摺目の残る板状品である。側面には加工痕はなくタテ1.37cm、ヨコ2.31cm、最大厚0.39cm、重量1.9gを測る。

S K28 (第18図)

調査区の中央部西、S K27の西に位置する。平面形は不整楕円形で長径1.0m、短径0.8mを測る。

出土遺物 (第22図)

須恵器 (200) 坏身である。底部を欠くが口縁部は全周する。作りは薄手でやや雑だが全体に鋭さが残る。口縁は端部に内傾する段を持ち、胎土は並で1mm以下の砂粒、黒色粒を含



第21図 SK 32~36遺構実測図 (1/40)

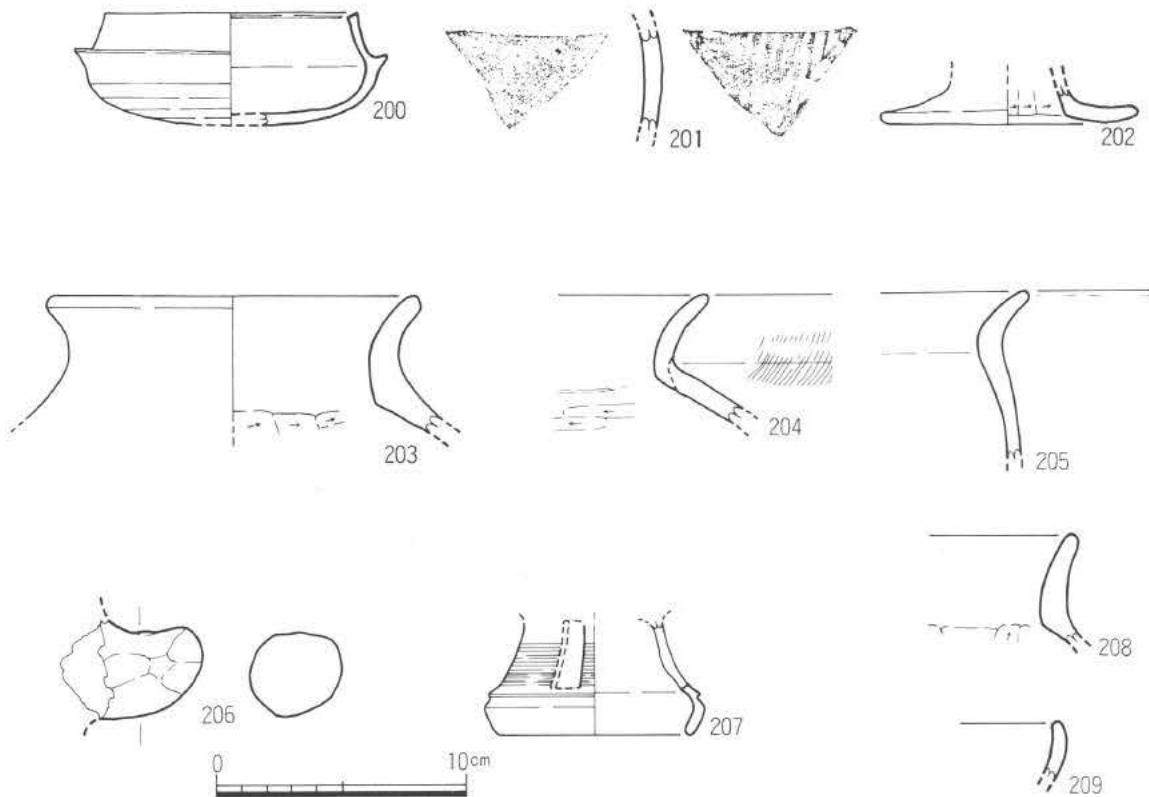
み、焼成はやや軟調である。口径10.1cm、復元器高4.5cm、受部径12.6cm、立ち上がり高1.7cmを測る。

SK 29 (第18図)

平面形は不整橢円形で長径1.0m、短径0.8mを測る。出土遺物は土師器片が少量出土しているが図化し得るものはない。

SK 30

調査区の南東部に位置し、平面形は不整橢円形で長径1.15m、短径0.65mを測る。出土遺物は土師器片が少量出土しているが図化し得るものはない。



第22図 SK 28・31・33・34出土遺物実測図 (1/3)

S K 31 (第18図)

調査区の南部、S B18の東に位置し、平面形は不整橢円形で長径1.1m、短径1.05mを測る。

出土遺物 (第22図)

須恵器 (201) 胴部片である。外面は平行タタキ、内面は丁寧なナデである。胎土は微細な砂粒を含むが緻密で焼成は軟調、色調は白灰色を呈する。

S K 32 (図版6、第21図)

調査区の南部に位置し、S K33を切る。平面形は不明で長径1.0m、短径0.85mを測る。出土遺物は内面ナデ、外面平行タタキを施す軟質の須恵器細片および土師器片が少量出土しているが、図化し得るものはない。

S K 33 (図版6、第21図)

調査区の南部に位置し、S K32・34に切られ、S K36を切る。平面形は不整形で長径2.6m、短径2.15mを測る。

出土遺物（第22図）

土師器（202～206） 202は高坏の脚部である。裾部は偏平で端部がやや反り気味となる。内面はヨコ方向のヘラ削りによる稜を持つ。胎土および焼成は良好で、色調は茶橙色を呈する。

203～205は甕の口縁部である。203は丸味を持って強く外反し、内頸部直下からヨコ方向のヘラ削りを施す。胎土、焼成は良好で色調は淡灰橙色を呈する。復元口径15.0cmを測る。204は「く」字形に強く外反し、内面ヘラ削り、外面はハケ目を行っている。色調は淡灰橙色を呈する。205は張りのない胴部から外反する口縁部を持つ。内面は削り後ナデ、他もナデで仕上げている。外面は淡茶橙色を呈する。

206は把手である。断面は不整円形で、胎土は細かな砂粒を含むが緻密、焼成は良好で、色調は茶橙色を呈する。

須恵器（207） 高坏の脚部である。「ハ」字形に外反し、1条の稜を作ったのち端部は内側に屈曲する。長方形透かしの1辺が残っている。なお脚底径7.7cmに復元しているが小片のため若干疑問が残る。胎土、焼成は良好で色調は青灰色を呈する。

S K 34（図版6、第21図）

調査区の南部に位置し、S K 32・34に切られ、S K 33・36を切る。平面形は不整円形で長径0.85a m、短径0.8mを測る。

出土遺物（第22図） 出土遺物は僅かである。

土師器（208・209） 208は甕の口縁部片である。内面には頸部直下からのヘラ削りを施す。

209は鉢の口縁部片であろう。丁寧なナデもしくは研磨を施す。

S K 35（第21図）

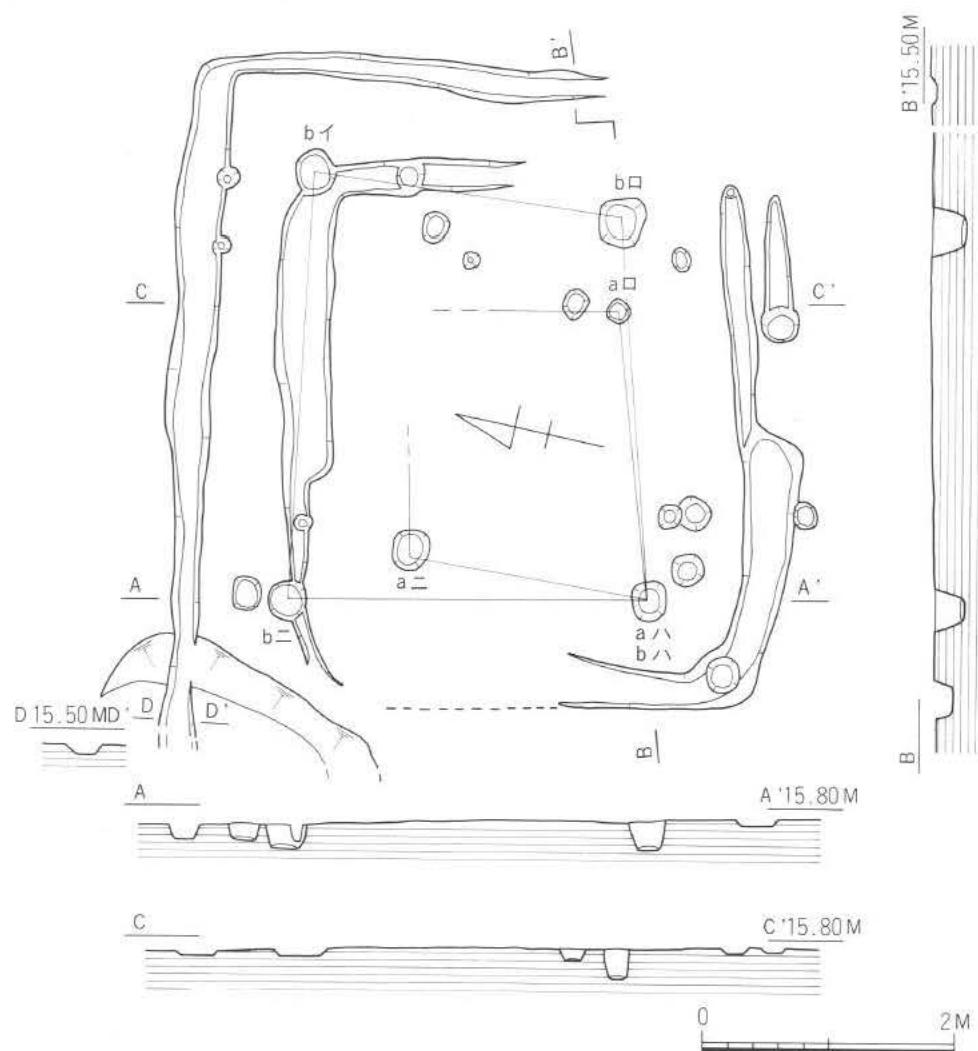
調査区のほぼ中央部に位置し、S B 5およびS B 3の排水溝に切られる。平面形は不整形で長径1.4a m、短径1.25mを測る。出土遺物は土師器片が少量出土しているが図化し得るものはない。

S K 36（図版6、第21図）

調査区の南部に位置し、S K 33・34に切られる。平面形は不明で長径1.1a m、短径1.0mを測る。出土遺物はない。

2. 竪穴住居跡

住居跡に関わる主な切り合い関係 (古) → (新)

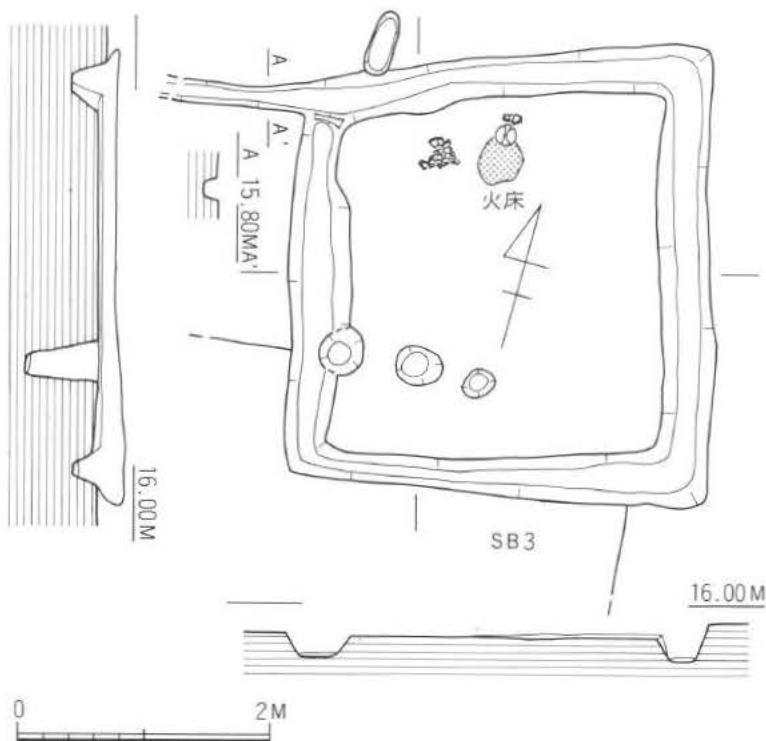


第23図 S B 1 遺構実測図 (1/60)

S B 1 a (古) · b

(新) (図版7、第23図)

調査区の北東部、S K 8 の東に位置する拡張住居である。残存不良のため、周壁溝の検出によってその存在が確認された。西辺は変えずに北辺を0.9~1.0m、東辺を0.8m、南辺は僅かに0.3mほど拡張されている。主柱穴はいずれも4本であろうがS B 1 a は1本未検出である。また柱ハは移動させる必要がなかつたため、a から b へと継



第24図 S B 2 遺構実測図 (1/60)

続使用されているようだ。

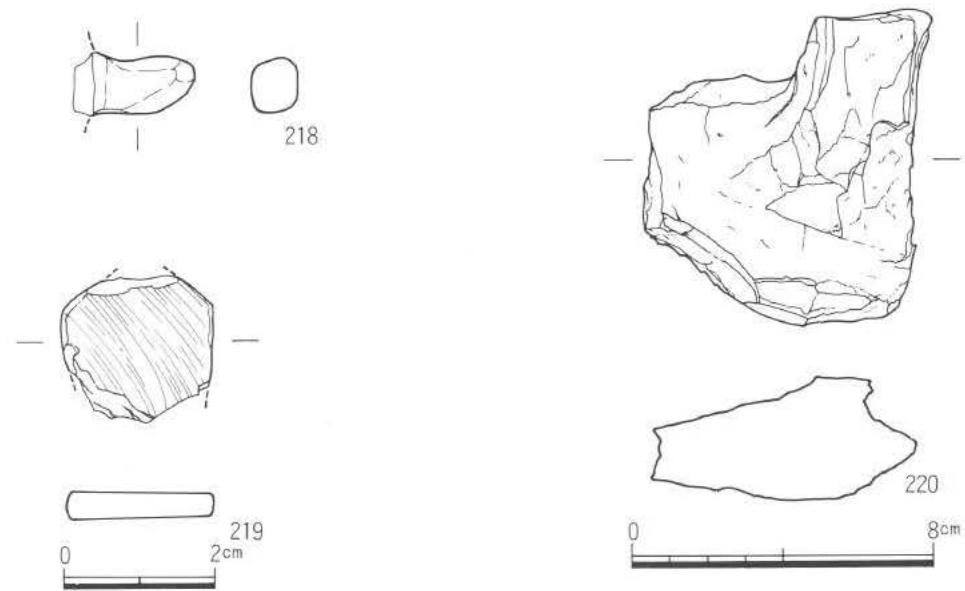
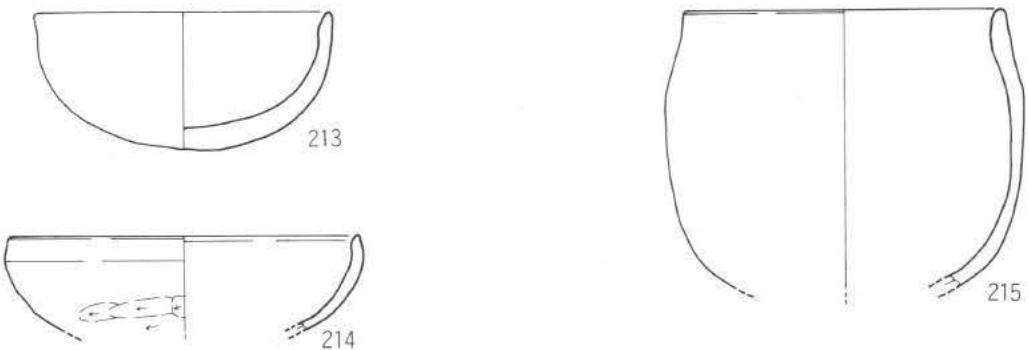
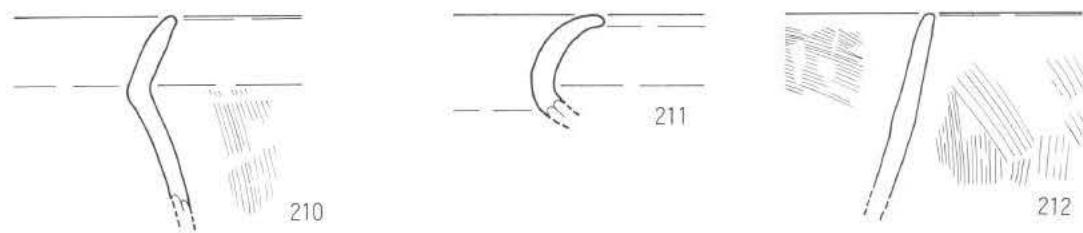
b は北西角から西に向かつて排水溝が延びている。a については北西角が失われているため排水溝の有無は不明である。ただ確証はないのだが、その位置関係から少量の土師器片を出土した S D 4 が排水溝として連接する可能性がある。

出土遺物 (第25図) 遺物は少量だが、すべて S B 1 b の北周壁溝 (210・211) および南周壁溝 (212) から出土している。

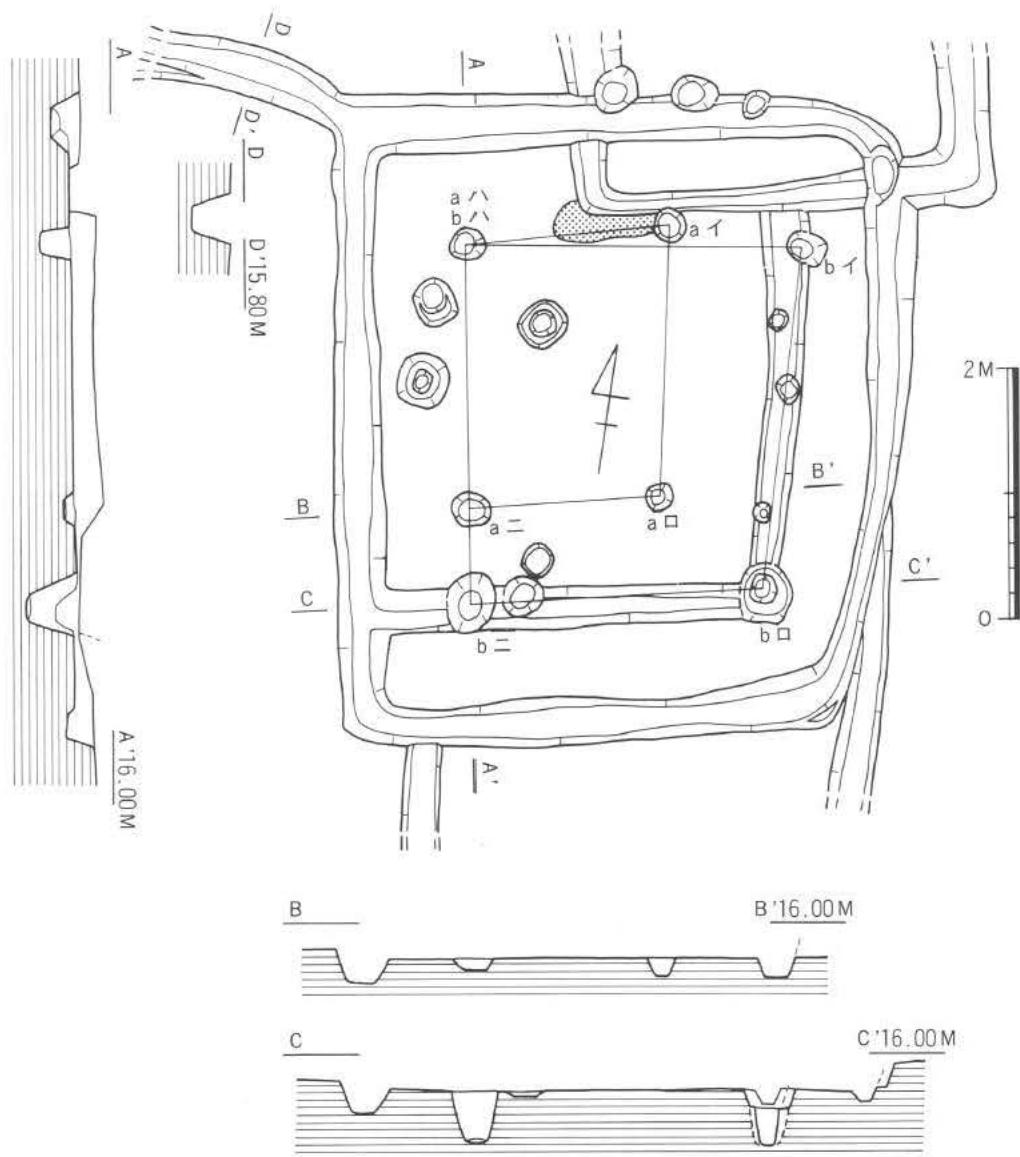
土師器 (210~212) 210・211は甕の口縁部である。210は張りの少ない胴部から、直状に外傾する口縁部を持つ。外面はハケ目、内面は削りの後ナデ仕上げで、色調は外面赤橙色を呈する。211は強く外反する口縁部を持ち、色調は風化が進んでいるが白灰橙色を呈する。212は甌あるいは鉢の口縁部である。色調は外面赤茶橙色を呈し、内面はハケ目の後ナデ、外面はハケ目を施す。

S B 2 (図版7、第24図)

調査区の中央部東に位置し、S B 3 を切り、S K 11 に排水溝を切られている。主柱穴は確認されなかつた。周壁溝が巡り、北西角からは西に向かつて排水溝が延びている。北辺



第25図 S B 1 b · S B 2 出土遺物実測図 (1/3 · 1/1 · 1/2)



第26図 SB 3 遺構実測図 (1/60)

中程に火床が残っており、ここが竈であった可能性が高い。

出土遺物 (第25図) 遺物は主に竈跡付近床面 (217)、北周壁溝 (220)、南周壁溝 (218・219)、他は覆土から出土している。

土師器 (213~218) 213・214は壺である。213はほぼ完形品で色調は白橙色を呈する。口径11.8cm、器高5.6cmを測る。214は体部下半を手持ちヘラ削り、他はナデで仕上げている。胎土は良好で色調は灰橙色を呈する。復元口径13.8cmを測る。

215は鉢である。口縁部はヨコナデ、内面はヘラ削りを施す。色調は2次焼成を受けているため灰桃色を呈する。復元口径12.8cmを測る。

216は小型の甕である。色調は2次焼成を受けていため灰桃色を呈する。復元口径12.2cmを測る。

217は高壺である。壺部はほぼ完形だが脚部を欠く。壺部は深味があり、屈曲部はあまり明瞭ではない。風化が進んでいるが色調は茶橙色を呈し、口径14.2cm、壺部高7.0cmを測る。

218は甌などの把手である。胎土は良好で、淡茶灰色を呈する。

石器 (219・220) 219・220はいずれも滑石である。219は有孔円板の未製品であろう。両面を研磨し板状に仕上げ、側面研磨の途中で放棄したものと考えている。タテ1.91cm、ヨコ2.02cm、厚さ0.4cm、重量2.5gを測る。

220は原石である。タテ8.5cm、ヨコ7.0cm、厚さ3.1cm、重量220gを測る。

S B 3 a (古)・b (新) (図版7、第26図)

調査区の中央部東に位置し、S B 2・S B 4に切られる。拡張住居と考えられ、西辺および北辺はそのままに東辺を0.85m、南辺を0.9mほど拡張されている。また北西角からは西に向かつて約10mの長さで排水溝が延びている。

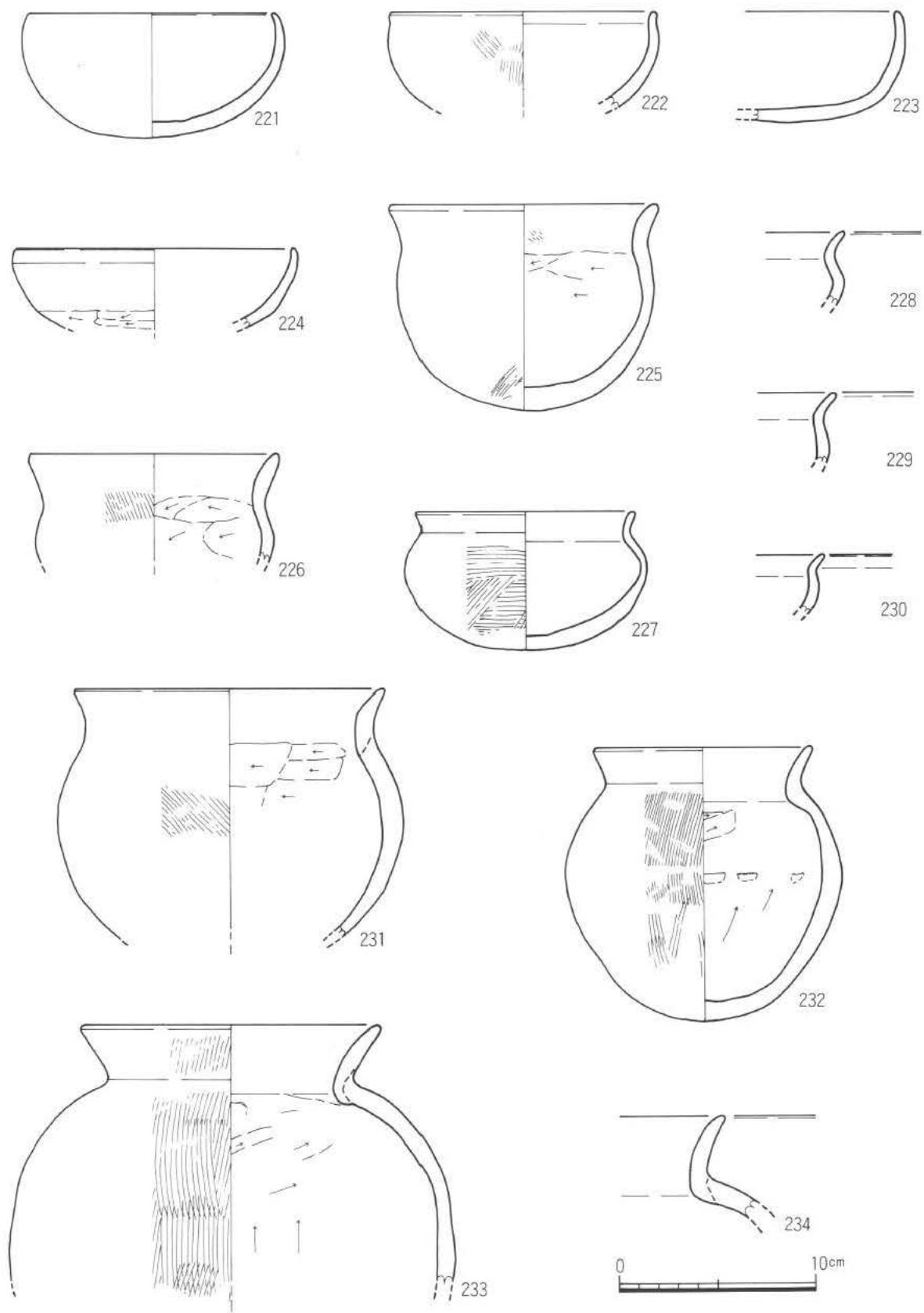
主柱穴はいずれも4本であるが、柱ハはS B 1でも確認されているように、S B 3 aからbへと継続使用されているようだ。

竈については北辺中程に火床が残っており、ここが竈であった可能性が高い。

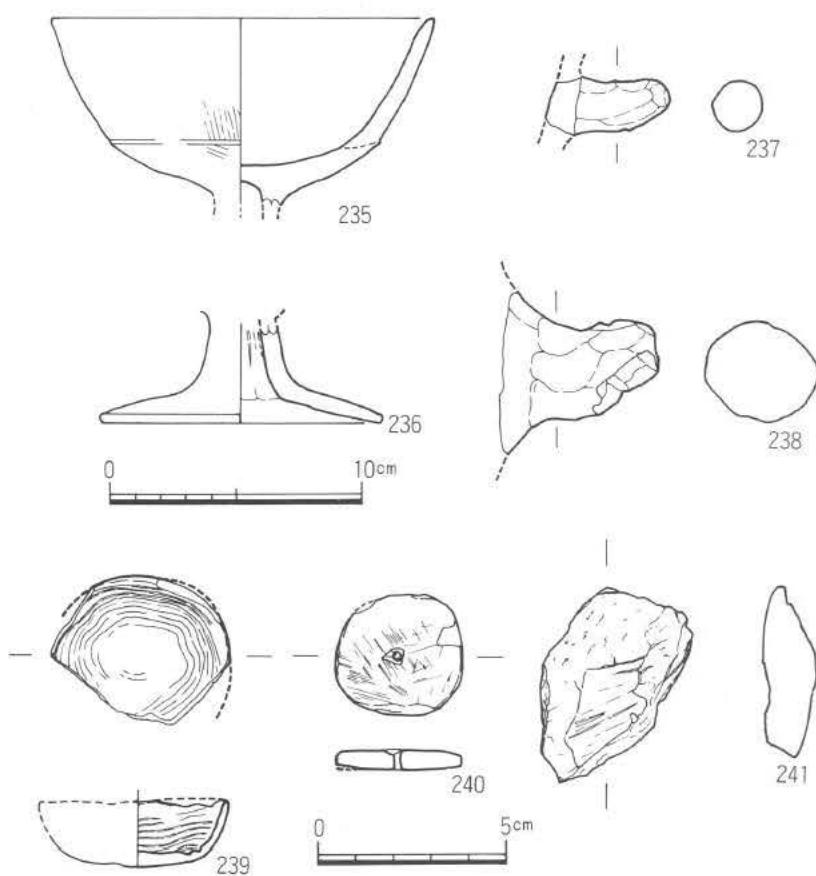
出土遺物 (第27・28図) S B 3 bの出土遺物は北周壁溝(224・231)、南周壁溝(236)、西周壁溝(221・223・225~228・232・235・237・238)、床面(240)、他は覆土から、S B 3 aの出土遺物は柱イ(241)からである。

土師器 (221~239) 221~224は壺である。221は口縁部の一部を欠くが、ほぼ完形品である。体部に深味があり、口縁部は緩やかに内弯する。色調は茶橙色を呈し、口径12.8cm、器高6.4cmを測る。222は深味のある体部を持ち、口縁部は僅かに外反する。外面にはハケ目が残るが、全体をナデで仕上げている。復元口径13.4cmを測る。223は底部付近から丸味をもつて屈曲し、口縁部は直状に立ち上がって端部を僅かに内傾させる。体部下半はヘラ削り、他はナデで仕上げている。色調は灰橙色を呈し、器高は6.7cmを測る。224は口縁端部を強いヨコナデによって屈曲させている。体部下半を手持ちヘラ削り、他はナデで仕上げており、復元口径14.4cmを測る。

225~230は鉢である。225は体部はあまり張らずに口縁部を緩やかに外反させる。口縁部はヨコナデ、内面はヘラ削り、外面はハケ目が残る。外面は2次焼成を受けており、色調は灰桃色を呈する。復元口径13.4cm、器高10.7cmを測る。226は4分の1程の破片である。色調は赤橙色を呈し、復元口径12.8cmを測る。227は丸底で、体部は張りが強く頸部直下に最大



第27図 S B 3 出土遺物実測図① (1/3)



第28図 S B 3出土遺物実測図② (1/3・1/2)

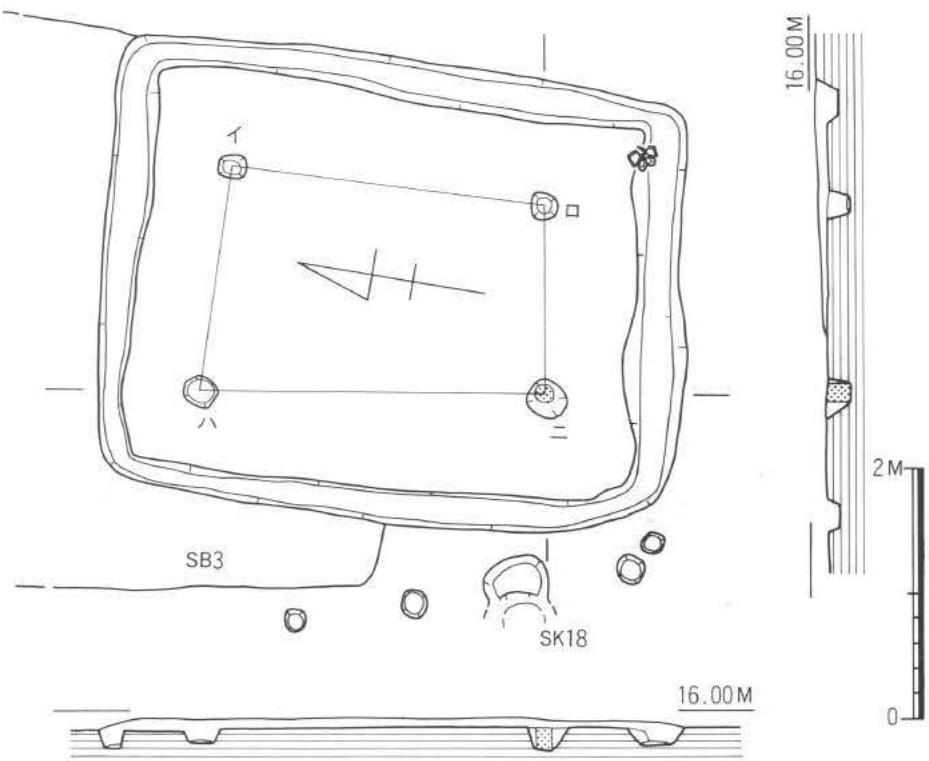
径を持ち、口縁部は短く外反する。色調は茶橙色を呈し、復元口径11.0cm、器高7.1cm、復元体部最大径12.4cmを測る。228～230は短く外反する口縁部を持つ小片である。色調はいずれも灰橙色を呈する。231～234は甕である。231は偏球形の胴部から緩やかに外反する口縁部を持ち、内面へラ削り、外面はハケ目が微かに残存する。色調は赤橙色を呈し、復元口径15.8cmを測る。232は2分の1程の破片である。丸底でなで肩の胴部を持ち、口縁部は外傾して短く直状に延びる。調整は内面へラ削り、外面はハケ目を施すが、内面にはヘラ状工具による刺

突の様な痕跡が残るが接合痕であろうか。底部から胴部最大径付近まで2次焼成を受けており、肩部には煤が付着する。色調は灰桃色を呈し、復元口径11.0cm、器高13.1cm、体部最大径14.2cmを測る。233は丸味のある胴部から「く」字形に外反する口縁部を持ち、内面へラ削り、外面ハケ目を施す。色調は灰橙色を呈し、復元口径15.0cmを測る。234は口縁部小片である。「く」字形に外反する口縁部を持ち、色調は灰橙色を呈する。

235・236は高坏である。235はほぼ完形の坏部である。体部に深味があり、屈曲部にはやや甘いが段を持つ。焼成は比較的良好で色調は赤橙色を呈し、口径15.4cm、坏部高7.0cmを測る。236は脚部であるが235とは別個体である。偏平に開く裾部を持ち、端部で立脚する。色調は橙色を呈し、復元脚底径は11.4cmを測る。

237・238は甕などの把手である。237は細身で断面略円形を呈する。胎土、焼成は良好で、色調は淡黄灰色を呈する。238は粗雑な作りである。色調は灰橙色を呈する。

239はミニチュア土器である。内面には特徴的な細かい筋状の文様が巡っているが、これは同心円文の当て具を型に用いたためではないだろうか。外面はナデで調整し、色調は白



第29図 SB 4 遺構実測図 (1/60)

灰色を呈する。復元口径4.8cm、器高1.7cmである。

石器 (240・241) いずれも滑石製である。240は有孔円板である。直径33.0mm、厚さ5.25mm、孔径1.5mm、重量9.9gを測る。241は原石の一部に鉄製利器で据られた痕跡が残る。長さ55.0mm、幅34.0mm、厚さ14.0mm程で重量29.8gを測る。

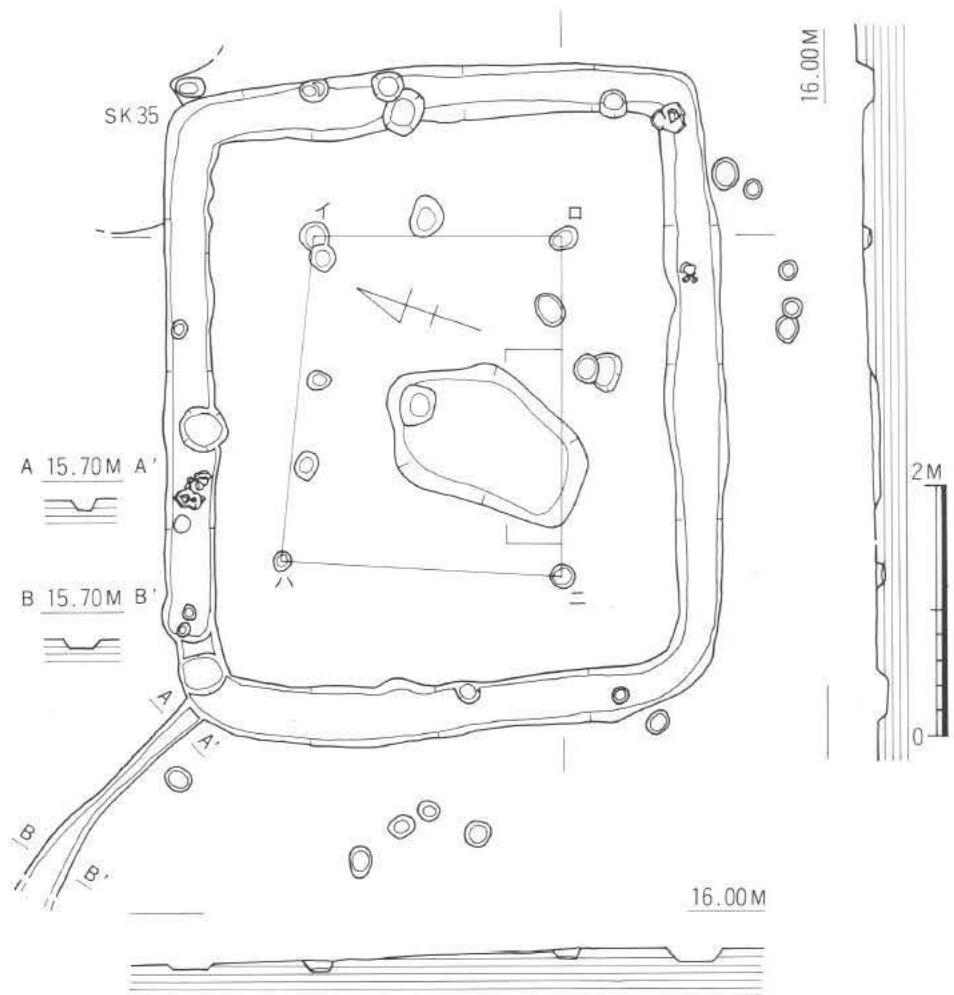
SB 4 (図版7、第29図)

調査区の中央部東に位置し、SB 3を切っている。周壁溝を巡らすが、排水溝は持たない。主柱穴は4本である。

出土遺物 (第31図) 遺物は主に東周壁溝 (242・244・245・247)、南周壁溝 (243) から出土している。

土師器 (242～244) 242は甕である。なで肩の胴部から口縁部は緩やかに外反し、端部を丸く收めているが外面には小さな段を持つ。内面は荒いヘラ削り、外面はヘラ削りの後ナデで仕上げている。胎土はやや粗で細かな砂粒、赤褐色粒を多く含み、色調は灰褐色を呈する。復元口径14.6cmを測る。

243は鉢の口縁部小片である。口縁部は外反が強く端部を断面方形に收める。2次焼成を



第30図 SB 5 遺構実測図 (1/60)

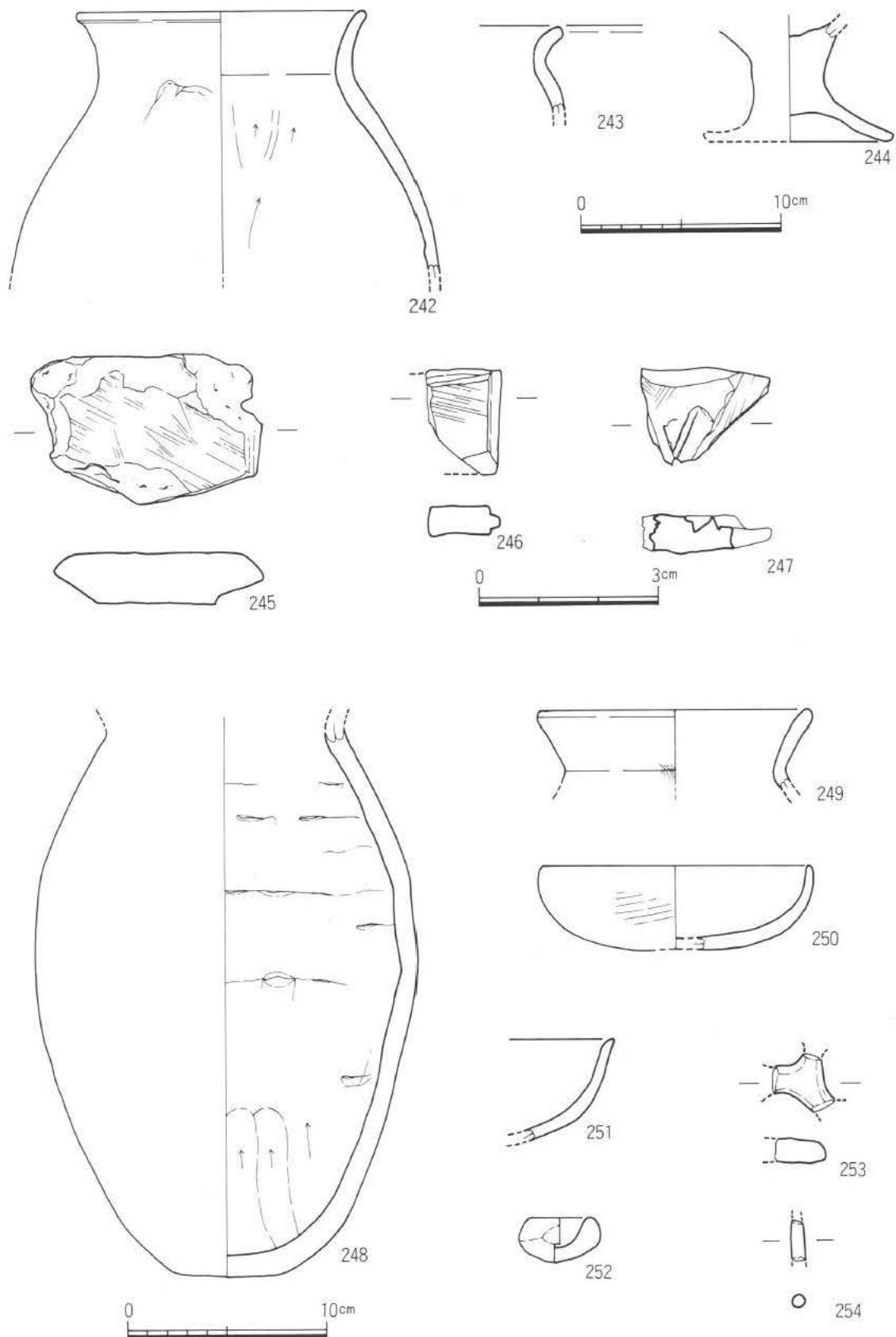
受けており、色調は赤灰色を呈する。

244は台付鉢の脚部であろう。脚柱部は中実で、裾部は大きく外反して開き端部で立脚する。調整はナデで仕上げているが粗雑な作りである。胎土はやや粗で1mm以下の砂粒を含み、色調は赤橙色を呈する。

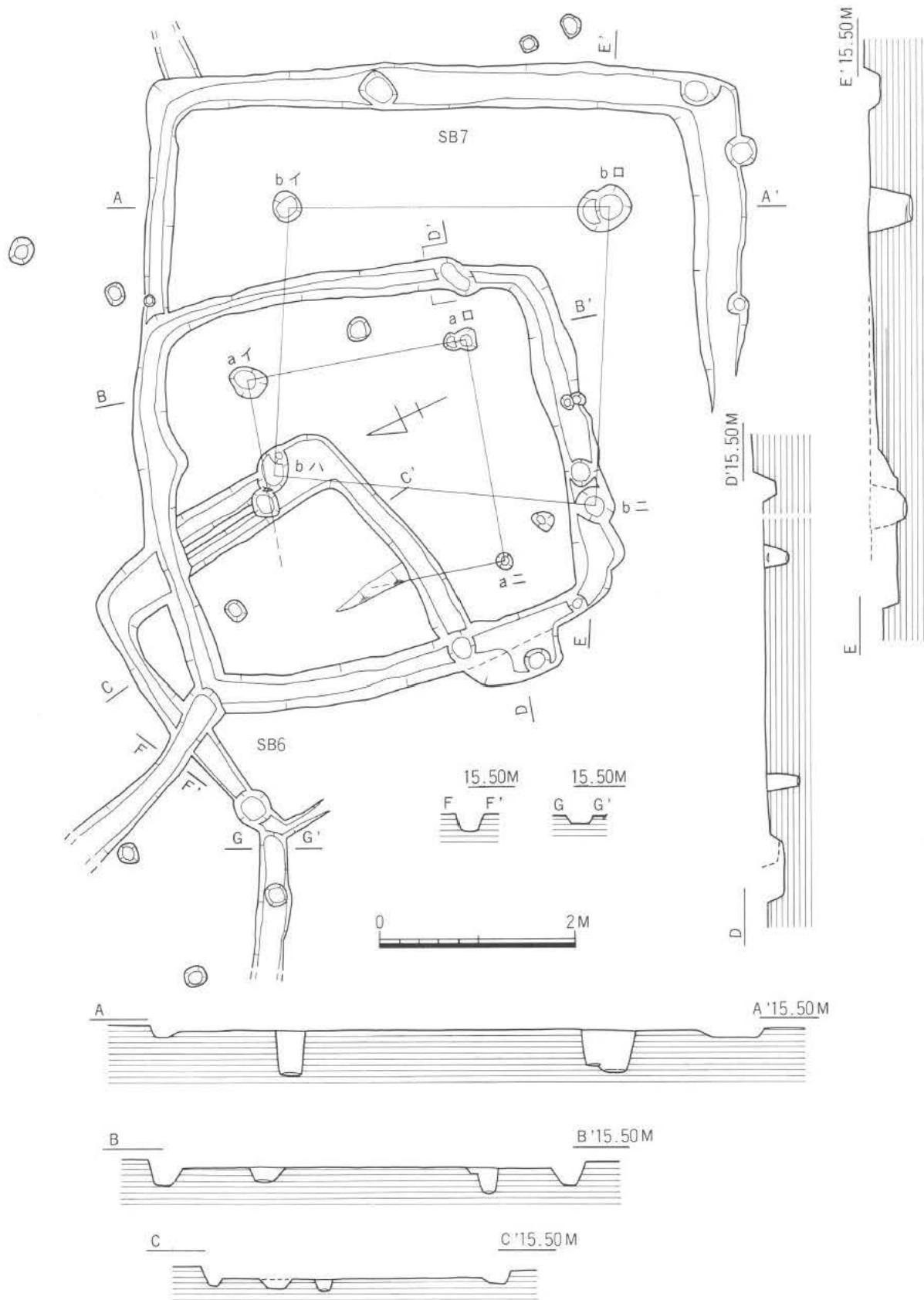
石器 (245~247) 245は両面に研磨の板状品である。比較的厚みがあり、タテ25.0cm、ヨコ37.8cm、厚さ8.7cm、重量は11.3cmを測る。

246は比較的大型の方形チップである。両側からの筋切りによって折り取っている。計測値はタテ18.0mm、ヨコ13.0mm、厚さ5.9mm、重量2.0gを測る。

247は不整形なチップである。鉄製利器で削ったような痕跡が残る。タテ16.2mm、ヨコ21.8mm、厚さ6.3mm、重量2.5gを測る。



第31図 S B 4 · 5 出土遺物実測図 (1/3 · 1/1)



第32図 SB6・7 遺構実測図 (1/60)

S B 5 (図版8、第30図)

調査区の中央部東に位置し、S K35を切り、排水溝がS B 7を切る。周壁溝が巡り、北西角からは西に向かつて排水溝が延びている。主柱穴は4本である。

出土遺物 (第31図) 遺物は主に北周壁溝 (249・250)、南周壁溝 (248・251・252) から出土している。

土師器 (248~254) 248・249は甕である。248は底部は平底気味で、胴部の張りは小さく長胴化している。内面は接合痕が明瞭に残る部分もあるがヘラ削りを施し、外面は風化が進んでいるがナデである。色調は赤橙色を呈し、復元胴部最大径は19.0cmを測る。249は「く」字形に外反する口縁部である。色調は灰橙色を呈し、復元口径13.8cmを測る。

250・251は壺である。250の体部は内弯しながら浅く立ち上がり、口縁部はほとんど内傾しない。外面はハケ目の後ナデ、他はナデである。色調は灰橙色を呈し、復元口径13.6cmを測る。251は口縁端部を僅かに外へ引き出している。焼成が甘いため風化が進み、色調は赤橙色を呈する。

252はミニチュア土器である。僅かだが内外面に赤色顔料が付着しているようである。胎土、焼成は良好で色調は灰褐色を呈する。口径3.1cm、器高2.3cmを測る。

253は小片だが甕底部の穿孔部分であろう。風化が進んでいる。

254は棒状の不明土製品である。上下を欠くが断面は略円形で色調は灰橙色を呈する。現存長は2.0cm、直径は0.7cm程である。

S B 6 (図版8、第32図)

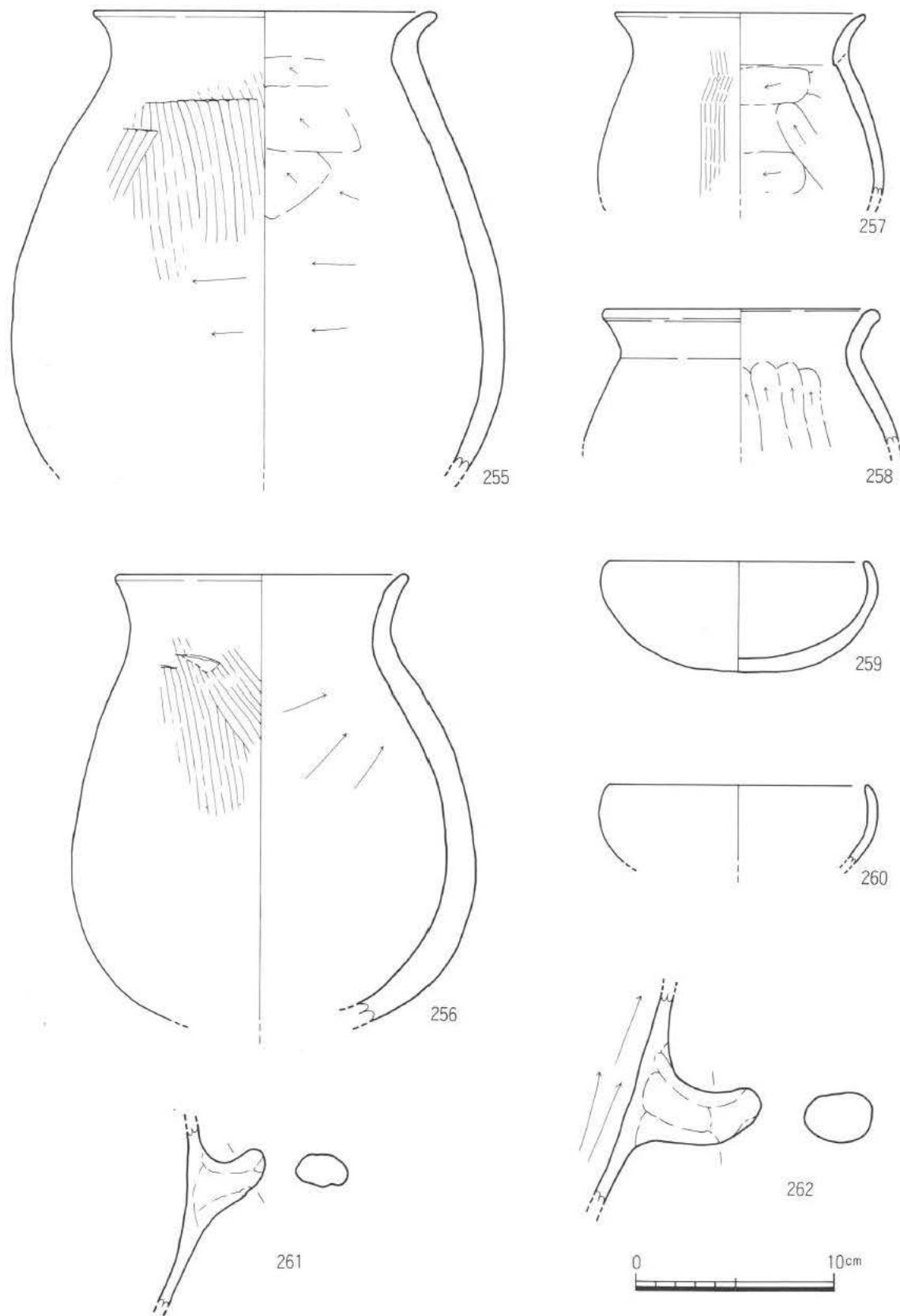
調査区のほぼ中央部に位置している。切り合い関係はS B 7を切り、排水溝がS B 8の南周壁溝を切っている。

周壁溝が巡っているが西辺は削平のためほとんど失われている。東周壁溝は二重になつており拡張住居として捉えることもできようが、新古の切り合いを認めることができなかつたため、ここでは单一のものとして報告している。なお遺物はすべて外側の周壁溝から出土している。

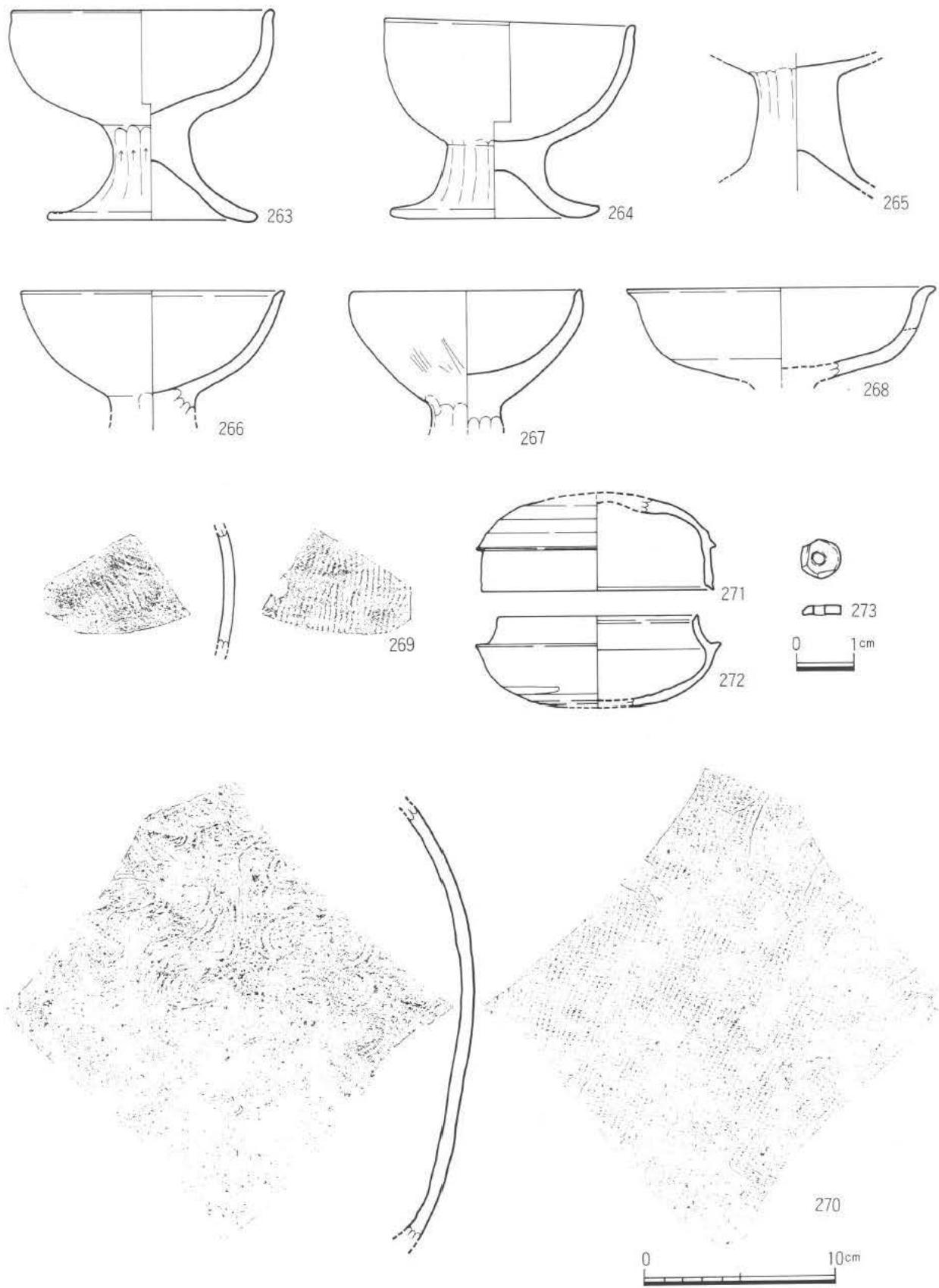
排水溝は北西角から1段掘り下げて始まっており、西へ向かつてS字状に延びる。主柱穴は確認されなかつた。

出土遺物 (第33・34図) 遺物は主に東周壁溝 (255~257・261・262・269~272)、北周壁溝 (263・264)、排水溝 (259・260) から出土している。

土師器 (255~268) 255~258は甕である。255はなで肩で下膨れの胴部から短く外反する口縁部を持ち、内面ヘラ削り、外面は荒いハケ目で調整する。外面は2次焼成を受けてお



第33図 S B 6 出土遺物実測図① (1/3)



第34図 S B 6 出土遺物実測図② (1/3・1/1)

り、色調は赤橙褐色を呈する。口径17.2cm、胴部最大径24.7cmを測る。256は口縁部の外反が緩やかで頸部の締まりがやや弱くなる。色調は赤橙色を呈し、口径14.2cm、復元胴部最大径20.1cmを測る。257は張りのない胴部から口縁部が緩やかに外反し、端部外面に面を持つて収める。色調は灰橙色を呈し、復元口径12.6cmを測る。258は色調は灰褐色を呈し、復元口径13.8cmを測る。

259・260は壊である。259は色調は灰茶褐色を呈し、復元口径12.8cm、器高5.5cmを測る。260は風化が進んでいるが、内外面とも丁寧な研磨あるいはナデが施され、胎土は緻密である。一見、中世の黒色土器のようで色調は内外面とも灰黒色、露胎部は灰橙色を呈する。復元口径13.0cmを測る。なお内面には鼠の門歯痕と思われる小キズが残る。

261・262は甌などの把手である。いずれも断面は偏橢円形で色調は灰橙色を呈する。

263～267は台付鉢である。263・264はいずれも深みのある体部を持ち、口縁部は端部をやや外側へ引き出す。脚部は外反して大きく開き、264は裾端部を僅かにはね上げる。調整はいずれも脚柱部をヘラ削り、他はナデで仕上げているが、263は体部下半までヘラ削りを行っている。263の色調は灰橙色を呈し、復元口径14.0cm、器高11.0cm、復元脚底径11.0cmを測る。264の色調は赤橙色、口径13.2cm、器高10.5cm、脚底径11.0cmを測る。265は脚柱部である。中実で外面にはヘラ削りを施す。色調は灰橙色を呈し、基部径は4.2cmを測る。266は脚部を欠いている。体部はやや浅めで緩やかに内弯しながら立ち上がり、口縁部は直口である。風化が進んでいるがナデで仕上げている。色調は黄橙色を呈し、復元口径13.8cmを測る。267は脚柱部をヘラ削り、他はナデで仕上げているが、体部外面にはハケ目の痕跡が残る。色調は灰橙色を呈し、復元口径12.0cmを測る。

268は高壊の壊部で、口縁部の4分の1程が残る。体部は浅めで甘い屈曲部を持ち、口縁部は外へ引き出している。屈曲部より下はヘラ削り、他はナデである。胎土はやや粗で砂粒を多く含み、色調は灰橙色を呈する。復元口径16.0cmを測る。

須恵器 (269～272) 269・270は胴部片である。269は外面は平行タタキを施し、内面は当て具痕をスリ消している。胎土は精良だが、焼成はやや軟調で白灰色を呈する。270は大型甌の胴部であろう。外面は平行タタキを施したのちカキ目、内面は同心円文の当て具痕が残るが、下半は半スリ消しを行っている。胎土はやや粗で、焼成は良好、色調は暗青灰色を呈する。

271は壊蓋である。体部と口縁部の境には稜を持つがやや鋭さを失い、口縁部内面には窪みを持つた段がある。胎土、焼成は良好で色調は暗青灰色を呈する。復元口径12.2cm、復元器高5.1cmを測る。

272は壊身である。口縁部は内傾し、端部内面に窪みを持つ。受部上面は平坦だがやや上

に引き出している。胎土、焼成は良好で色調は淡青灰色を呈する。復元口径10.4cm、復元受部径12.8cm、復元器高48cmを測る。

石器 (273) 側面の研磨が粗雑な滑石製の臼玉である。直径6.6mm、厚さ1.4mm、孔径1.8mm、重量0.1gを測る。

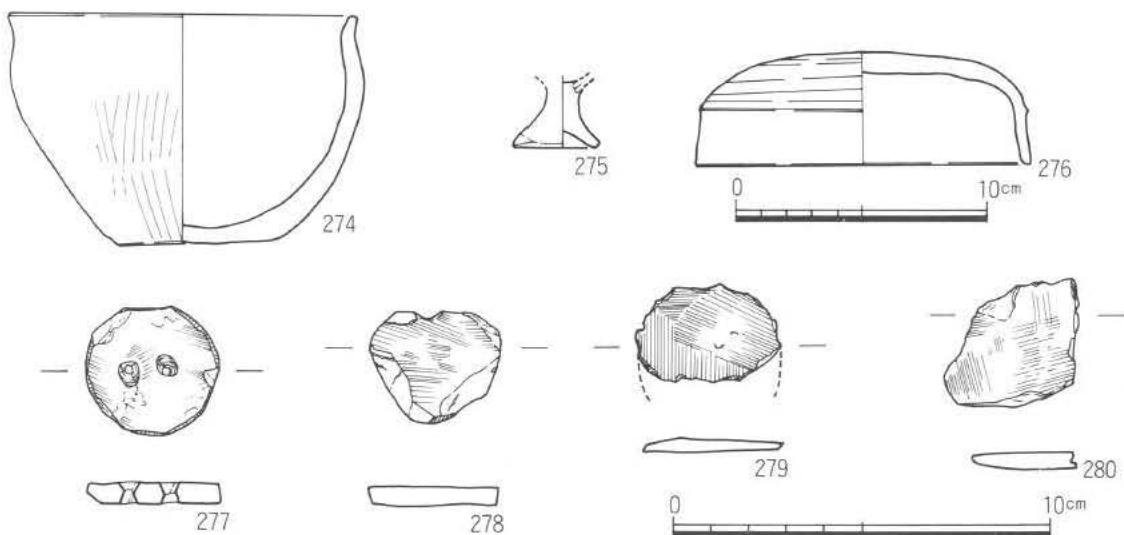
S B 7 a (古) · b (新) (図版8、第32図)

調査区のほぼ中央部に位置する。主要な切り合い関係は、S B 5の排水溝に切られ、S B 6に切られ、さらに排水溝がS B 22の柱口に切られている。拡張住居跡で東辺を2.4~2.1m、南辺を2.1~1.9m程と大きく拡張している。北辺はそのまま延長しており、西辺はbとの連接部分が削平されているため詳細は不明であるが、aの西辺から大きくずれることはないであろう。

排水溝は北西角から1段掘り下げて始まっており、蛇行しながら北に向かつて延びている。他の排水溝を持つ住居跡はすべて等高線に直角に、略西方向に延びているが、本遺構の場合はS B 8を意識したことと考えられる。このことについては第3章でも触れているので参照願いたい。

主柱穴はいずれも4本であろうが、S B 7 aは1本未検出である。

出土遺物 (第35・36図) S B 7 aの遺物は、主に南周壁溝(279・280)、東周壁溝(274・276)から出土し、S B 7 bの遺物は北周壁(284・287)、他は覆土から出土している。以下それぞれに報告する。



第35図 S B 7 a 出土遺物実測図 (1/3 · 1/2)

S B 7 a

土師器 (274・275) 274は鉢である。底部は平底で口縁部を僅かに外反させる。風化が進んでいるが外面荒いハケ目、他はナデで仕上げる。胎土はやや粗で砂粒を多く含み、色調は灰茶褐色を呈する。復元口径13.8cm、器高9.1cmを測る。

275は台付きのミニチュア土器である。胎土は精良で色調は橙色を呈する。

須恵器 (276) 壱蓋である。口縁部の一部を欠くがほぼ完形品である。天井部は偏平に近く、口縁部と体部の境の稜は鋭さが残るがかなり短い。口縁端部は平坦である。調整は回転ヘラ削りを稜の付近まで施し、他は回転ナデ、天井部内面は不定方向ナデである。色調は淡青灰色を呈し、口径13.4cm、器高4.5cmを測る。

石器 (277~280) すべて滑石製品である。277は2孔を穿った有孔円板である。全体に粗雑な作りで、穿孔は刀子状の鉄製利器の切先で両側から抉り取るように穿っている。直径34.6mm、厚さ6.0mm、重量11.8g、孔径は最大5.0mm、最小2.0mm程である。

278・279は未穿孔だが有孔円板あるいは紡錘車の未製品であろう。278は両面および側面の3分の2程に研磨痕が残る。タテ29.4mm、ヨコ34.0mm、厚さ5.7mm、重量8.7gを測る。279は薄く偏平に両面を研磨しタテ25.0mm、ヨコ38.0mm、厚さ3.8mm、重量5.6gを測る。

280は両面を研磨した板状品である。上端には両側からの筋切で折り取った痕跡が残り、タテ33.4mm、ヨコ35.0mm、厚さ4.2mm、重量7.4gを測る。

S B 7 b

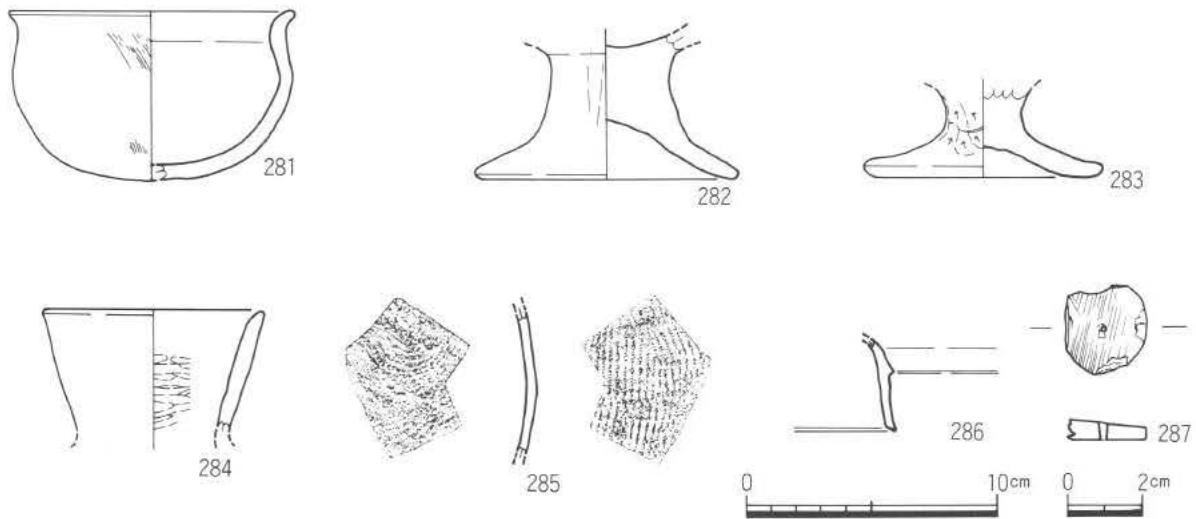
土師器 (281~284) 281は鉢である。丸底で口縁部を強く外反する。風化が進んでいるが外面はハケ目、下半は削りであろう。色調は灰橙色を呈し、復元口径11.0cm、復元器高6.7mmを測る。

282・283は台付鉢の脚部であろう。282は柱状部は太く、裾部は外反して開く。色調は橙色で、脚底径10.5cmを測る。283は外反して偏平に開く裾部を持つ。柱状部は細かいヘラ削り、他はナデを施す。色調は橙色で、復元脚底径9.6cmを測る。

284は丸底壺の口縁部であろうか。内面は灰茶色、外面は黒色を呈し、黒色土器のように外面を燻している。胎土は精良で焼成も良好である。調整は内面に緻密な研磨痕が残るが、外面は研磨の後ナデであろう。

須恵器 (285・286) 285は胴部片である。外面は平行タタキ、内面はあて具痕を半スリ消している。色調は青灰色を呈し、胎土は緻密で、焼成も良好である。

286は壱蓋の口縁部片である。体部と口縁部の境の稜は鋭く、口縁部内面には窪みをもつた明瞭な段をなしている。色調は淡青灰色を呈し、胎土は緻密で、焼成も良好である。



第36図 S B 7 b 出土遺物実測図 (1/3 · 1/2)

石器 (287) 滑石製の有孔円板である。やや粗雑な作りで両面には研磨を施しているが、側面は未調整の部分が残る。タテ23.0mm、ヨコ21.0mm、厚さ5.9mm、孔径1.2mm、重量3.8gを測る。

S B 8 a (古) · b (新) (図版9、第37図)

調査区の中央部西に位置し、S B 6 の排水溝に切られる。拡張住居で西辺および北辺はそのままに東辺を0.5~0.3m、南辺を0.4mほど拡張している。

排水溝は南西角を1段掘り下げて始まり、西に向かって延び、中ほどでやや南に屈曲する。おそらくS B 9を意識してだろう。

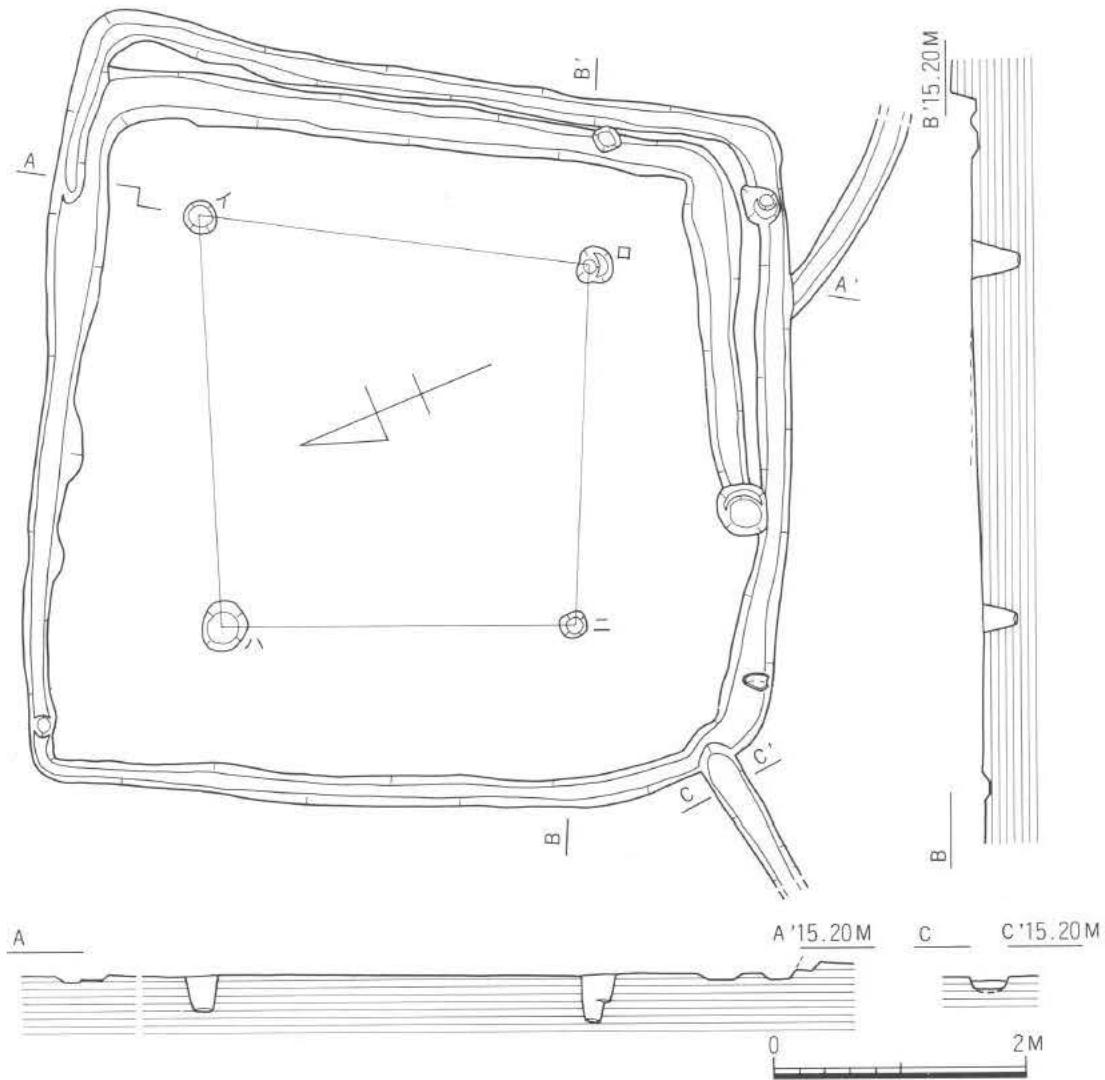
主柱穴は4本で、拡張がごく小規模であったため柱間の変動はない。

出土遺物 (第41図) S B 8 a の遺物は、東周壁溝 (288 · 289) から出土し、S B 8 b の遺物は東周壁溝 (292)、南周壁溝 (293) から出土している。以下それぞれに報告する。

S B 8 a

土師器 (288 · 289) 288は甕である。胴部は丸味が強く、外反する口縁部を持つ。色調は灰橙色を呈し、復元口径18.2cm、復元胴部最大径26.6cmを測る。

289は壊である。胎土は精良、器壁は薄手で非常に作りが良い。風化が進んでいるが、外面は緻密な研磨を施し、内面は丁寧なナデで仕上げている。黒色土器のように燻されており、色調は外面が黒色、内面も外面ほどではないが燻されているようで茶褐色を呈する。



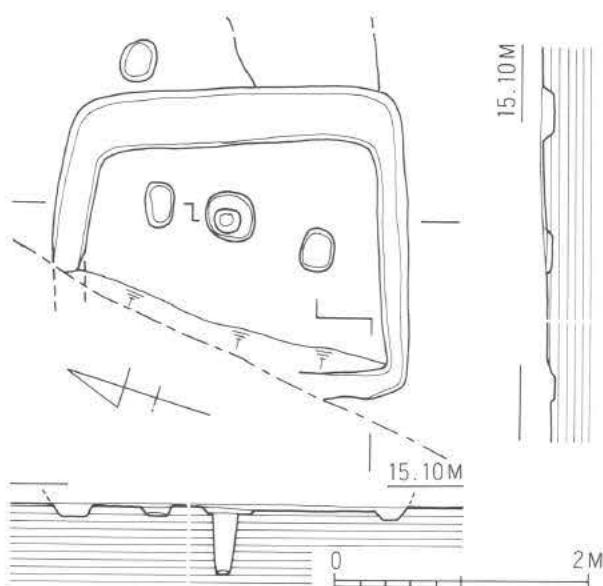
第37図 SB 8 遺構実測図 (1/60)

SB 8 b

土師器 (290・291) 290は壊である。体部は深みがあり、調整は体部下半をヘラ削り、全体をナデで仕上げている。色調は赤橙色を呈し、復元口径12.2cm、器高6.7cmを測る。

291は甕の口縁部片である。外面および口縁部にハケ目の後ナデ、内面はヘラ削りである。色調は黄褐色を呈し、復元口径12.8cmを測る。

須恵器 (292・293) 292は壊蓋の小片である。口縁部と天井部との境に稜を持ち、口縁部は端部内面に僅かに溝を持った段をなす。調整は稜の付近までヘラ削りを施し、全体に鋭さが残る。色調は淡青灰色を呈する。293は把手付きの高壊である。2分の1弱の破片で、把手が両側に付くかは不明。色調は淡青灰色を呈し、復元口径16.8cmを測る。



第38図 S B 9 遺構実測図 (1/60)

S B 9 (図版9、第38図)

調査区の中央部西端に位置し、S K 17を切っている小型の住居跡である。周壁溝が巡っているが、北西角付近は削平によって失われている。主柱穴、竈については不明である。出土遺物は土師器、弥生土器の細片が出土しているが図化できるものはない。

S B 10 (図版10、第39図)

調査区の中央部東端、S B 12の北東に位置する。周壁溝が巡るが、南西辺と西角付近を削平によって失う。また北角の

排水溝との連接部分は試掘時に削平してしまった。主柱穴は3本が残存しているが本来4本柱であろう。

出土遺物 (第41図) 出土遺物は少ない。東周壁溝 (295・296)、覆土 (294) から出土している。

土師器 (294~296) 294は壊である。色調は灰褐色を呈し、復元口径13.2cm、復元器高3.8cmを測る。

295・296は把手である。色調はいずれも橙色を呈する。

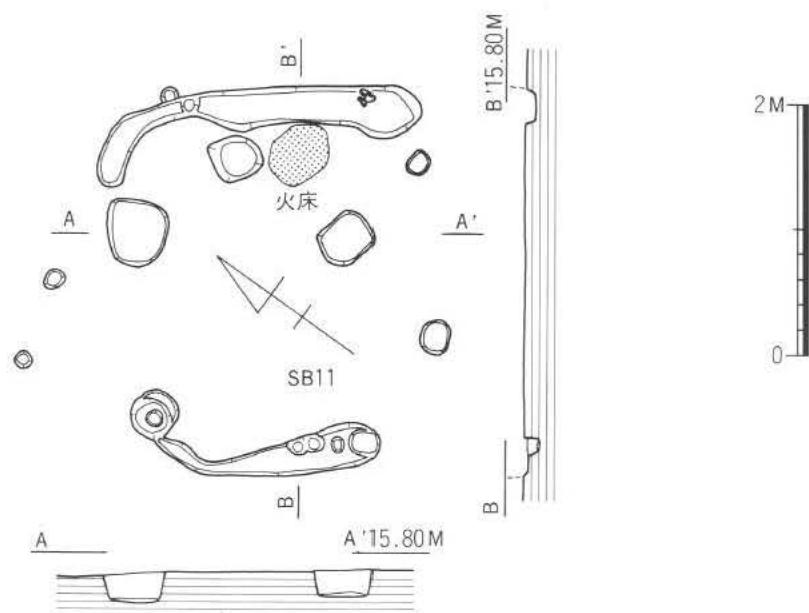
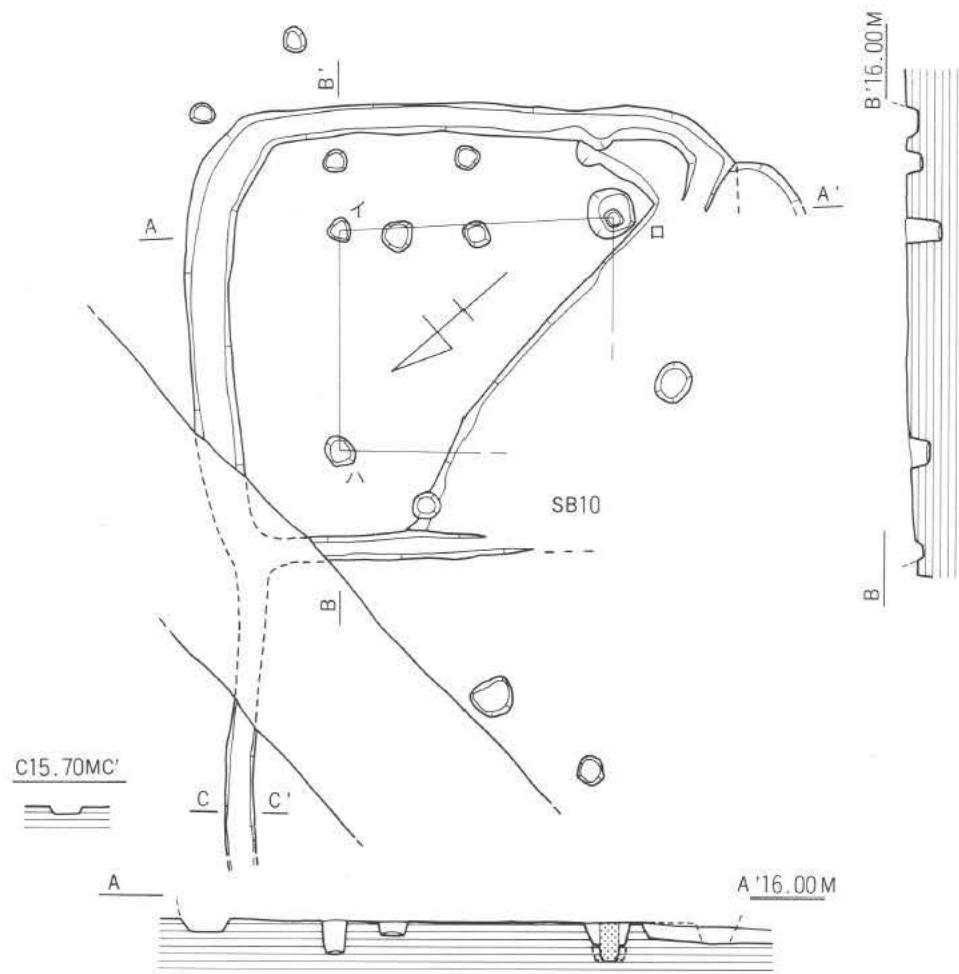
S B 11 (図版10、第39図)

調査区の中央部東、S B 10の南西に位置する小型の住居跡である。北西および南東辺に周壁溝が残ることからその存在を確認できたが、詳細は不明である。北西辺中程に火床が残る。

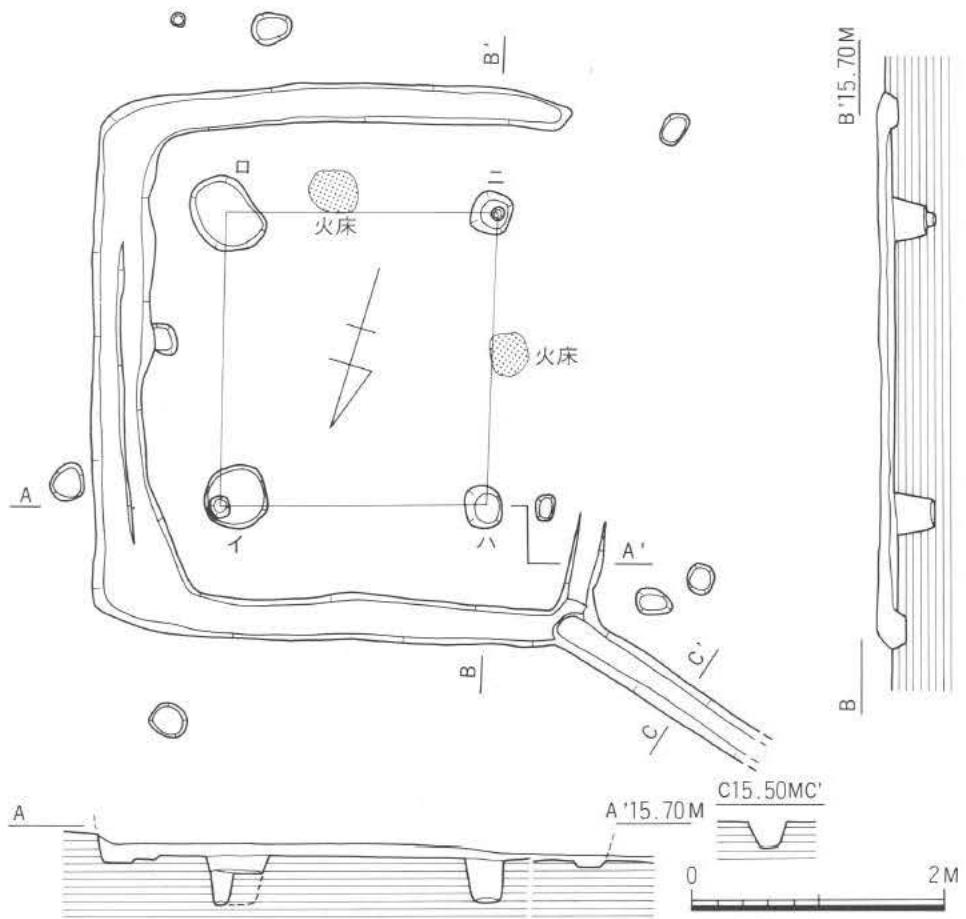
出土遺物 (第41図) 図示した遺物はすべて北周壁溝から出土している。

土師器 (297~300) 297・298は壊である。297は体部が内弯し、口縁部は僅かに肥厚する。色調は茶橙色を呈し、復元口径12.0cmを測る。298は体部が内弯し、口縁部はやや内傾して直状に立ち上がる。体部外面下半はヘラ削り、他はナデで仕上げている。色調は灰橙色を呈し、復元口径13.2cm、復元器高5.8cmを測る。

299・300は手づくね土器である。299は色調は赤橙色を呈し、口径2.2cm、器高1.9cm程度である。300は色調は灰橙色を呈し、口径2.4cm、器高2.6cm程度である。



第39図 SB10・11遺構実測図 (1/60)



第40図 SB 12遺構実測図 (1/60)

SB 12 (図版11、第40図)

調査区の中央南寄り、SB 11の西に位置しSK 27に切られている。SB 13の排水溝との切り合い関係は確認できなかった。

周壁溝が巡るが西辺は削平によって失われ、排水溝は北西角より一段掘り下げて始まり、西へ向かつて緩やかに蛇行しながら延びる。竈については西辺および南辺に火床が残るが詳細は不明である。

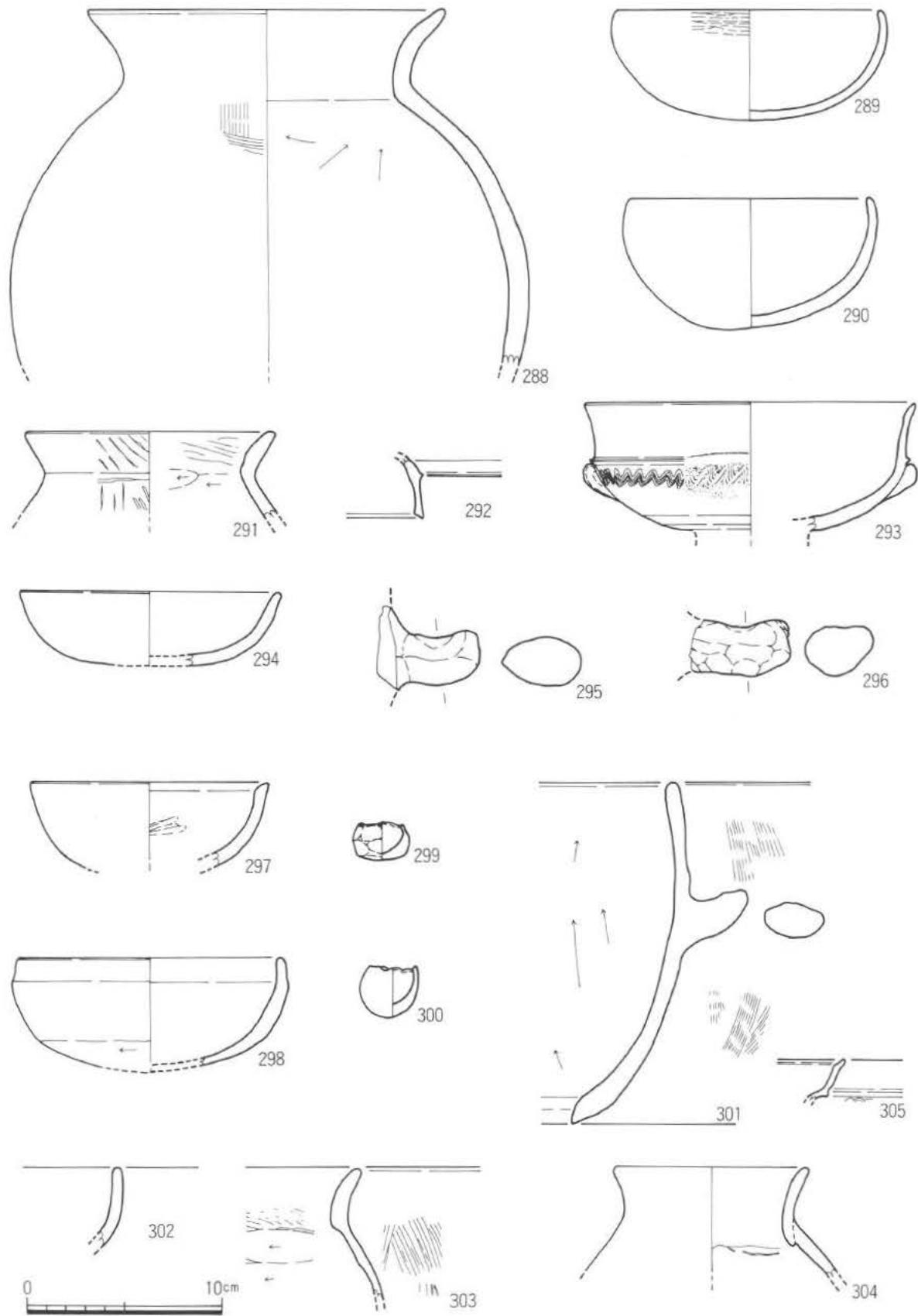
出土遺物 (第41図) 図示した遺物は排水溝 (301・303・304) および覆土である。

土師器 (301~304) 301は甌である。縦長に残存しており、口径は復元できなかった。色調は茶橙色を呈し、器高17.4cmである。

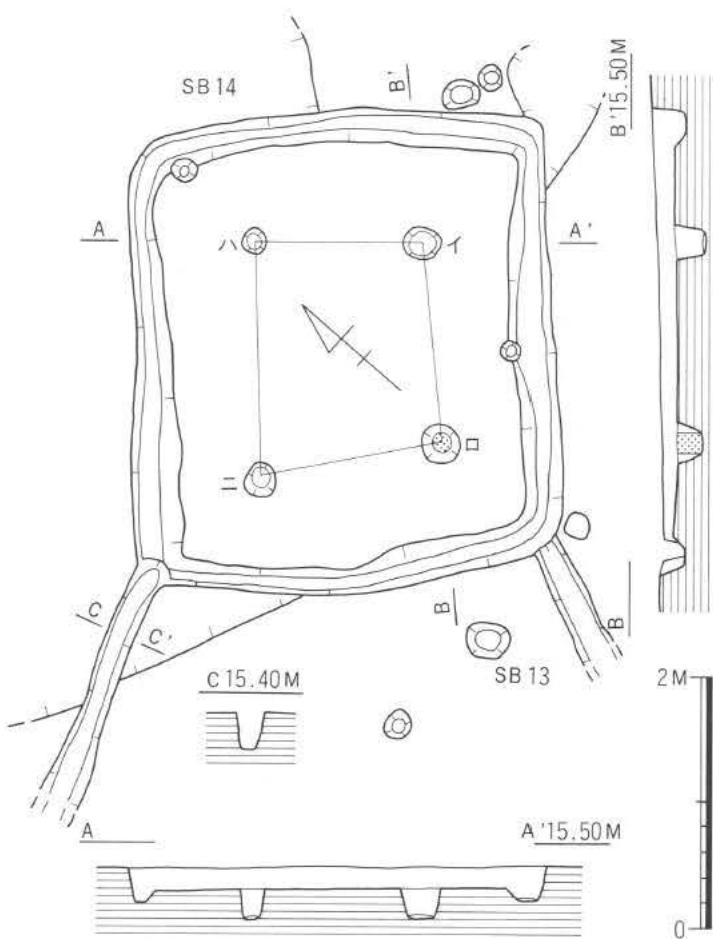
302は甌の口縁部小片である。胎土は良好で、色調は茶橙色を呈する。

303は甌の口縁部小片である。色調は赤橙色を呈する。

304は壺である。全体に風化が進んでおり、調整は判然としない。色調は淡灰橙色を呈し、



第41図 S B 8・10~12出土遺物実測図 (1/3)



第42図 SB 13遺構実測図 (1/60)

北西周壁溝 (307)、他は覆土出土である。

土師器 (306~311) 306~308は甕である。306は張りのある胴部を持ち、口縁部は短く外反する。内面はヘラ削り、外面は縦方向のハケ目を施し、色調は灰橙色を呈する。復元口径14.8cmを測る。307は口縁部は完形である。色調は灰橙色を呈し、口径12.6cmを測る。308は胴部はあまり張らず、口縁部は緩やかに外反する。胎土は精良で色調は茶橙色を呈する。

309は壊である。体部は丸みが強く、内面は丁寧な削り、外面はハケ目を施した後全体をナデで仕上げている。色調は灰橙色を呈し、復元口径12.0cm、器高5.8cmを測る。

310は甕か鉢の口縁部である。内面はヘラ削り、外面は荒いハケ目を施し、淡灰橙色を呈する。

311は手づくね土器である。胎土は精良で口径4.6cm、色調は灰橙色を呈する。復元器高2.8cm程である。

須恵器 (312・313) 312・313は壊身である。312は口縁部内面に段を持ち、受部はやや上

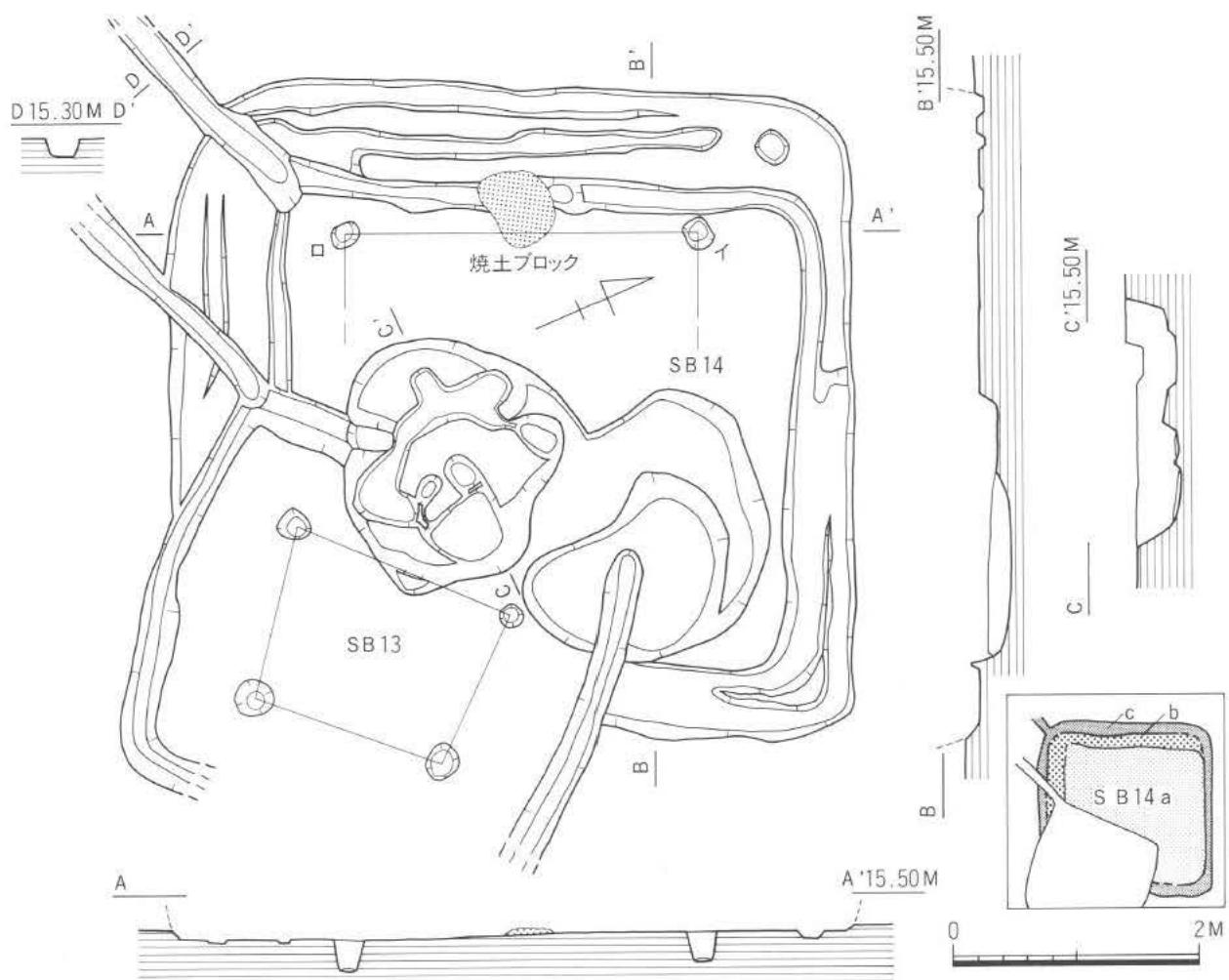
口径9.8cmを測る。

須恵器 (305) 壱の口縁部小片である。口縁部の内面に段を持ち、外面の稜直下に僅かに波状文が残る。胎土、焼成は良好で色調は淡青灰色を呈する。

S B 13 (図版11・12、第42図)

調査区の中央部西端に位置し、S B 14を切り、S K 27に排水溝を切られている。周壁溝が巡り、排水溝は西角から一段掘り下げて始まる。西へ向かつて直状に延び先端に不整梢円形の水溜め土坑を持つ。主柱穴は4本で、竈については不明である。

出土遺物 (第44図) 図示した遺物は南西周壁溝 (306)、



第43図 SB14遺構実測図 (1/60)

方に引き出して、その直下からヘラ削りが始まっている。焼成はやや甘く、色調は淡灰色を呈する。313は口縁部は内傾して立ち上がり、端部にやや丸みを帯びた平坦面を作る。受部は短く、やや上方に引き出している。焼成は良好で、色調は淡青灰色を呈する。復元口径10.2cm、復元受部径12.6cmを測るが、小片のため復元値には若干疑問が残る。

SB14a・b・c (図版12、第43図)

調査区の中央部西端に位置し、SB13に切られ、SK27に排水溝を切られている。拡張住居であるが明瞭な切り合い関係を確認できないままに掘上げてしまった。周壁溝および排水溝の状態から3度にわたる拡張が行われていると考え、便宜的にa・b・cとしている。西辺中程に竈の残骸と思われる焼土ブロックが残る。また下層土坑を有する。

出土遺物 (第44図) S B14 a 南周壁溝 (322)、下層土坑 (314・315・319・320)、その他は覆土から出土している。

土師器 (314～319) 314～316は甕である。314は色調は茶橙色を呈し、復元口径12.8cmを測る。315は色調は茶褐色を呈し、復元口径20.2cmを測る。316は色調は灰桃色を呈し、復元口径10.6cmを測る。

317は鉢である。口縁部は外傾して直状に立ち上がる。口縁部内面にハケ目が残るが全体をナデで仕上げている。色調は橙色を呈し、復元口径10.6cmを測る。

318は大型の壺である。外面はハケ目が残るが全体をナデで仕上げている。色調は茶橙色を呈し、口径15.8cm、器高8.0cmを測る。

319は高壺の脚部である。裾部は屈曲して大きく開き、端部で立脚する。胎土は砂粒、赤褐色粒を含むが良好で、色調は赤橙色を呈し、脚底径11.4cmを測る。なお裾部内面には黒褐色の付着物がある。

須恵器 (320・321) 320は壺蓋である。天井部と口縁部の境には稜を持ち、口縁端部内面は僅かに窪んで段をなす。胎土は砂粒を若干含むが良好で、焼成も堅緻である。色調は淡青灰色を呈し、復元口径12.4cm、復元器高4.8cmを測る。321は壺身である。口縁部は直状に立ち上がり、端部内面は僅かに窪んで段をなす。受部は太く短く水平に引き出す。色調は淡青灰色を呈し、復元口径10.8cm、復元受部径12.2cmを測る。

石器 (322) 滑石製の有孔円板である。側面および外面は荒く研磨されている。直径28.0mm、厚さ3.2mm、孔径1.2mmを測る。

このほかに S K 8 出土の須恵器甕と接合する資料があるが、「4. その他の遺構、遺物」の中で紹介する。

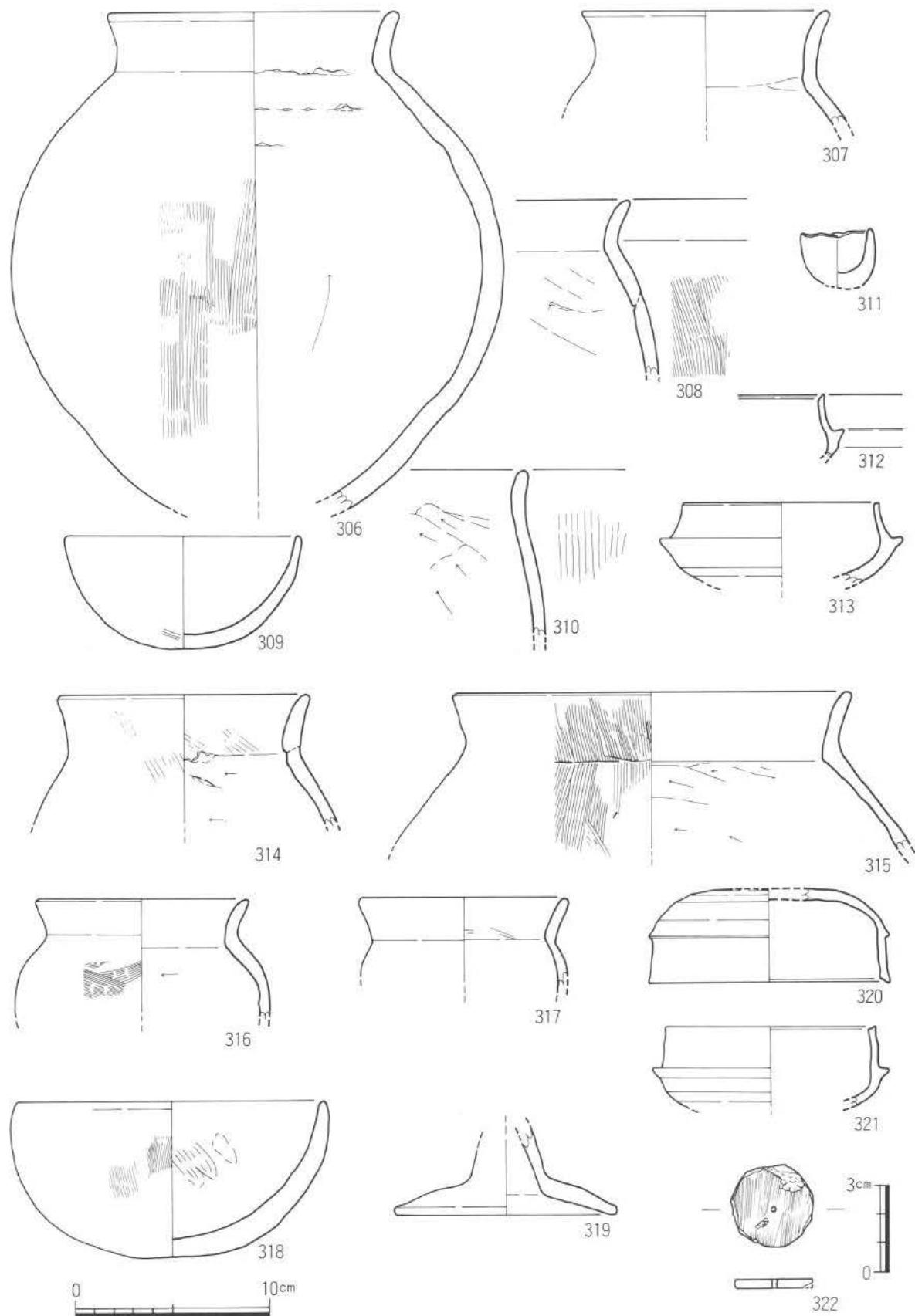
S B15 (図版12、第45図)

調査区の中央部西端に位置し、S B16を切っている。南西角から排水溝が2.4mほど延び、先端に不整形の水溜め土坑を持つ。主柱穴は4本で、竈については北辺および西辺中程に火床を持つが詳細は不明である。

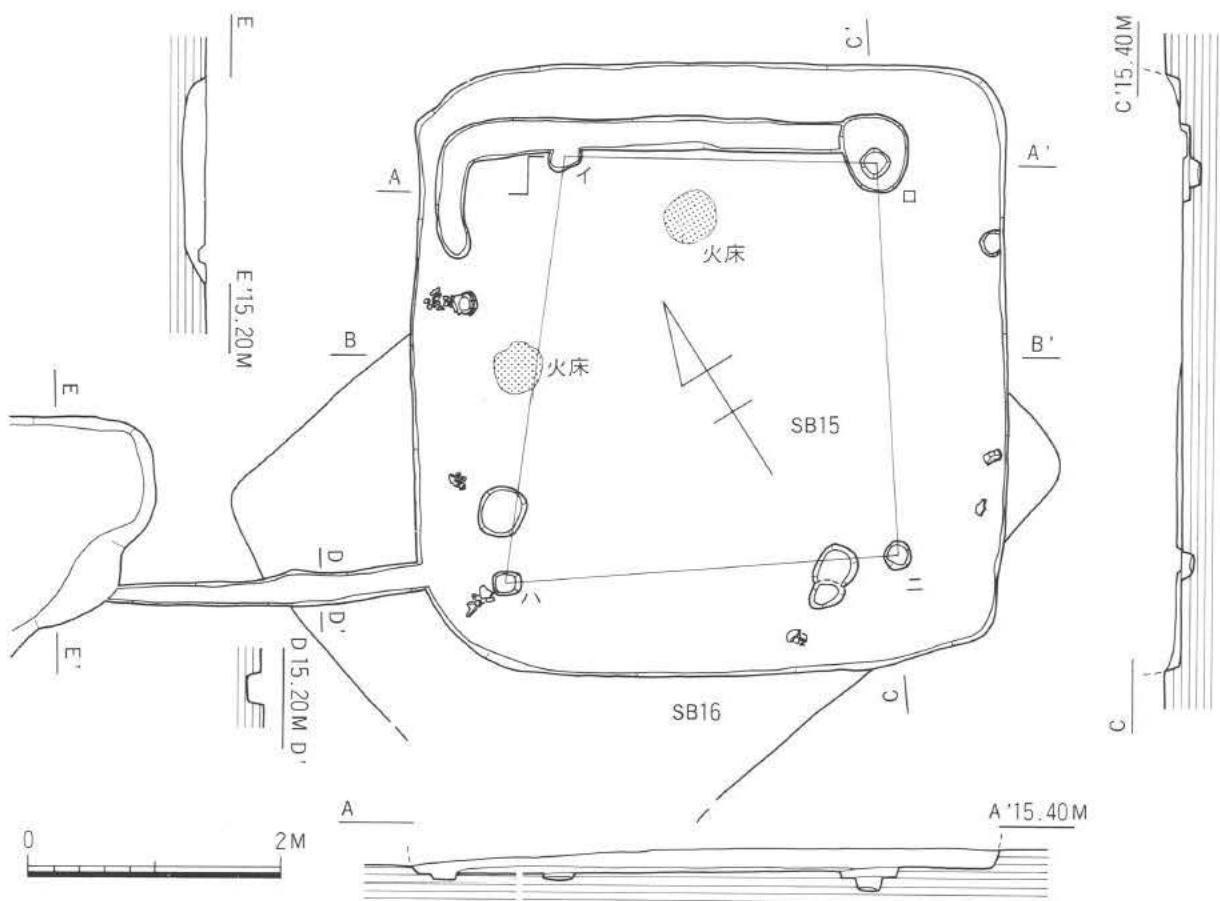
出土遺物 (第46図) 図示した遺物は床面 (323・324・326)、他は覆土出土である。

土師器 (323～329) 323・324は甕である。323は口縁部を強く外反し、内面ヘラ削り、外面はハケ目の後ナデを施す。色調は黄橙色を呈し、口径17.4cmを測る。324は色調は赤橙色を呈し、復元口径13.8cmを測る。

325・326は鉢である。325は胴部があまり張らず口縁部が緩やかに外反する。色調は赤橙色を呈し、復元口径17.2cmを測る。326は体部は丸みを持って内弯し、口縁部は小さく外反



第44図 S B 13・14出土遺物実測図 (1/3・1/2)



第45図 SB 15遺構実測図 (1/60)

する。外面はハケ目が残るが全体をナデで仕上げている。色調は赤橙色を呈し、復元口径10.0cm、器高7.7cmを測る。

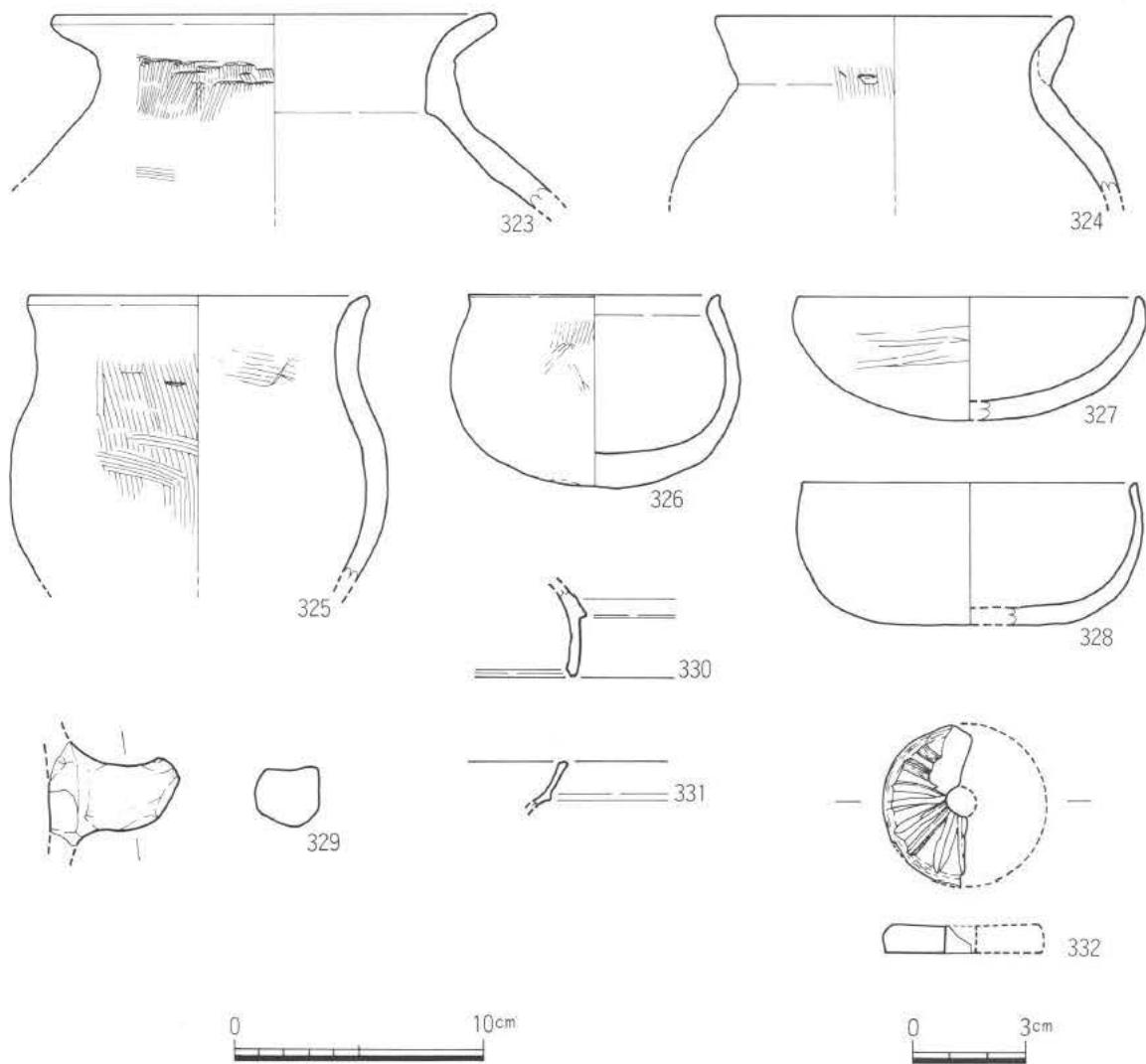
327・328は壊である。327は体部は浅く、緩やかに内弯しながら立ち上がり、口縁部は僅かに屈曲して直立する。外面には荒いハケ目が施され、全体をナデで仕上げている。色調は赤橙色を呈し、復元口径12.8cm、復元器高4.9cmを測る。328は底部は平底氣味で、体部は内弯しながら立ち上がる。色調は灰橙色を呈し、復元口径13.2cm、復元器高5.7cmを測る。

329は瓶などの把手である。色調は灰橙色を呈する。

須恵器 (330・331) 330は壊蓋の口縁部片である。天井部と口縁部との境に明瞭な稜を持ち口縁部は内面を僅かに窪ませて段をなす。胎土は良好で、焼成も堅緻、色調は青灰色を呈する。

331は瓶の口縁部片である。稜の上下に波状文を施す。

石器 (332) 滑石製の紡錘車である。2分の1程の破片であるが、穿孔部から外縁に向



第46図 S B 15出土遺物実測図 (1/3 · 1/2)

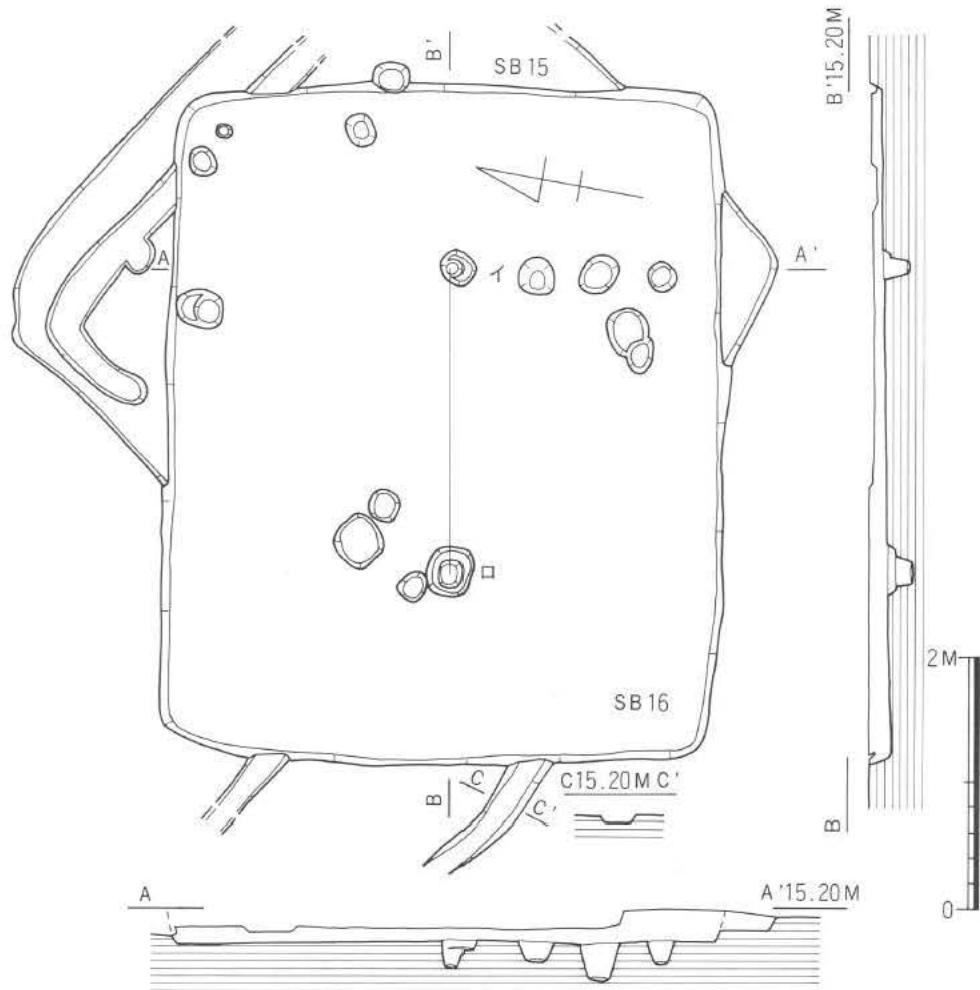
て、放射状に深く筋目を刻んでいる。直径は43.5mm、孔径8.2mm、厚さ7.6mm、重量12.0gを測る。

S B 16 (図版13、第47図)

調査区の中央部西端に位置し、S B 15に切られる。周壁溝はないが、西辺から短い排水溝が延びている。主柱穴は2本である。

出土遺物 (第49図) 図示した遺物は排水溝 (341) 以外はすべて床面からの出土である。

土師器 (333~342) 333~335は甕である。333は胴部は丸みを持ち、口縁部は強く「く」字形に外反する。胴部内面はヘラ削り、口縁部はヨコナデを行うが外面は2次焼成を受けており風化が著しい。色調は暗灰橙色を呈し、復元口径14.0cm、復元胴部最大径18.0cm

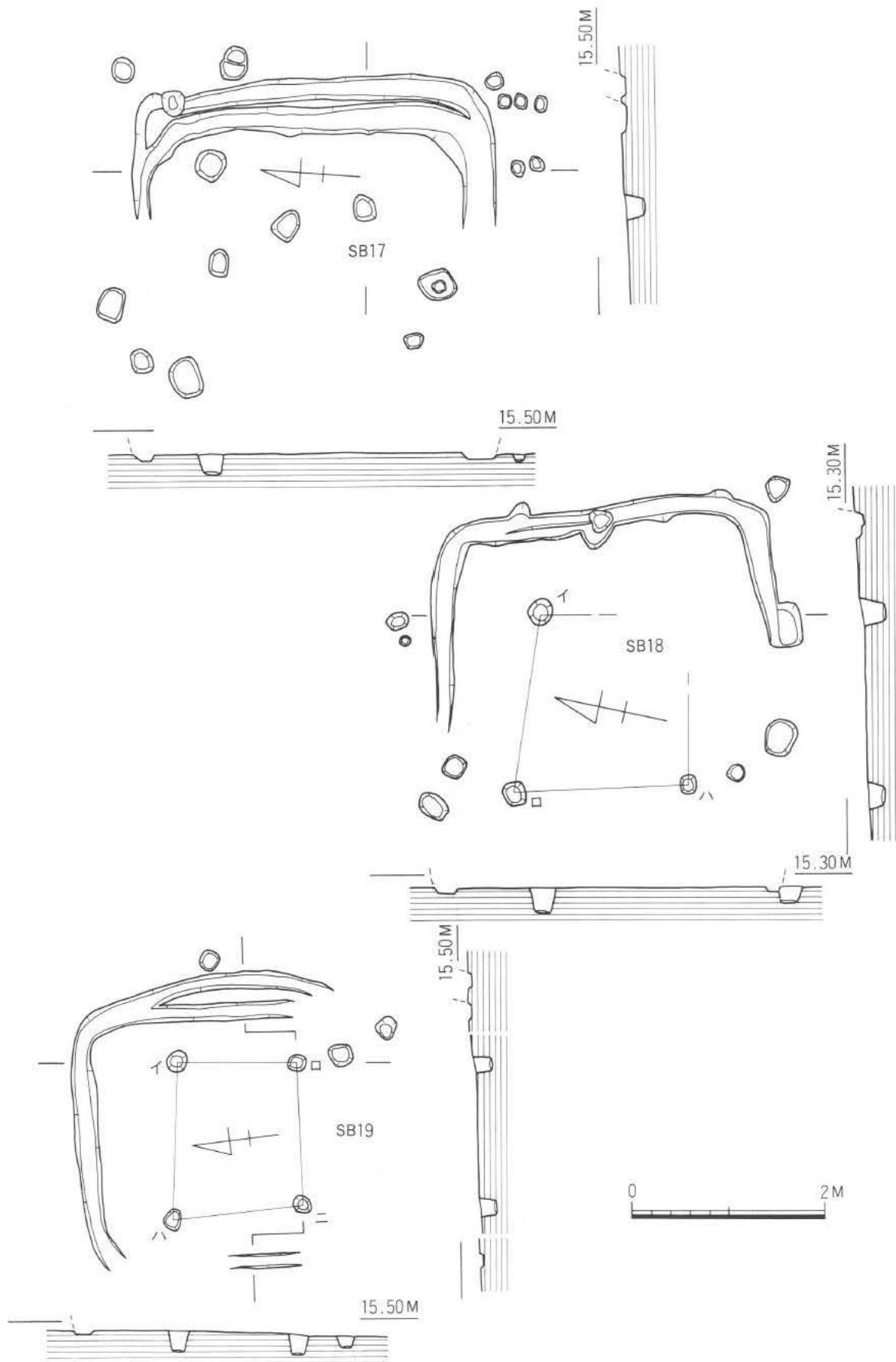


第47図 SB 16遺構実測図 (1/60)

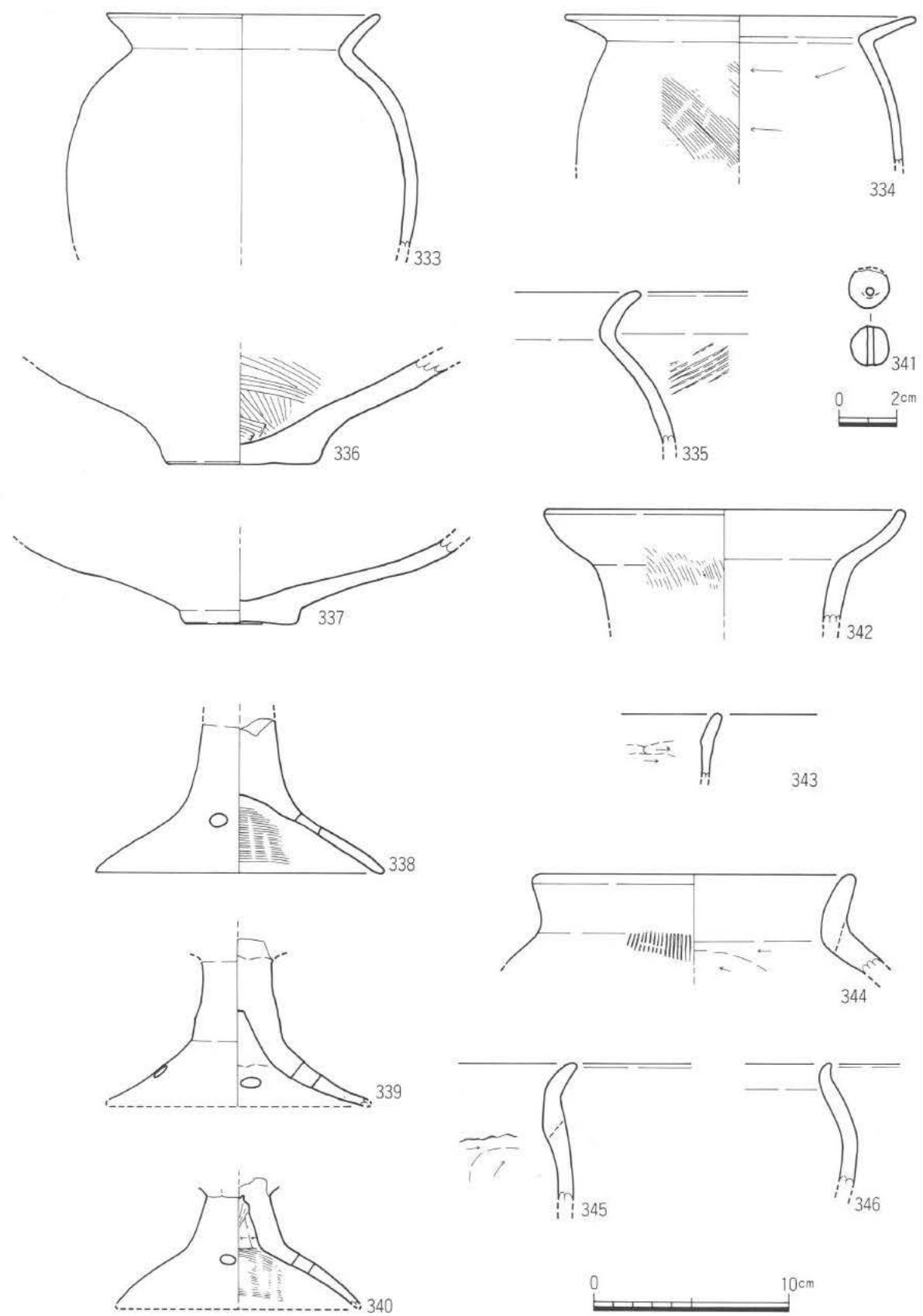
を測る。334は胴部に張りがなく、口縁部の屈曲が強い。胴部内面は丁寧なヘラ削り、外面はハケ目を施す。胎土はやや粗く2mm前後の砂粒を含み、色調は暗灰橙色を呈する。復元口径17.8cmを測る。335は口縁部片である。口縁部は丸みを持って外反する。内面はヘラ削り、外面にはハケ目かタタキか判然としない条痕が残る。風化が進んでおり色調は灰橙色を呈する。

336・337は壺の底部であろうか。いずれも平底である。336は内面に荒いハケ目、外面は丁寧なナデを施す。胎土は砂粒、赤褐色粒を含むが良好で、色調は灰橙色を呈し、復元底径7.8cmを測る。337は内面は丁寧なナデ、外面は風化が進んでいるが、ナデであろう。胎土は砂粒を含むが良好で、色調は黄橙色を呈し、復元底径6.2cmを測る。

338～340は高壺の脚部である。338は脚柱部は中実で、裾部は「ハ」字形に開き、端部で立脚する。また屈曲部の下に穿孔が3ヶ所施される。裾部内面はハケ目を施し、外面はナ



第48図 S B17～19遺構実測図 (1/60)



第49図 S B 16~18出土遺物実測図 (1/3 · 1/2)

デで仕上げている。色調は灰橙色を呈し、復元脚底径14.8cmを測る。339は脚柱部の中程まで中実で、裾部は外反気味に「ハ」字形に開き、端部で立脚する。屈曲部の下に穿孔が4ヶ所施され、調整はナデで仕上げている。胎土は精良で、色調は灰橙色を呈し、復元脚底径13.6cm、基部径3.5cmを測る。340は脚柱部は中空で裾部は内弯気味に「ハ」字形に開き、端部で立脚する。屈曲部の下に穿孔が1ヶ所残存するが全体数は不明である。調整は裾部内面はハケ目、脚柱部内面はヘラ削りを施し、外面はナデで仕上げている。胎土は精良で、色調は灰橙色を呈し、復元脚底径12.5cm、基部径3.2cmを測る。

341は土製の丸玉である。胎土は良好で色調は赤橙色を呈し、直径13.0mm、孔径2.0mmを測る。

342は鉢である。体部は張りがなく、口縁部は外側に屈曲したのち内弯する。風化が進んでいるが、外面にハケ目が残る。色調は淡灰橙色を呈し、復元口径18.2cmを測る。

S B17 a (古) · b (新) (図版13、第48図)

調査区の南西部に位置する。残存状況は不良で、東辺とその両角付近が残るのみであるが、東辺を30cmほど拡張している。主柱穴は確認できなかった。

出土遺物 (第49図) 図化できる遺物はほとんどないが、東周壁溝 (343) から若干出土している。

土師器 (343) 鉢の口縁部小片である。口縁部は僅かに外傾して立ち上がる。色調は灰橙色を呈する。

S B18 (図版14、第48図)

調査区の南西部に位置する。残存状況は不良で、周壁溝の存在から住居跡であると確認できた。東辺とその両角付近が残るのみである。

主柱穴は3本確認しているが、本来4本柱であろう。

出土遺物 (第49図) 遺物はすべて周壁溝から出土している。

土師器 (344~346) 344は甕である。口縁部は外傾して短く立ち上がる。色調は灰橙色を呈し、復元口径16.0cmを測る。

345・346は鉢である。345は緩やかに外反する口縁部を持つ。色調は2次焼成を受けており、暗灰橙色を呈する。346は2次焼成を受けており、色調は暗桃色を呈する。

S B19 a (古) · b (新) (第48図)

調査区の南西部に位置する。残存状況は不良で、周壁溝の存在から住居跡であると確認

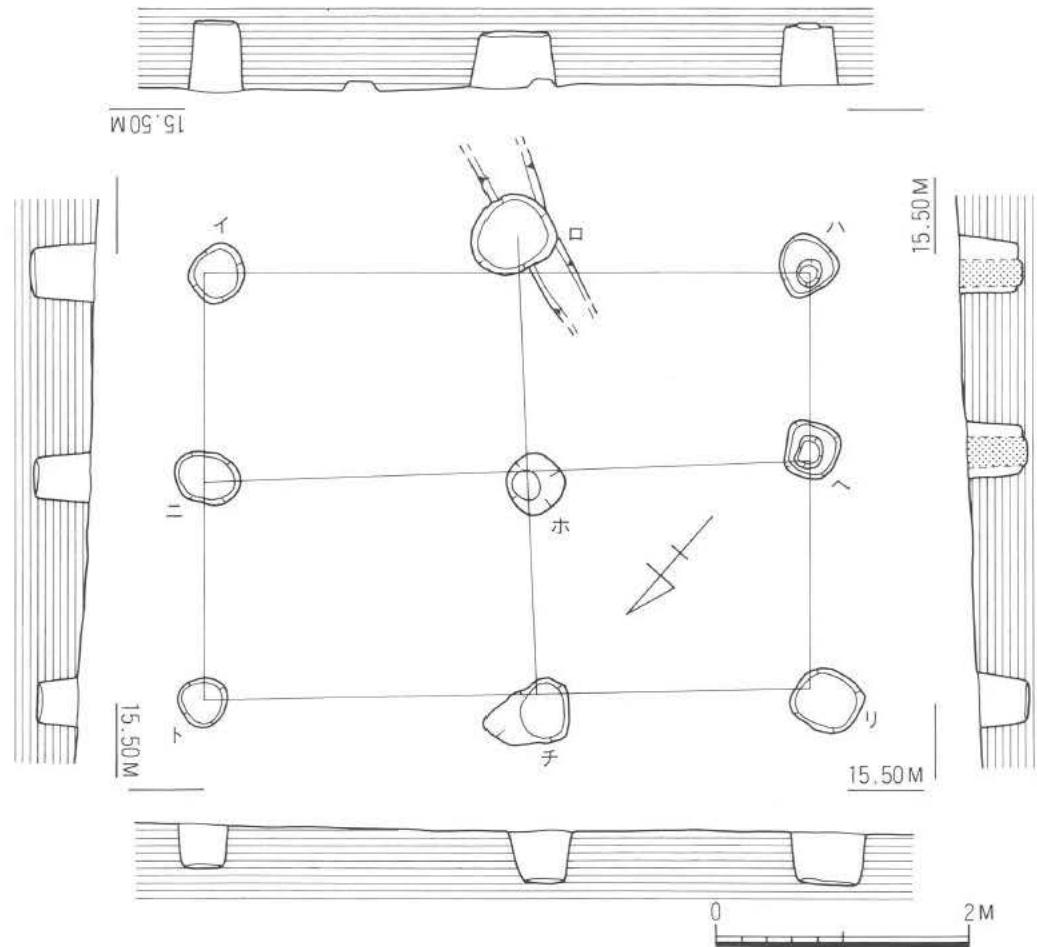
できた。北辺、東辺および西辺の一部が残り、東辺を30cmほど弧状に拡張している。竪については不明で、主柱穴は4本である。出土遺物はない。

3. 掘立柱建物跡

調査区の北部で検出した3棟の掘立柱建物は総柱の高床建物である。柱筋が通っており、同時期存続の倉庫群であろうか。

S B 20 (図版14、第50図)

桁行2間 (a) × 梁間2間の総柱建物である。主軸をN-44°-Wに取る。S B21・22との関連から、東西どちらかに桁行が延びると考え精査に勤めたが検出できなかつた。柱口は妻側柱筋から僅かにはなれており棟持柱と考えられることから、西に延びる可能性が高

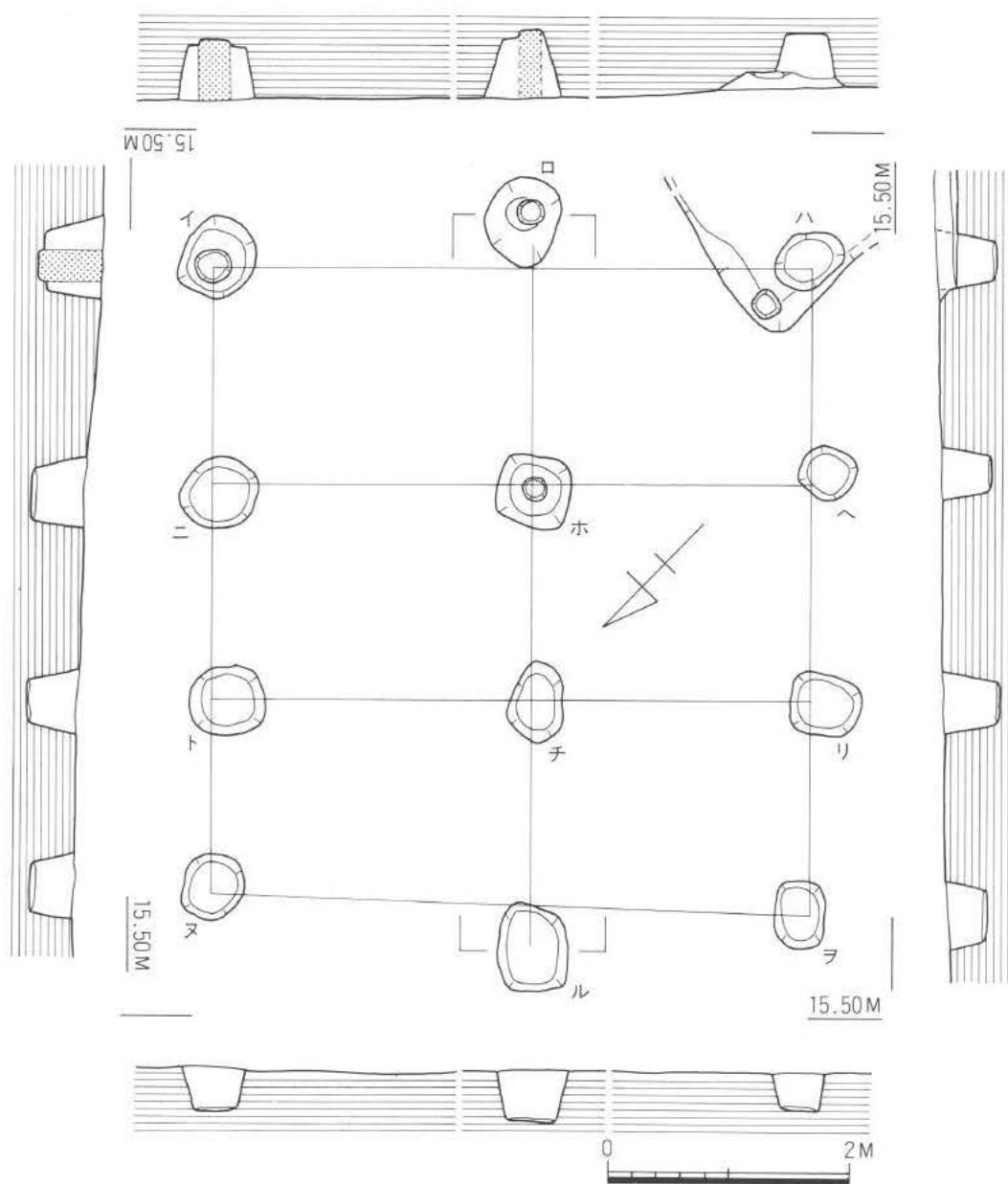


第50図 S B 20遺構実測図 (1/60)

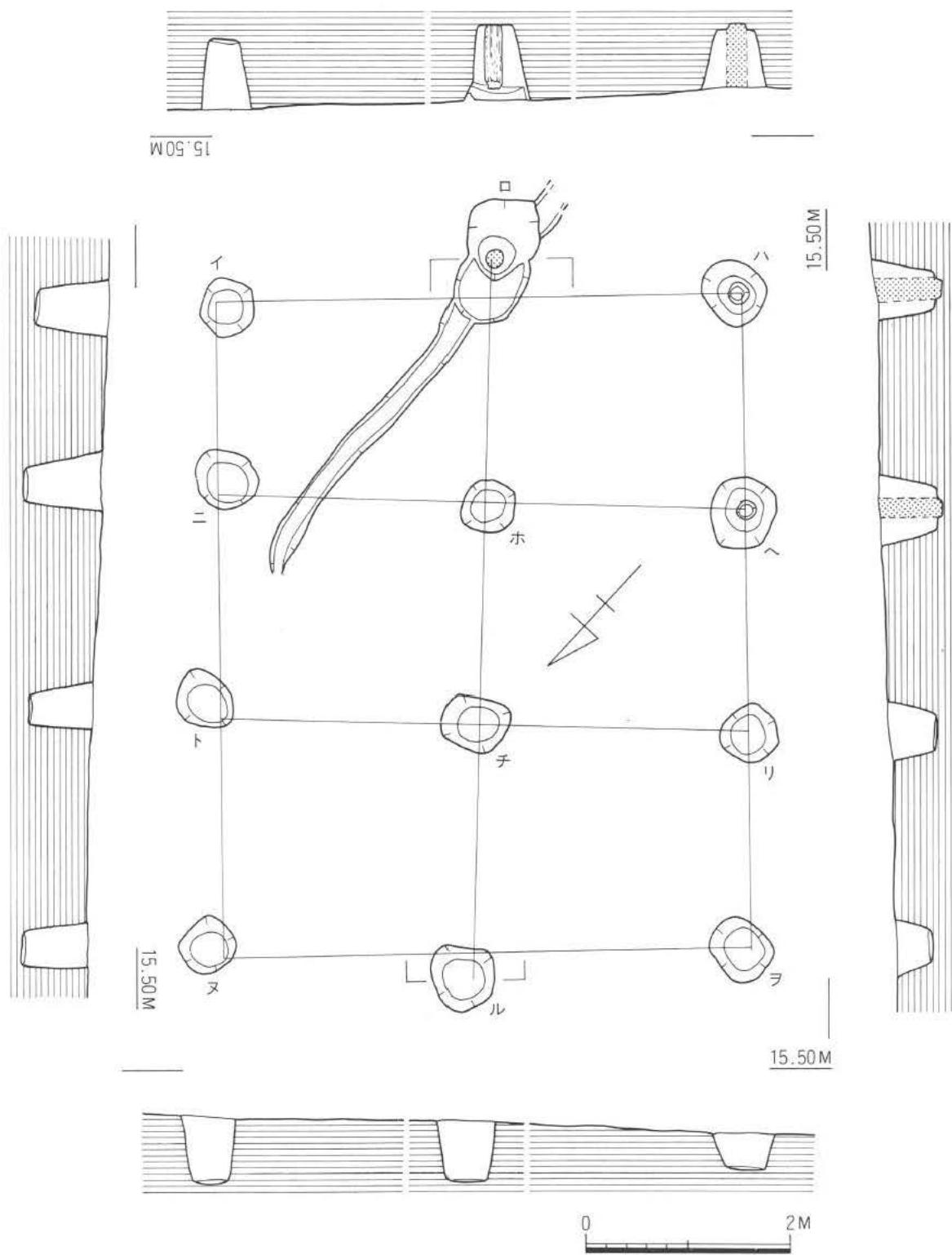
い。規模は桁行3.4 (a) m × 梁間4.85m、面積16.4 (a) m²である。

S B21 (図版15、第51図)

柱ハをSK2に切られている3間×2間の総柱建物である。桁行方位をN-44°-Wに取る。柱口、ルは妻側柱筋から僅かにはなれており、棟持柱と考えている。規模は桁行5.4m×梁間5.0m、面積26.5m²である。



第51図 SB21遺構実測図 (1/60)



第52図 S B 22遺構実測図 (1/60)

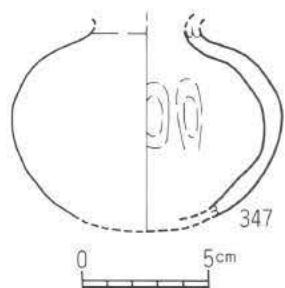
S B 22 (図版15、第52図)

S B 7 の排水溝を柱口によって切っている 3間×2間の総柱建物である。桁行方位を N-44°-W に取る。柱口、ルは妻側柱筋から僅かにはなれており、棟持柱と考えている。

規模は桁行 6.45m × 梁間 5.1m、面積 32.1m² である。

4. その他の遺構・遺物

I) SK 8・SB 14接合遺物 (第53図)



第53図 SK 8・SB 14
接合遺物実測図 (1/3)

SK 8 と SB 14 から出土した須恵器片が整理の段階で接合しているためここで紹介する。

須恵器 (347) 風である。底部と口縁部を欠く 4 分の 1 程の破片である。頸部は締まっており、胴部は丸みが強く、最大径を上半に持つ。内面には指頭痕が残り、荒くナデている。外面は丁寧なナデで仕上げてあり、無文である。胎土は緻密で焼成も良好である。色調は暗青灰色、断面は小豆色を呈し、復元胴部最大径は 10.6cm を測る。

II) 柱穴出土遺物

SP 20

出土遺物 (第54図)

石器 (348) 有茎磨製石鏃の茎部分であろう。暗赤紫色を呈する凝灰岩製である。茎はかなり短く研ぎ込まれ、断面は六角形を呈する。現存長は 18.3mm を測る。

SP 30

出土遺物 (第54図)

石器 (349) 黒曜石製の打製石鏃である。色調は透明感のある黒灰色を呈し、長さ 15.7mm、幅 15.4mm、厚さ 4.0mm、重量は 0.6g を測る。

SP 128

出土遺物 (第54図)

石器 (350) 緑色片岩の大型蛤刃石斧である。基部付近には敲打痕が残る。細身で長さ15.7cm、幅4.8cm、厚さ3.1cm、重量は412gを測る。

S P 157

出土遺物 (第54図)

土師器 (351) ほぼ完形の丸底壺である。胴部は偏球形状をなし、口縁部は直状に外傾する。内面はヘラ削り、外面は風化が進んでいるがナデで仕上げている。色調は赤橙色を呈し、口径9.2cm、器高13.5cm、胴部最大径14.4cmを測る。

S P 189

出土遺物 (第54図)

土師器 (352) 梱である。底部は貼り付けで断面三角形状をなし、体部は緩やかに内弯しながら立ち上がる。口縁部は僅かに肥厚して端部を丸く収める。外底部には静止糸切り痕を残している。胎土は精良で焼成も良好である。色調は灰橙色を呈し、復元口径16.0cm、器高5.5cmを測る。

S P 225

出土遺物 (第54図)

弥生土器 (353) 刻目凸帯を付す胴部小片である。胎土は砂粒を多く含み、色調は暗赤茶色を呈する。

S P 232

出土遺物 (第54図)

弥生土器 (354・355) 接点が失われているが同一個体である。底部は肉厚で若干上げ底である。胴部はあまり張らずに立ち上がり、口縁部は外傾して端部を肥厚させる。風化が進んでおり、調整は口縁部のヨコナデ以外は不明瞭である。色調は灰橙色を呈し、復元口径24.6cm、底径6.2cmを測る。

S P 289

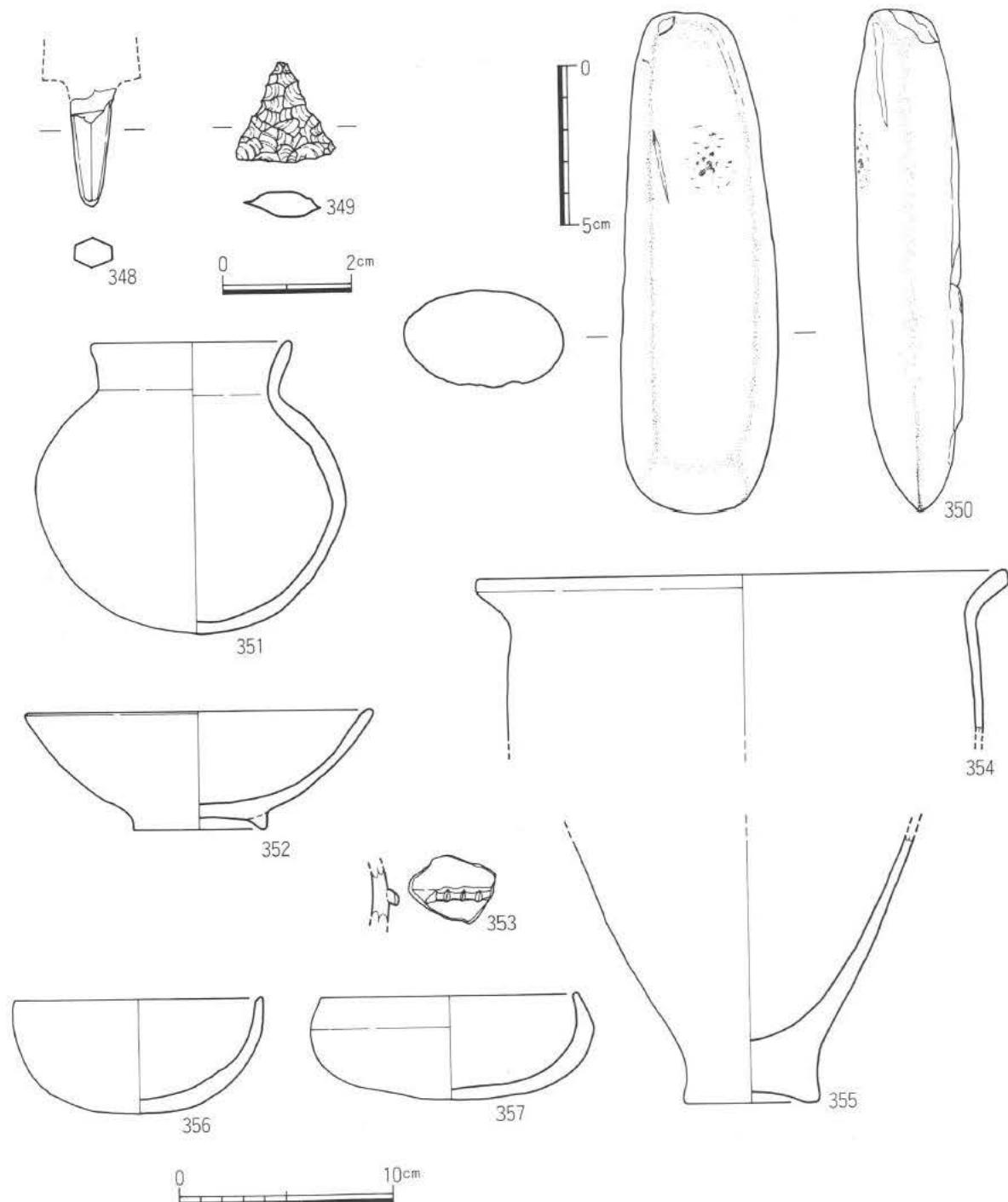
出土遺物 (第54図)

土師器 (356) ほぼ完形の壺である。胎土は細かな砂粒、赤褐色粒を含むが良好で、色調は灰褐色を呈し、口径11.6cm、器高5.3cmを測る。

S P 293

出土遺物 (第54図)

土師器 (357) ほぼ完形の壺である。体部は偏平で、口縁部は内傾して屈曲する。胎土は細かな砂粒を含むが良好で、色調は灰褐色を呈し、口径12.0cm、器高4.9cmを測る。



第54図 S P 出土遺物実測図 (1/1 · 1/2 · 1/3)

III) 表面採集・包含層・各遺構混入遺物 (第55図)

打製石鐵 (358～362) 358はS B 3 bの北周壁溝、359はS B 8 bの排水溝、360・361はS B 15、362はS K 27から出土している。

358は黒曜石製で長さ25.0mm、現存幅12.0mm、厚さ3.7mm、重量0.8gを測る。359は黒曜石製で長さ15.7mm、現存幅11.2mm、厚さ2.7mm、重量0.4gを測る。360は黒曜石製で極めて丁寧な作りである。長さ21.5mm、現存幅12.0mm、厚さ3.3mm、重量0.5gを測る。361は黒曜石製で長さ16.0mm、現存幅14.0mm、厚さ2.9mm、重量0.5gを測る。362は安山岩製で現存長26.0mm、幅18.0mm、厚さ3.9mm、重量1.7gを測る。

磨製石斧 (363・364) 363はS K 21、364はS K 33から出土している。

363は破損が著しいが凝灰岩製の石斧である。現状で長さ6.1cm、幅4.2cm、重量36.8gを測る。364は泥質片岩製の柱状片刃石斧である。前主面および後主面に鋭利な条痕が残るが、仔細に観察すると主面を研磨する過程で、片理の深い部分が研ぎ残されて残存したものである。長さ10.0cm、主面厚2.54cm、側面厚1.65cm、重量67.6gを測る。

弥生土器 (365～369) 365・367・368はS K 3周辺で表面採集、366は調査区南端の包含層、369はS B 13の排水溝から出土した。

365は壺の口縁部片である。胎土は1mm前後の砂粒、赤褐色粒を多く含み、色調は灰橙色を呈する。

366は甕の胴部片であろう。風化が進んでいるが刻目凸帯を付す。胎土は砂粒を含むが良好で、色調は赤茶褐色を呈する。367・368は刻目凸帯を付す甕の口縁部片である。風化が進んでいるが色調はいずれも暗茶褐色を呈する。

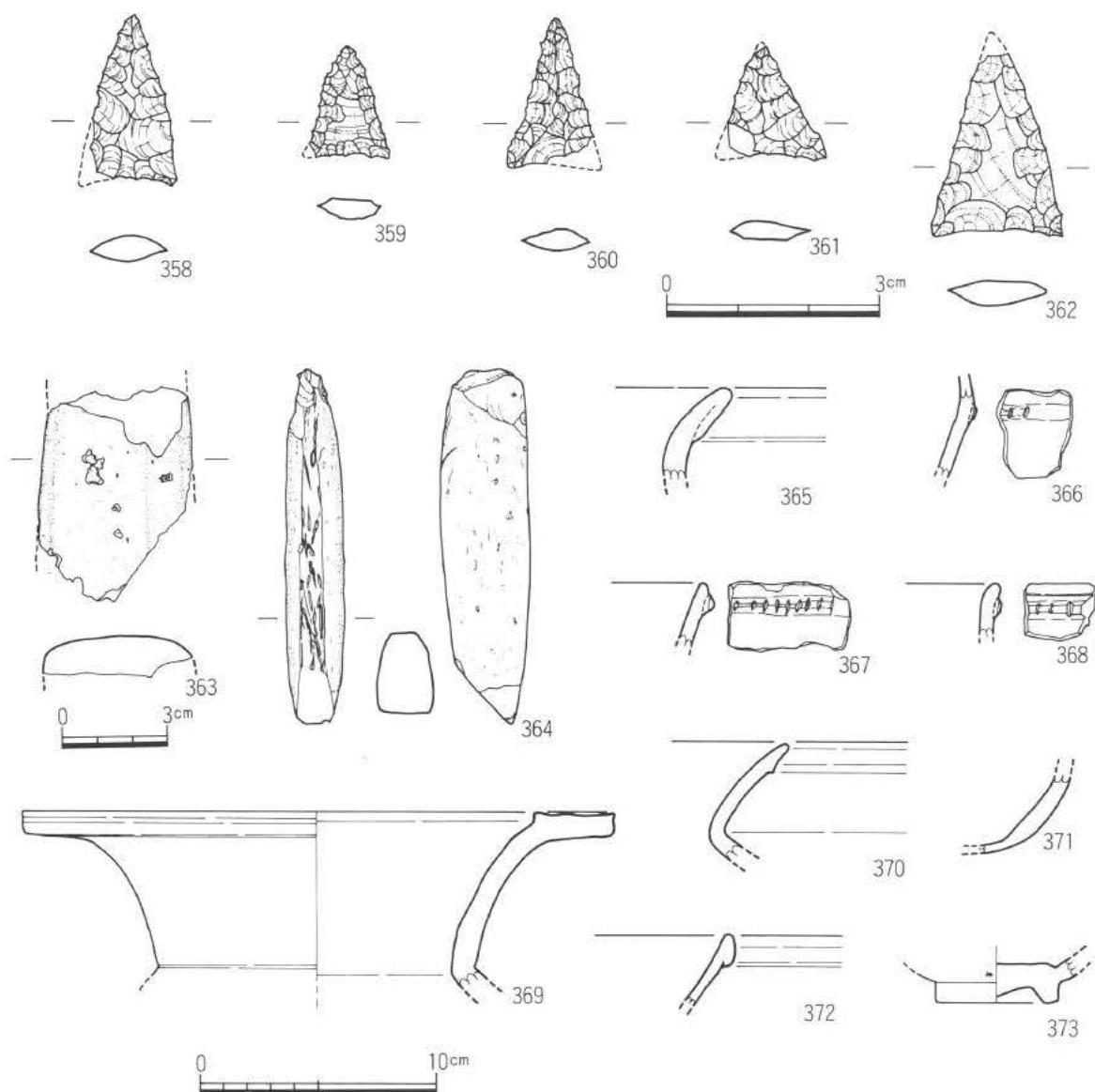
369は広口壺の口縁部である。いわゆる鋤先状口縁であるが、口縁部内側への突出は小さい。風化が進んでおり、色調は黄橙色を呈し、復元口径18.8cmを測る。

須恵器 (370・371) いずれもS B 1西側周辺 (S K 8付近) で表採している。同一個体の可能性が高い。

370は甕の口縁部片である。口頸部は無文だが稜を持ち、端部はやや角を持って丸く收める。胎土は砂粒を僅かに含むが精良で、断面は灰小豆色、色調は灰黒色を呈する。371は甕の底部片であろう。内面は荒いナデ、外面は丁寧なナデで平滑に仕上げている。胎土は砂粒を僅かに含むが精良で、断面は灰小豆色、色調は灰黒色を呈する。

白磁 (372) 表面採集である。玉縁の碗で口縁部片である。胎土は緻密で、釉調は白灰色を呈する。大宰府分類の白磁碗IV類である。

青磁 (373) 表面採集である。同安窯系青磁碗の底部である。高台は台形状に削り出しており、内底見込みと体部との境に段を持つ。また外面には櫛目文がごく僅かだが残存する。胎土は緻密で、釉調は透明感のある緑灰色を呈し、底径5.2cmを測る。同安窯系青磁碗I-1類であろう。



第55図 表面採集・包含層・各遺構混入遺物実測図 (1/1・1/2・1/3)

第3章 まとめ

ここでは主な遺構・遺物について整理し、不十分ながらもまとめとしたい。

1. 弥生時代

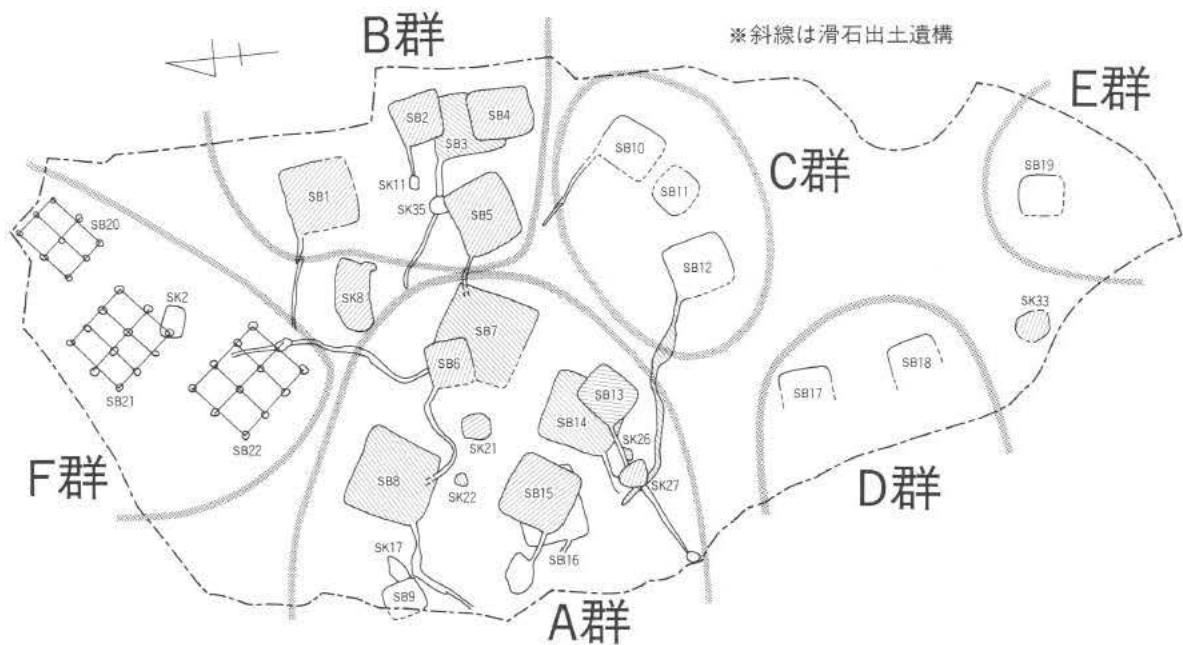
この時代の住居跡は検出されていないが、主に表採資料ではあるが前期後半頃の刻目凸帯を付す甕の小片が若干出土しており、おそらくこの時期が集落の造営開始期であろう。その後は、S B 13の排水溝に混入していた中期前半頃の広口壺（369）、後期後半のS K 18・19など断続的に遺物が出土している。石器は黒曜石の石鏃、チップなど93点、石斧3点があり、ほとんどは住居跡や土坑などの覆土に混じって出土している。このことから古墳時代の造成、整地によってすでに破壊されているか、あるいは現在住宅の密集している丘陵高位に居住地が埋もれている可能性を考えている。

2. 古墳時代

I) 住居のあり方について

住居のあり方を考える上で、同時期存続グループの認定とその変遷が最も重要な問題である。言うまでもなく出土遺物は住居の廃絶の仕方と埋没過程によってかなり時期差があり、須恵器などの比較的編年体系の完成している遺物についても、単純に型式変化に住居の変遷をあてはめることは危険である。確実に住居に伴う遺物と、遺構の切り合から相対的先後関係を確認していくことが基本であるが、有効な遺物のない住居や単独に存在する住居については如何ともし難い場合が多い。本遺跡でもその例に漏れるものではないが、排水溝のあり方や別遺構との遺物の接合関係、さらに特徴的な滑石の出土状況などを考慮して浅学ながらも検討を進めて行きたい。

なお周壁溝は必ずしも住居排水の目的で掘込まれたのではないという見解があるが、本遺跡の場合は住居の角から標高の低位に向かつて延びる屋外溝（便宜的に排水溝と表現している）を持ち、S B 12の17mを最長例としてかなり発達している。排水施設と理解しているが、このことは拡張（建て替え）住居の実態を含めて宗像とその周辺地域の住居構造の特質として考察を進めて行くべきであろう。本稿ではここまで言及できなかつたが熟慮すべき問題である。



第56図 群構成および滑石出土遺構配置図

i) 群構成 (第56図)

分布状況は調査区中央部に最も集中し、南部は削平が著しいため散漫な在り方を示している。占地や主軸方位などから比較的容易に6つの群に分けることが可能である。

A群 調査区の中央部東側に占地しており、SB6・7・8・9・13・14・15・16の8棟からなる。

B群 調査区の中央部西側に占地し、SB1・2・3・4・5の5棟からなる。

C群 調査区の中央部南側に占地し、SB10・11・12の3棟からなる。

D群 調査区の南西部に占地し、SB17・18の2棟からなる。

E群 調査区の南端に占地し、SB19からなる。

F群 調査区の北部に占地し、柱筋を通して整然と並ぶ掘立柱建物群である。SB20・21・22の3棟からなる。

以上の群構成を踏まえて考察を進めて行きたい。

ii) A群のあり方

A群は明らかに時期の異なるSB6・13・16を除くと、方向や規模の類似する住居が明瞭になり、比較的理解しやすい。まずこれら3棟について見て行く。

SB16は床面遺物から布留古式併行と考えており、本遺跡で最も古い時期の住居跡であ

る。1棟のみで単独に存在し、同時期あるいは近接した時期のものはない。

S B6はS B7を切っており、周壁溝の一括遺物から陶邑編年M T 15頃、6世紀前半代であろう。S B13は有効な出土遺物が乏しいが、埋土の須恵器はM T 15頃であろう。

次に群の主体となるS B7・8・9・14・15、さらに滑石生産に関わる廃棄土坑であるS K8との共存関係を考えてみたい。まず排水溝のあり方からS B7・8・9について見て行く。

S B7の排水溝が北方向へ延び、先端付近でやや西に向きを変えている点に注目したい。他の住居の排水溝は標高の低位である西方向に延びるのが通例であるが、S B7の例はS B8の存在を考慮したと考えられる。さらにS B8の排水溝も一旦西へ延び、S B9南東角付近で屈曲して南西へと向きを変えており、S B9あるいはS K17を意識して屈曲したと考えられる。単なる土坑よりも住居を回避したと考えたいが、S B9に出土遺物はなく断定できない。

以上のことからS B7の排水溝がつくられた時にはS B8が存在し、S B8の排水溝がつくられた時にはS B9あるいはS K17の存在していたことが言えよう。存続期間や微妙な先後関係までは明らかにし得ないが、同時性を伺うことができる。なおS B7・8の覆土には滑石片を多く含み、S K8と関連するものだろう。

つぎに接合遺物と規格性からS B14・15、S K8について見て行く。

S K8とS B14の覆土から出土した甕(347)が接合している。口縁部および底部を欠くが、胴部は無文で頸部が締まっておりT K216期のものであろう。S K8の覆土から出土した甕(053)およびS B14下層土坑出土の壺蓋(320)は小片ではあるが、347とは明らかに型式差がある。混入の可能性が高いが、一片はS B14の埋没過程で混入し、またもう一片はS K8が廃棄土坑として機能していた時期に投棄されたと言える。

S K8とS B14の存続期間は明らかにし得ないが、320がS B14の築造期のものとするならば053とほぼ同型式であり、またいずれの遺構も覆土に滑石を多く含んでいることからS K8とS B14はある一時点での同時期存続を考えてよいだろう。

さらにS B14とS B15は平面配置に規格性が見られる。規模についてはS B14の調査に失敗しているため問題が残るが、S B14aを当初のものとするとS B15に極めて近い値となる。また両住居の間隔はS B14aの段階で2.1mを測り、上部構造を考えても干渉せずにつくることは可能だろう。しかしながらS B14cの段階では1.4mとかなり近接し、西壁には竈跡と考えられる焼土塊がある。竈を隣接住居に向かつて構築することは煙道の問題やそれに関わる火災の危険性から共存は考えにくい。S B15の存続期間は有効な出土遺物がないため判然としないが、S B14と同一時期に存続の後、S B14が拡張されて行く段階で廃絶された可能性を考えておきたい。

また先に述べた S B7・8との同時期存続については、周壁溝出土遺物が住居に伴うとすれば S B14と同一型式に納まるものであり、方位を同じくすることなどからもその可能性は高いと考えている。

以上の事柄をまとめると、A群の切り合わない S B7・8・14・15の4棟は微妙な先後関係は明らかにし得ないものの、ほぼ同時期存続の可能性が高い単位集団と捉えて大過ないだろう。特に埋土に滑石片を多く含んでおり、SK8との関連性が強い。時期的には T K23～47型式、5世紀後半～末に収まるものと考えられる。

iii) B群のあり方

S B2・3・4は切り合っているため S B3→2・4という先後関係は明確である。時期については須恵器が出土していないため判然としないが、S B3は5世紀後半代、S B2・4は6世紀前半代にかかるようだ。

S B1は単独で存在し、有効な出土遺物が少ないため時期不詳である。S B5は南周壁溝出土の長胴で平底気味の土師器甕 (248) を見ると6世紀前半以降と考えられる。

IV) C・D・E群のあり方

C・D・E群の住居はそれぞ単独に存在し、有効な出土遺物が乏しいため時期不詳である。S B11は竈跡と考えられる火床が残っているが、一般住居とは異なる特殊な用途の超小型住居であろう。

V) F群のあり方 (掘立柱建物)

S B20・21・22は柱筋が整然と通っており、同時期存続は疑いないが問題はその時期である。切合い関係から S B7の排水溝より新しく、SK2より古いことを確認しているが、SK2の出土遺物は微量で、混入の可能性が高く、瓶片 (008) が土坑の埋没時期を示すものとするならば、S B7とあまり時期差が認められない。また S B7の排水溝の埋没時期が必ずしも住居と同時性を持つものとは言えず、むしろ早い時期に埋没してしまう可能性が高いことなどを考慮に入れると、S B7などとの同時期存続の可能性も残る。時期決定はかなり困難であるがここでは古墳時代後期として捉えておきたい。

II) 滑石製品の生産について

i) 滑石製品出土のあり方 (第56図)

本遺跡は廃棄土坑である SK8をはじめ多くの住居跡から、多量の滑石製白玉や有孔円板の未製品、原石などが出土し、完成品の量は極少ないことから滑石製品の生産に携わっていた人々の集落と言える。滑石を出土した遺構を平面的に見てみると A群および B群に集中しており、滑石製品の生産がこの両群で行われていたことが看取されよう。また滑石製

品の生産開始は集落の最盛期でもある5世紀後半～末葉で、6世紀前半頃に終焉するようである。なおC群のSB12からも出土しているが、これはすべて排水溝からの出土であり、排水溝の埋没過程での混入の可能性が高い。

ii) 滑石製臼玉の製作工程

滑石製臼玉の製作工程についてはすでに幾多の研究(註1～3)によって復元されており、本遺跡例もそれらを傍証するものである。以下に概略を示す。

原田大六氏は『沖ノ島』のなかですでに滑石製臼玉の大量生産の過程を想定しており、最も重要な碁盤目に筋目を入れて折り割るという工程を明らかにしている。すなわち、「1. 平たく剝いた滑石板の両面を磨き→2. 平板の表裏面を碁盤目に刻み→3. 碁盤目の中央に各一孔を穿ち→4. これを板チョコを折るようにして折り→5. 角を落として丸めたもの」。

中間研志氏は『牛ガ熊遺跡』のなかで「1. 原石採取→2. 打割→3. 板状品整形研磨→4. 格子目状の筋切り→5. 方形チップの折り取り→6. 穿孔→7. 周縁整形研磨」という工程を復元している。未穿孔の方形チップがあることから『沖ノ島』例とは逆に、折り取りの後に穿孔を行なうという行程を想定している。

西田大輔氏は『夜臼・三代地区遺跡群 第5分冊』のなかで「7. 周縁整形研磨」の最終段階に「厚さ調整の研磨、もしくは剥離させる」という工程を追加し、さらにチップの折り取り前に穿孔しているとする資料の存在、および未穿孔の方形チップが出土していないことなどから方形チップの折り取り前に穿孔を行っていると判断し、A(5. 方形チップの折り取り→6. 穿孔)・B(5. 穿孔→6. 方形チップの折り取り)の2工程に分類している。

以上の推定復元に本遺跡例をあてはめると、未穿孔の方形チップが13点出土していることなどから方形チップの折り取りの後に穿孔を行っているよう、いわゆる牛ガ熊タイプ、西田氏の分類ではA工程に準じていると考えている。ただし表面未調整で穿孔のみ行っている例(072)があるが、1点のみでありここでは例外的に扱っておく。また板状品が比較的多く、特にSK8出土品(062)などは、まさに格子目状の筋切りを入れる前段階の製品と考えられ、無駄のない整った方形を呈していたことがわかる。

iii) 滑石製品製作遺跡の類例

現在のところ滑石製品の製作跡として捉えられる遺跡は(註4)、小郡市の西島遺跡、粕屋郡志免町の松ヶ上遺跡、粕屋郡須恵町の牛ガ熊遺跡、粕屋郡新宮町の夜臼・三代地区遺跡群、粕屋郡粕屋町の古大間池遺跡、太宰府市下水城の裏田遺跡、太宰府市高雄の吉ヶ浦遺跡があり、滑石の産出地である三郡山地の周辺部に集中している。このほかに現在整理中

であるが宗像郡津屋崎町の勝浦練原遺跡から、滑石製の紡錘車になると思われる未製品、中央に穿孔を施された一辺1.8cm程の方形の板状品、臼玉、勾玉などが柱穴、溝状遺構から出土している(註5)。製作跡の可能性があり注目されよう。

IV) 沖ノ島との関連

沖ノ島の祭祀を陰で支えた多彩な滑石製品の生産地については未だ不明である。無論、滑石産出地である三郡山地周辺に存在する可能性が高いが、宗像地域においても原石、あるいは半製品を持ち込んでの製作も考えられる。今回の調査結果のみで沖ノ島の滑石祭祀に言及することは時期尚早であろうが、少なくとも祭祀に深く関わるこの宗像においても、5世紀後半～末葉には滑石製品製作の基盤が存在していたと言えよう。

(註1) 原田大六1958「第七節 滑石製品」『沖ノ島』宗像神社沖津宮祭祀遺跡 宗像神社復興期成会

(註2) 中間研志1993『牛ガ熊遺跡』須恵町文化財調査報告書第6集

(註3) 西田大輔1995『夜臼・三代地区遺跡群 第5分冊』新宮町埋蔵文化財発掘調査報告書第10集

(註4) 前掲(註3) および、赤崎敏男1982「九州の石製模造品」『森貞次郎古希記念古文化論集下巻』

(註5) 津屋崎町教育委員会 池ノ上宏・安武千里両氏のご教示による。

あとがき

本遺跡で出土した滑石は原石、剥片を含め総重量約3kgを測る。臼玉、方形チップなどの極小の滑石製品は調査後の土壤サンプル水洗によって確認されており、滑石の出土が見られた遺構はすべての覆土を採取、水洗するなど精査に努めれば更なる成果が上がったであろう。整理の段階で遺漏の多い調査であったことを再認識しており、反省点を今後に活かしてゆくことが責務である。

また近年、圃場整備事業に伴い中、小規模の集落跡の調査例が増加しており、なかでも竪穴住居の構造については宗像周辺地域の特色が浮かびつつある。その一つに屋内、外に高い割合で排水溝を付設していることがいわれているが、それが立地条件によるものか、上部構造に起因するものか今だ明らかではない。資料の充実が進めばいずれ具体化していく必要があろう。

表

表1 竪穴住居跡一覧表

表2 SK 8 出土滑石一覧表

表3 その他の遺構出土滑石一覧表

竪穴住居跡一覧表

表1

遺構番号	規模(長軸×短軸) (m)	主柱穴	周壁溝	排水溝(m)	カマド	床面積(m ²)	方位
S B 1 a	4.35×4.20	4	○	(7.5)		(12.96)	N-12°-W
1 b	5.20×5.05	3(4)	○	2.0		(20.0)	N-12°-W
S B 2	3.40×3.25		○	2.5	北	7.24	N-15°-W
S B 3 a	4.2×3.6	4	○	10.0	(北)	10.76	N-9°-W
3 b	5.10×4.40	4	○	10.0	(北)	17.08	N-9°-W
S B 4	4.60×3.80	4	○			11.84	N-10°-W
S B 5	5.27×4.50	4	○	2.5		16.0	N-20°-W
S B 6	(3.40)×3.30		○	8.0		(6.72)	N-10°-W
S B 7 a	4.80×4.30	3(4)	○	16.0		13.76	N-15°-E
7 b	6.37×3.60 a	4	○	16.0			N-26°-E
S B 8 a	5.75×5.65	4	○	9.0		25.64	N-22°-E
8 b	5.95×5.90	4	○	9.0		28.32	N-22°-E
S B 9	2.87×(2.45)		○			(4.0)	N-18°-W
S B 10	(4.40)×3.65	4	○	5.5 a (6.5)		(11.12)	N-41°-E
S B 11	3.15×2.6 a		○				(N-36°-W)
S B 12	4.52×4.20	4	○	17.0	西・南	(13.20)	N-17°-W
S B 13	3.85×3.35	4	○	11.5		9.28	N-41°-W
S B 14	5.60×5.2 a	4	○	3.0	(西)		N-24°-E
S B 15	4.85×4.85	4		2.5	北・西	21.68	N-32°-E
S B 16	5.42×4.45	2		1.0		22.56	N-10°-W
S B 17 a	3.85× a		○				(N-4°-W)
17 b	3.85× a		○				(N-4°-W)
S B 18	3.65× a	3(4)	○				N-13°-W
S B 19 a	2.75× a	4	○				N-7°-E
19 b	3.10× a	4	○				N-7°-E

SK 8 出土滑石一覧表

表2

(1)

遺構番号	種類	大きさ(タテ×ヨコ)×厚(㎜)	孔径(㎜)	重量(g)	登録番号
054	原石	87.0×40.0×15.3		147.0	00057
055	"	80.0×55.0×12.0		62.9	00059
056	"	75.0×30.0×13.4		36.1	00060
057	"	80.0×40.0×14.0		41.4	00058
058	"	63.0×45.0×11.2		29.1	00061
062	板状品	39.1a×46.7a×4.4		12.1	00056
063	"	22.4×38.8×3.7		4.15	00072
064	"	28.1×49.2×4.1		8.0	00073
065	"	14.0×18.0×3.1		1.0	00065
066	"	20.0×35.0×3.2		3.15	00055
067	"	22.0×22.0×4.3		2.5	00063
068	"	10.0×39.0×4.0		1.9	00064
069	筋切り痕のみ	9.0×21.2×2.95		0.7	00070
070	"	10.0×17.7×3.35		0.7	00071
071	"	13.6×20.75×3.4		0.9	00074
072	穿孔のみ	22.0×13.0×5.0	1.0	1.7	00062
073	方形チップ	9.2×13.2×1.7		0.9	00076
074	"	8.05×5.0×2.55		0.2	00067
075	"	10.08×6.65×3.55		0.4	00068
076	"	7.1×6.65×2.55		0.2	00069
077	"	6.2×6.15×3.25		0.3	00077
078	"	6.1×6.3×3.0		0.2	00078
079	"	6.0×5.8×2.4		0.15	00079
080	"	4.1a×6.8×2.95		0.1	00080
081	"	4.5a×5.0×2.15		0.1	00081
082	"	5.0a×4.8×2.4		0.1	00082
083	"	4.0a×6.0×1.9		0.1	00083
084	"	4.4a×6.3×2.9		0.2	00084
085	"	4.1×6.65×2.9		0.12	00085
086	"	6.0×6.4×2.7	1.7	0.12	00087
087	"	6.5×6.2×1.7	1.1	0.1	00096
088	"	4.45a×4.85×1.2	1.0	0.1未満	00134
089	"	3.8a×5.55×1.5	0.95	0.1未満	00114
090	"	4.5a×5.6×1.5	1.0	0.1未満	00128
091	"	3.4a×4.7×2.2	1.15	0.1	00101
092	"	5.1a×5.5×2.55	1.15	0.1	00125
093	"	5.75×5.5×1.9	0.95	0.1	00090
094	"	4.35a×5.3×1.7	1.5	0.1未満	00091
095	"	5.55×5.2×2.15	1.0	0.1	00088
096	"	3.4a×5.1×1.65	1.2	0.1未満	00118

SK 8 出土滑石一覧表

表2

(2)

遺物番号	種類	大きさ(タテ×ヨコ)×厚(mm)	孔径(mm)	重量(g)	登録番号
097	方形チップ	4.6×3.4a×2.0	1.0	0.1未満	00108
098	"	6.45×4.6a×2.4	1.3	0.1	00086
099	"	5.1×3.8a×1.2	0.9	0.1未満	00105
100	"	6.05×6.45×4.05	0.95	0.11	00092
101	"	6.0×6.0×1.6	0.95	0.1	00115
102	"	5.8×6.0×2.85	1.2・1.4	0.11	00089
103	"	6.6×4.9a×2.25		0.1	00126
104	"	4.95×6.2×2.8	1.1	0.1	00103
105	"	5.9×6.65×1.55	0.9	0.1	00093
106	"	5.15a×7.0×1.6	1.05	0.1未満	00097
107	"	5.25a×6.25×1.5	1.45	0.1	00100
108	"	5.8a×6.55×1.9	1.4	0.1	00095
109	"	6.45×6.1a×1.1	0.9	0.1	00110
110	"	5.6a×7.0×2.0		0.1未満	00123
111	"	4.8a×6.0×1.65	1.0	0.1未満	00098
112	"	3.0a×5.6×2.4	1.3	0.1	00102
113	"	5.4a×4.95a×1.95		0.1未満	00132
114	"	6.45×4.2a×1.7		0.1未満	00129
115	"	7.0×4.05a×1.45		0.1未満	00131
116	"	5.65×3.85a×2.1	1.2	0.1未満	00094
117	"	5.1a×6.75×1.75	0.95	0.1未満	00107
118	"	7.35×5.0a×2.8	0.9	0.11	00104
119	"	5.25×6.65×1.4	2.2	0.1	00116
120	"	6.0a×4.9×2.25	1.0	0.1未満	00124
121	"	7.45×5.2a×1.6	0.9	0.1	00113
122	"	7.15×5.15a×2.25	1.2	0.1	00133
123	"	3.85a×5.4×1.3	1.4	0.1未満	00106
124	"	6.9×3.7a×2.9	1.75	0.11	00111
125	"	4.2a×5.8×1.7	1.4	0.1未満	00099
126	"	3.95a×5.2×1.3	1.2	0.1未満	00117
127	"	4.0a×4.6×1.0	1.0	0.1未満	00119
128	"	4.05a×6.55×2.0	1.3	0.1未満	00121
129	"	6.2×5.3a×0.95a		0.1未満	00130
130	"	3.7a×6.65×1.45	1.0	0.1未満	00112
131	"	2.85a×5.0×2.2	1.45	0.1未満	00122
132	"	3.3a×4.65×1.3	1.0	0.1未満	00120
133	"	3.5a×5.25×1.0a	0.9	0.1未満	00127
134	"	3.8a×5.9×1.0		0.1未満	00152
135	"	4.2a×6.3×1.2	1.0	0.1未満	00154
136	"	3.95a×5.95×1.0	1.0	0.1未満	00148

SK 8 出土滑石一覧表

表2

(3)

遺物番号	種類	大きさ(タテ×ヨコ)×厚(mm)	孔径(mm)	重量(g)	登録番号
137	方形チップ	4.3a × 7.1 × 1.45	1.05	0.1未満	00155
138	"	3.5a × 5.35 × 1.3	1.0	0.1未満	00109
139	"	3.2a × 4.4 × 0.45	1.2	0.1未満	00150
140	"	5.1 × 6.9 × 1.2	1.1	0.1未満	00144
141	"	6.3 × 4.4a × 2.0	1.1	0.1未満	00142
142	"	5.75 × 6.2 × 1.95	1.1	0.1	00137
143	"	5.9 × 6.2 × 1.5	1.45	0.1	00140
144	"	5.4 × 5.7 × 1.45	1.1	0.1未満	00139
145	"	5.55 × 5.8 × 2.1	1.2	0.1	00138
146	"	6.0 × 5.7 × 1.55	1.2	0.1	00136
147	"	6.9 × 6.9 × 3.0	0.9	0.3	00066
148	"	5.5 × 6.1 × 1.6	1.1	0.1	00135
149	"	4.5 × 5.1 × 1.4	1.0	0.1未満	00143
150	"	5.7 × 7.9 × 2.0	1.0	0.1	00141
151	"	4.9 × 5.4a × 1.7	1.0	0.1未満	00151
152	臼玉(未製品)	3.0a × 4.8 × 0.8		0.1未満	00149
153	"	2.95a × 6.6 × 1.2	1.2	0.1未満	00147
154	"	3.4a × 5.3 × 1.15	1.1	0.1未満	00156
155	"	3.6a × 6.45 × 1.2	1.1	0.1未満	00145
156	"	4.2a × 4.55a × 1.3		0.1未満	00153
157	臼玉	直径3.85 × 厚1.6	1.2	0.1未満	00172
158	"	3.7a × 1.05	1.0	0.1未満	00173
159	"	4.1 × 2.0	1.25	0.1未満	00169
160	"	4.3 × 1.2	1.25	0.1未満	00171
161	"	4.15 × 1.95	1.1	0.1未満	00161
162	"	4.0 × 2.2	1.2	0.1未満	00158
163	"	4.3 × 0.95	1.1	0.1未満	00159
164	"	5.5 × 1.65	1.0	0.1未満	00163
165	"	5.5 × 1.3	1.4	0.1未満	00166
166	"	4.8 × 1.2	1.2	0.1未満	00164
167	"	5.3 × 1.3	1.1	0.1未満	00165
168	"	4.8 × 1.4	1.1	0.1未満	00157
169	"	4.9 × 1.8	1.15	0.1未満	00162
170	"	5.25 × 1.0	1.3	0.1未満	00167
171	"	5.55 × 1.15	1.25	0.1未満	00168
172	"	6.75 × 2.6	1.45	0.1	00146
173	"	5.5 × 1.95	1.1	0.1未満	00160
174	"	5.0a × 2.1		0.1未満	00382
175	"	4.8 × 2.0	1.1	0.1未満	00170
その他	剥片などの未加工品			530	

その他の遺構出土滑石一覧表

表3

(1)

遺構番号	遺物番号	種類	点数	重量(g)	出土地点	登録番号
S K 2 1		未加工品	3点	6.9		
S K 2 2		"	1点	7.3		
S K 2 6		"	"	0.9		
S K 2 7	198	"	"	155.7		
"	199	板状品	"	1.9		
"		未加工品	5点	64.1		
S K 3 3		"	1点	2.6	上層	
S B 1 b		"	3点	2.6	南周壁溝	
S B 2	219	有孔円板未製品	1点	2.5	南周壁溝	00220
"	220	未加工品	"	220.0	北周壁溝	00221
"		"	2点	7.6	"	
"		板状品	"	5.3	西周壁溝	
"		未加工品	3点	19.9	"	
S B 3 a	241	抉りを有する原石	1点	29.8	柱イ	
S B 3 b	240	紡錘車	"	9.9	床面	00243
"		未加工品	"	3.9	東周壁溝	
"		"	6点	152.2	西周壁溝	
"		"	3点	11.9	北周壁溝	
"		"	1点	1.0	排水溝	
"		"	"	25.2	柱イ	
"		"	"	10.4	遺構上面	
"		"	4点	89.5		
S B 4	245	板状品	1点	11.3	東周壁溝	00257
"	246	"	"	2.5	"	00255
"	247	"	"	2.0		00256
"		未加工品	"	4.3	東周壁溝	
S B 5		"	"	5.2		
S B 6	273	白玉	"	0.1		00265
"		未加工品	"	45.8		
"		"	5点	78.1	東周壁溝	
S B 7 a	277	有孔円板	1点	11.8	北周壁溝	00280
"	278	有孔円板？未製品	"	8.7		00281
"	279	"	"	5.6	東周壁溝	00282
"	280	板状品	"	7.4	南周壁溝	00283
"		"	"	0.7	東周壁溝	
"		未加工品	"	9.3	"	
"		"	8点	73.5	南周壁溝	
S B 7 b	287	有孔円板	1点	3.8	北周壁溝	00284
"		未加工品	"	4.7	"	
"		板状品	5点	24.5	西周壁溝	

その他の遺構出土滑石一覧表

表3

(2)

遺構番号	遺物番号	種類	点数	重量(g)	出土地点	登録番号
SB8a		板状品	1点	6.5		
"		未加工品	"	24.5		
SB12		"	2点	87.9	排水溝	
"		"	4点	31.0		
SB13		"	10点	159.2		
SB14		"	2点	4.6	下層土坑	
"		"	3点	10.3	柱口	
"		"	1点	1.2	排水溝	
"		"	2点	5.2	西辺焼土内	
SB14a	322	有孔円板	1点	4.3	南周壁溝	00329
"		未加工品	2点	2.1	西周壁溝	
SB14c		"	1点	19.7	表面	
"		"	5点	33.5		
SB15	332	紡錘車	1点	12.0		00359
"		板状剝片	2点	0.9		
"		未加工品	13点	219.2		
表面採集		"	3点	72.0	SB7東側	
"		"	1点	49.1	SB8北側	
"		"	"	150.0	調査区中央東側	